
流星のロックマンX ~ もう一つの世界へ ~

SHOOTINGSTAR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマンX〜もう一つの世界へ〜

【Nコード】

N0267P

【作者名】

SHOOTING STAR

【あらすじ】

メテオGを食い止めてから約1年、スバル達は6年生になっていた。卒業するまであと5ヶ月、彼らは有意義な生活を送っていた。しかし、突如現れた謎の青年によってスバルとミソラは異世界へ飛ばされてしまう。ヒオンタード

そこでスバル達が見たものとは？

全ての出来事が絡み合い、運命の歯車が動き出す。そして、無慈悲な破壊者が眠りから目を覚ます。

現在、第4章：スバル救出編を連載中です

第1話、転校生（前書き）

僕は、このサイトに初めて投稿しました。

なにかと分かりにくい部分があるとおもいますが、どうぞよろしく
お願いします。

それでは本編どうぞ！

第1話、転校生

メテオGを止めてから1年、スバルは6年生になり、卒業するまで後5ヶ月になっていた。

星河家のいつも通りの朝、相変わらず、スバルは朝が苦手だ。

『オイ、スバルいい加減に起きろ！学校に遅刻するぞ！』

「うんあと少しだけZZZ...」

『ハア〜』

この、いつまでたつても起きないツンツン頭の少年が星河スバルだ。そして、一生懸命スバルを起こしているのが相棒のウォーロックである。

『そろそろあの委員長とかいう女が来るんじゃないかねえのか』

「はっ！そうだった！！」

ウォーロックが『委員長』という言葉を発したとたんに、スバルは起きあがった。長年、委員長と付き合っているスバルだ。彼女の恐怖は身にしみているのだろう。

「うっ〜さみ〜」

今は11月下旬だ。もうすぐ12月になる。寒くて当然だろう。

『早く準備しろ。チコクしても知らねえぞ』

「うん」

スバルは身支度をはじめ。青いパジャマをその場に脱いで、私服に着替える。のこのこ顔を洗っている暇もない。

着替えを10秒で済ませ、ドタドタと一階へ降りる。転ばないよう気を付けねばならなかった。

「おはよう、母さん」

テーブルに向かいながら、皿洗いをしている母の星河あかねに、朝の挨拶をする。

「おはよう、スバル」

あかねは、温水の水で皿を洗いながら、挨拶を返す。

スバルはイスに座り、用意してあったパンを口に運びながら聞いた。

「父さんは？」

「WAXAに行ったわよ、今日は会議があるらしいから」

スバルの父、星河大吾は宇宙飛行士で行方不明になっていたが、メテオGの中にいたところをロックマンであるスバルに助けられたのだ。いや、正確には助けられたのはスバルの方だ。大吾の力がなければ、メテオGの内部爆発から免れることはできなかつたであろう。

スバルは超特急で朝食を済ませる。しかし、口の中が渴いていたスバルは、お茶をガバガバ飲みこんでいた。おかげでトイレに行きたくなる。我慢して、学校で漏らすと英雄の名折れだ。

ピーーンポーン

トイレに駆け込んだと同時に玄関のチャイムが鳴る。彼にとって地獄行き列車がプラットホームに到着したのだ。

「ほら、来たわよ。急ぎなさい！」

そうとは知らないあかねはトイレで用を達しているスバルを急^せかす。

「ロック、来ちゃったよ・・・どうしよう？」

弱々しい声でスバルはロックに対し、ルナへの恐怖心をあらわにしながら喋りかけた。

『起きないお前が悪い！』

ウォーロックの正論にスバルは返答が出来ない。とうとう覚悟を決める。

「ロック・・・僕は今日、無事に家に帰りつけるか分からないけど、僕も男だ！覚悟を決めるよ！」

ズボンを上げながら、ハンターの中に居るウォーロックに告げた。

『そんな大げさの事なのか？』

「おっそーい、レディを待たせるなんていい度胸ね!！」

「いや、あの、ちょっと寝坊しちゃって・・・」

いつも通り遅れて家から出てきたスバルは、委員長もといルナに説教を喰らっている。ルナが先頭に立ち、それに従う様にゴン太、キザマロ、ジャツクの三人が居る。彼らはルナへの恐怖心のあまり助け舟を出せずにいた。

「あなた、いつもそればつかじゃない？反省してるの？」

「し、してますしてます」

スバルは「たすけてー」と目配せする。だが、彼らもトバッチリを喰らいたくはない。スバルのやられ様に可哀想になったキザマロが、ようやくと、自らの危険を顧みずに、ルナの説教からスバルに救いの手を差し伸べる。

スバルからしてみれば、彼の一言はナイチンゲールのようなものだった。

「委員長、急がないと遅刻になりますよ」

あの委員長でも時間という魔物を従えることはできない。悪態を吐きそうな顔をスバルに向ける。

「仕様がないわねえ〜スバル君？放課後、覚えていなさいよ？」

かくして一回は走る事となる。途中、ゴン太の腹がグググと鳴り、「腹減った〜」などと呑気のんきな事を言い出し、その場に座り込んだが、ジャックから拳骨ゲンコツをもらい走りだすゴン太であった。

スバルは、助け舟を出してくれたキザマロに小声で「ナイス！」と言った。無論、ルナには聞こえない声で・・・

学校にはギリギリ間にあつた。個々の椅子に座り込み、呼吸を整えている。

「ふう〜流石に疲れましたね〜」

「そうだねえ〜」

スバルとキザマロがそんな話をしていると、二人の近くで話しているクラスの男子生徒の会話が空気を經由して、二人の鼓膜に響き渡る。

「なあ、今日、転校生が来るらしいぜ」

「えっ！？まじでか、どんな奴かな？」

「さあな。噂によれば、その転校生を見た奴は全員凍りついたらしい」

「まるで、メデューサだな」

クラスの男子生徒二人がそんな話しをしていたのが聞こえてきた。

「転校生がくるのか。凍りつくんだって、何者だろう?」

スバルは、刑事ドラマの主人公がする素振りしながらキザマロに言う。

「そのようですね。凍りつくんですか。タダものじゃあないでしょうね」

対するキザマロは、眼鏡をクイツと動かしながら言う。良くあるパターンだ。

ホームルームのチャイムが鳴り、もじゃもじゃ頭が特徴的な育田教師が入ってくる。

「はい、みんな席に着けー」

今までしゃべっていたり暴れていた生徒たちは着席した。全員が着席したところを確認すると再び先生は口を開く。

「今日は転校生が来ている。紹介しよう。入っていいぞ!」

教室の扉が空いた瞬間、クラスのスバルを含め全員が凍りついた。

噂通りの結果だったということだ。その状態は、まるでメデューサの眼光を喰らったかのようにだ。

「ベイサイドシティから来ました響ミソラです。よろしくお願いします！」

第1話、転校生（後書き）

初めてでしたが、どうでしたか？

この意気でジャンジャン投稿しますのでこれからもよろしくお願ひします。

更新は明日になると思います。基本的に毎週土日に更新する予定です。

感想お待ちしております。

第2話、WAXAへ（前書き）

前の話は少し短いように感じたので今回は長くしたいと思います。
それでは本編どうぞ！

第2話、WAXAへ

朝の氷河期はとくに過ぎた放課後、スバル達は疲れ果てていた。その理由は二十分程前にさかのぼることになる。

帰りのHRが終わった時、廊下にごったがえしてた男女のミソラファンが、待っていましたと言わんばかりに教室に駆けこんできた。ミソラの席は、一番後ろに用意されていて、我先にと教室にダイブする。

「ねえねえ、どうしてこの学校にきたの？」

「今度の新曲はいつ出るの？」

「サインくださいー！」

スバル達は週直だったため、その応対におわれていたのだ。そして先ほどファン全員を追い返したのだ。

「疲れたあ〜」

ジャックは特に動いていたのでかなり疲れているようだ。

「育田先生には感謝しないといけないわね」

実は、あの数のミソラファンを追い返すことができたのは先生の協力があつたからである。どのような方法かというと、それはいたって簡単な物で、彼らの、彼女らの生物としての本質を利用したのだ。

「お前ら、そろそろいい加減にしねえと、校長呼ぶぞ」

育田は、平然とした口調で彼らに言った。ミソラファンは慌ただしく教室からでていく。ここの校長はキレたらすごく怖いらしい。あの数の生徒を追い返せるのにも理解できる。

「でも、本当にすごいよね〜ミソラちゃんの人気」

スバルは親友との再会を喜びながらミソラに話しかける。

「うん、ファンの人がたくさんいてくれるのは嬉しいけど流石にあの数は疲れるよ」

お返しの愛想笑い。アイドルからの愛想笑いにスバルは心を躍らせる。

「さて、週直も終わつたしそろそろ帰りましょう」

ルナは、チヨークの粉で汚れた手をパチパチ言わせながら、友人たち^{フレーザー}に威厳を持って言った。ルナは、その性格から目立ちたがり屋で、生意気だ。まあ、そこが、彼女の可愛いところといえる。

余談ではあるが、この後、作者は痛くないストレートでルナから殴られた。

筆頭ルナを先頭に立て、一向は歩き出す。ルナは、玄関まで来た時に、思い出したような面持ちでスバルを睨んだ。

「そつえばスバル君、朝の事は忘れてないわよね？」

「ゲッ！」

彼らの中に朝の恐怖が蘇った。

「まあいいわ、明日は絶対に寝坊しないように！」

あのルナがあさっり流した。これは、ギネスブックに載るほど珍しいことだ。よほど疲れているのだろう。

また、余談になるが、電波変換をしそうな勢いのルナからゴルゴンアイを喰らった作者はしばらく体が動かなかった。よくやられる作者だ。

何だかんだありながらも、一同は他愛もない話をしながら学校を出た。

「そういえばミソラちゃんはどこに住むんですか？」

キザマロがミソラに聞いた。決して触れてはならないパンドラの箱にキザマロは、触れてしまった。彼に罪はない。彼の好奇心と興味心がいけないのだ。

「スバル君の家だよ」

「「「「「ええー！！」「」「」」」」

皆の視線はスバルに向いた。

「おい、スバルそれはねえよな！」

ゴン太は、何とも言えない顔でスバルを見つめる。

「そ、そうですよ!」

驚愕のあまりにキザマロは、顎ががくがくとしていている。

「……………」

もはや、ジャックは

スバルは男達の視線よりもルナの殺気が怖くてたまらなかった。

「そこをおどき!」

「……………うわぁ!」 (スバル以外)

ルナはスバルを取り囲んでいたキザマロ、ゴン太、ジャックを強制的にどかした。

スバルは怖くてたまらなくなり一目散に逃げた。

「ちよつと待つてよ」

スバルを追いかけるミソラ。

「こら〜待ちなさい!」

それを追いかけるルナ。

「……………」

とり残された男子達はただ黙っているしかなかった。

数分後にスバルは自宅の前で息が上がっていた。

「ハアハアふう、やっと逃れられた」

「もお、速いよお、スバルくん」

「ごめん委員長が怖すぎて」

スバルが、心からの感想をミソラに言った。

「そんなことよりおばさんから聞いてなかった？」

「いや聞いてないよ。」

この時スバルは、内心で「母さん知ってたのかよ」と心のツイッタ
ーで呟いた。

『オイオイ、ミソラがいるってことはあいつもいるってことか？』

「ウォーロック？」

ハンターの中から、ウォーロックが暴れ出した。スバルは疑問符を
浮かべる。

『ポロロンよく分かったわねウォーロック』

「ハープ!!」

親友のウィザードとの再会にスバルは、感嘆する。

『お久しぶり〜』

ハープはもともとFM星人として地球にやってきたが、今はミソラのウィザードである。ミソラはハープと電波変換することによって「ハープ・ノート」になることができるのだ。

『だあー!!よりによってこんな奴と一緒に住まなきゃいけないんだよ!!!!!!』

『あらあゝこんな奴で悪かったわね〜』

ハープはウォーロックの腹に頭突きを食らわせた。

『ぐへええ〜』

「はっはっはっはっ!!!!」

二人は二体のコントに笑っていた。

PPPPP P P P P P P (メール着信音)

「メールだ、誰からだろう?」

スバルはハンターV Gを覗き込んだ。

「暁さんからだ」

「なんて書いてあるの?」

ミソラはスバルに尋ねた。

「今からWAXAに来てくれだって」

「なんでだろう?」

「さあ?」

「私も行く!」

「うん、行こうWAXAへ」

スバル達は家に一度帰ると身支度を整えWAXAへ向かった。

WAXAに行くにはウェーブライナーに乗っていかねければならない。しかもWAXAとサテラポリス

は同じ建物にあるためパスポートがないと入ることができないのだ。

1時間後

「久しぶりにWAXAに来たねえ」

「そうだね、さっ、はやく行こう」

「うん」

「やあ、久しぶりだね二人とも！」

「「こんにちは暁さん」」

暁シドウ、彼はサテラポリスのエースで彼のウィザードであるアシッドと電波変換することによって

「アシッド・エース」になることができる。一年前、犯罪組織「デイラー」との戦闘で「グレイブ・ジョーカー」の自爆を食い止めようとして爆発に巻き込まれ行方不明になっていたが、先日、怪我を完治してサテラポリスに戻って来たのだ。

「さあ、上に行こう！ヨイリー博士が待ってる」

ヨイリー博士はジョーカーとアシッドを作った天才科学者だ。ちなみに他の人の名前を呼ぶ時は必ず語尾に「ちゃん」を付ける（サテラポリスの一部の隊員は例外だ）

場所は変わり、57階

「こんにちは、スバルちゃん、ミソラちゃん！」

「こんにちはヨイリー博士！」

「さっそくだけどスバルちゃん、エースPGMを貸してくれないかしら？」

「いいですよ。でもどうしてですか？」

エースPGMとはメテオGからのノイズの影響を受けないように作られたプログラムで、流星サーバーにアクセスすることによってノイズチェンジをすることができる。

「実はメテオGが消滅したことによってノイズがほとんど発生しなくなっただけなの」

『確かに、最近ウイルスとバトルしてもぜんぜんノイズが貯まらなかつたからなあ』

「そうだね」

「そういうことになるんじゃないかと思って、擬似流星サーバーを作っておいたの」

『「擬似流星サーバー？」』

「流星サーバーを模してつくったサーバーよ」

「そんなことができるだなんてやっぱりWAXAはすごい！」

「今のエースPGMではアクセスできないからバージョンアップが必要なの」

「あ〜」

「！（ミソラちゃんの事すっかり忘れてた！）

「さつきから何を話してるんですか？」

「大丈夫、ミソラちゃん用にも作るから、その時説明するわ！」

「・・・はい」

「じゃあしばらく貸してもらつわね。あなた達は帰って休みなさい。急に呼び出しちゃってゴメンね。」

「」「さようなら」

「またね」

二人はWAXAを出て行った。

コダマタウン

「ハア、今日は疲れたね、ミソラちゃん」

「うん、帰ったらもう休もう！」

「そうだね・・・ん？」

「どうしたの？」

「いや、何か視線を感じたから」

「はやく行こう！」

「・・・うん！」

二人の様子を遠くで見ている者がいた。

「あれが地球を三度も救ったロックマンなのか？・・・入どがでる
！」

二人は迫りくる脅威をしらずにいた

第2話、WAXAへ（後書き）

感想待っています。

次は火曜日になります。それではごきげんよう！

第3話、翌朝

昨日、二人は疲れたのであろう。家に帰ってから数分も立たぬうちに寝てしまった。

そして翌朝

「ふあゝよく寝た．．．？皆まだ起きてないのか。今、何時だ？」

スバルは目覚まし時計を手に持った。

「まだ朝の5時じゃないか！！」

昨夜一番早く寝たのはスバルだった。ちなみに寝た時間は8時だ。そのおかげで珍しく早起きだった。

スバルは二度寝する気になれないのでしばらく起きていることにした。

「早起きは三文の得っていうけど．．．何もすることがないよな」

「スバル君、朝から憂鬱だね」

「作者さん！」

「そう驚かなくてもよくな」

「あつ．．．ゴメンなさい．．．」

「いや、別に謝らなくていいよ、まあ初出演だからね。」

「そつえばどうしてこの小説を書くと思ったんですか？」

「流星のゲームをやっているうちに自分なりの話の展開を考えちゃつてね。それを誰かに見て欲しくなつたわけ」

「これからの話の展開はどうするんですか？」

「それはお答えできないな。ネタバレになるからね。ちなみに俺はそういうことに関しては秘密主義だからね！」

『人の好きな人をばらしたのにか？』

「ウォーロック！いつの間におきてたの？」

『作者がでてきたところからだ』

「あのようなんでウォーロックが俺の一番知られたくない事を知つてんだ！」

『．．．．．秘密だ！』

「いや、なんでそこ秘密主義なんだよ！」

「作者さん．．．．．ばらしたって？」

「別にはらしたわけじゃないんだけど．．．．．ただ俺の友達が付き合ってるってことをいっただけ」

「それだけ？」

「それだけ……………」

『……………あいつはワンワン泣いちゃったぞ！』

「だから……………なんでお前が知ってんの！」

『教えないと言ってるでしょうが』

「真似すんな！」

「ねえ〜ウォーロック……………だれの真似？」

『それはだなあ……………』

「教えるな！」

『いいじゃねえか！』

「だめだ！絶対にだめだ！……………下手したら警察のおやつかいだ……………」

『ハア〜しょうがねな〜』

「おっと！もうこんな時間か……………じゃあ俺は失礼するよ
「！」

「さようなら」

作者がいった後

「ねえ、なんなのさっきのあれは？」

『それは……』

「言うな！」

『「まだいたの！」』

「絶対に……いうなよ」

『わ、わかった、わかった』（怖い！）

そう言い残すと作者は消えていった
スバルは再び時計を見た。

「六時半だ。下に行こう！みんな起きてるだろうし」

1階

「おはよう、母さん、父さん！」

「「おはようスバル」」

「「ミソラちゃんは？」」

「まだ寝てるわよ」

ミソラは先日コダマタウンに引っ越してきた。なぜスバルの家に居候してるのかというと、本人曰く別の理由もあるようだが、やはり一番の理由は

彼女の両親は不運なことに他界しているのだ。

しかも二人とも、まず初めに父親が、その後に母親が、つまり、ミソラは孤児なのだ。

ゆえに一人でいるのは寂しいであろうというスバル母の提案により、スバル家に居候、いや、越てきたのだ。

「おっと！もうこんな時間か！」

スバルの父、大吾はWAXAに勤めているために急いでるのだろう。なにしろここからはかなり距離がある。

「僕も学校に行く準備をしないと！」

「？、スバル今日は土曜日よ。学校は休みのはずだけど……昨日はなんだかんだで大変だったので、今日が土曜日だということをお忘れていたのだろう。」

「そうだったね！」

『オイオイ、スバル大丈夫か？お前が休日をお忘れるなんて……しかも今日は早起きだし。雪でも降るんじゃないのか？』

「まだ11月だから降らないよ」

ナイス突っ込み！

「じゃ、行ってくる」

「「いつてらしゃい」」

「あつ、私もパートに行く準備しなきゃ！」

大人達には、忙しい朝だ。

『久しぶりにウイルスバスターングしね〜か？体がなまってんだ』
そいとうオーロックはビーストスイングの練習をはじめた。

「そうだね。でもミソラちゃんが起きてからにしよう！」

『それもそうだな．．．．．』

コダマタウン某所

「星河スバルの力量はどれぐらいかな〜？ふっふっふ、楽しみだ」

謎の男の周りにはウイルスがざつと50体はいた．．．．

第3話、翌朝（後書き）

感想待ってます。

第4話、久しぶりのウイルスバスターング（前書き）

今回は戦闘です
それではごっご

第4話、久しぶりのウイルスバスター

「トランスコード シューティングスターロックマン」

「トランスコード ハープ・ノート」

二人は電波変換してウイルスを探しにいった。

もともと、スバルは一人でウイルスバスターングをするつもりだったが……

こうなつた経緯は数分前に遡る……

数分前

「おはようスバル君！」

「おはようミソラちゃん」

二人は快活な挨拶を交わした。

「おばさんとおじさんは？」

「もう仕事にいったよ！」

「ふん、そう」

「？」

ミソラは満面の笑みを浮かべた。

スバルは相変わらず鈍感である。

「今からウイルスバスターングに行こうと思うんだけど……」

「私も行く！」

スバルが尋ねる前にミソラは即答した。

それにスバルは少し動揺した素振りを見せた。

「でも、朝ご飯まだなんじゃ……」

「あっ！そうだったね。食べ終わるまでまって」

スバルはミソラの笑みに少し見とれた。

そして今に到る……

スバル達はウイルスを探したのだがなかなか見つかることができず、やっとこさ一匹みつけることができた
しかし……

「メ、メットリオ」

スバルは落胆の表情を隠しきれない

『フン！こんなカス、俺が八つ裂きにしてやる！ ビーストスイングー！』

ウォーロックはおもいきり自分の爪をふりかざした。

ウイルスはうめき声を上げながらデリートされた。

「大丈夫だよスバル君、もうちょっと探そう」

「うん……そうだね……そうしよう！」

ミソラは落胆しているスバルを励ました。

スバルはその笑顔に元気をもらったようだ。

『それにしてもよう……なんでこんなに探してんのに見つ

かねエ〜んだ』

ウォーロックの一言にスバルは再び頂垂れた。

『ちよつとは考えなさいよ！このバカロック！』

『っ！！う、うつせエー』

ハーブの正論にウォーロックは反論できなかった。故に、ただ怒鳴るしかなかったのだ。

そんな中、二人（二体？）の様子を眺めている者がいた。

「よし、お前ら．．．．．出てこい！」

謎の男はバトルカードに似たカードを上に掲げると、そのカードの中から大量のウィルスが飛び出した。

それに、先程、ウォーロックがデリートした「メットリオ」とは比べものにならないくらいに強力なウィルス達だ。具体的に言つと．．．．．

エレミィラ、ハンマリー、ムーキュブなどだ。

「あそこにいる連中を．．．．．殺せ！」

男がウィルス達に命令を下すと、次々とスバル（ロックマン）達を殺し向かった。

そのウィルス達の動きは、ただ与えられた命令を遂行にこなす機械

のように颯爽と……………

「あれ？突然、雲行きが怪しくなってきたよ」

「！スバル、あれはウイルスの大群だ！」

ウイルスが大勢いるのだ雲に見えても可笑しくはないだろう。そして、「雲」はこちらに向かってきているのだ構えない訳にはいかないだろう。

「うえ〜気持ちわりい〜！」

その「雲」はウイルスがしき詰まっていて、吐きたいくらい気持ち悪いのだ。

「ミソラちゃん、くるよ！」

「うん！」

スバルはロックバスターを構えながらミソラに注意した
ウイルスが彼らの目の前に着地した

「喰らえ！ロックバスター！」

「ショックノート！」

目の前のウイルスはデリートできたものの、次から次へと流れる滝

のようにウイルスが降ってくるので
迅速に対応しなければ攻撃を喰らってしまう

「バトルカード　ヘビーキャノン！」

スバルは一発で敵をデリートできる「ヘビーキャノン」を装備し、
ウイルスにその強靭な力を向けた

「ヘビーキャノン」は、普通の「キャノン」に比べ威力がかなり高
く、一回り重量が重い。取り回しは悪いが、その分、敵を目の敵に
できる

流石のスバルも百体近くなってくると疲れが溜まってきた

「ハアハア、．．．くっ．．．これじゃきりがない．．．
ミソラちゃんは大丈夫？」

「．．．．．私は大丈夫．．．．．はっ！、スバル君後ろ！」

「へっ？」

スバルの後ろにはハンマーを振りかざしたウイルス、「ハンマリー」
がいた

「ぐっ！」

スバルは攻撃するよりも防御態勢をとった
攻撃するには遅すぎたのだ
しかし、

「コガラシ！」

「キエエエー」

ウイルスはうめき声を上げながらデリートされた

「スバル大丈夫か！」

「暁さん！」

スバルの前には電波変換した暁、「アシッド・エース」が立っていた

「でもどうしてここに？」

「毎回WAXAに呼び出すのは悪いと思ってなあ〜バージョンアップしたエースPGMを届けに来たんだ

が、そしたら、お前達が降り注ぐウイルス達と戦っていたんだよ」

回想

「スバルの家は……確かこの辺だったよなアシッド」

『……………』

「うん？、アシッド？」

暁は道に迷っていた。

（お前何歳だよ！）という感じでアシッドは呆れていた。

何しろ、スバルの家は目の前なのにきずかないのだから呆れて当然である。

「しかたない、公園に行つて、人に聞くか．．．」
『！、シドウ、特殊メガネをかけて見てください』
「えっ！、あつ、ああ」

特殊メガネはスバルの持つビジライザーと同じ電波が見えるメガネだ

「ああっ！、スバル達ウイルスと戦つてるじゃないか！！」

『しかもあれは異常な数ですね、加勢した方がいいのでは？』

「そうだな、やはり、ヒーローは遅れてでてくるもんだな！」

『．．．．．』 (幼稚だ)

現在

「．．．．．っという訳だ」

「「．．．．．」」

「うん？どつしたんだ二人とも？」

「あの、エースPGMを．．．．．」

「ああっ．．．これだ！それから．．．．．」

『スバル行くぞ！』

「うん！、ハアアアア！．．．ファイナライズ！ブラックエース
！」

暁は説明したところを遮られたのを根に持った

「おい．．．ちょっと．．．．．」

「ノイズフォースビッパクエンド
NFB BEギヤラクシー」

ノイズフォースビックバン ブラックエンドギヤラクシー、これは
ブラックエース最強の必殺技で、
黒いエネルギーボールの中に敵を閉じ込め、それをソードで斬って
大爆発を起こさせる技だ

周りにいたウイルスは全滅した。

第4話、久しぶりのウイルスバスターング（後書き）

なんかダラダラになったので2話にわけます。

「．．．おい！」

おお君は確か．．．

「俺をもつとだせ！」

大丈夫だ！出番はある。それに君を毎回だしてるじゃん

「話の終わりだけじゃないか！」

それじゃまた来週！感想待ってます！

「話を逸らすな！」

ああ〜うるさい．．．

第5話、伝えたい事（前書き）

更新遅れてすいません。中3なんで受験勉強が忙しいものでして・
毎週更新は難しかもしれません。それでも読んでくださる方には感謝です。

今回は、ロックマンがブラックエンドギャラクシーでウイルスを掃いた後の出来事です。それでは本編どうぞ！

第5話、伝えたい事

対ウイルス戦から10分後、スバル達は公園にいた……

「メテオ（流星）PGM？」

スバル、ミソラの声はもった。

「ああ、これは今までスバルが使ってたエースPGMを改良したものだ」

「そんなら名前変えなくてもいいだろ！エースPGMC（Custom）なんかでいいだろ！」

ウォーロックにそんなネーミングセンスがあつたとはおもえない。だが、そんな事は気にせず、暁は正確に答える。

「単に改良しただけではない、これはジョーカーPGMを結合させ、本来、エースPGMでしか発生しないノイズチェンジと、ジョーカーPGMでしか発生しないノイズチェンジが両方できるようになった。そして、ファイナライズ、ブラックエースとレッドジョーカーどちらとも変身可能になった」

「ノイズは貯まるんですか？」

スバルはこのPGMの核心をつく、本来、エースPGMはノイズの影響を受けないために作られたプログラムだ。

「バトルをやっているれば普通に貯まる、このメテオPGMは周辺に若干ノイズを発生させることができるんだ」

若干、つまり害にならない程度のノイズを発生させる事によりバトルでノイズが貯まりやすくするという事だ。

「じゃあ、ミソラにも渡しておこう」

「私も変身できるんですか？」

「変身というよりパワーMAXだな」

パワーMAXというのは、ドラゴンボールの、スーパーサイヤ人のようなものだ

ちなみに、先日言っていたミソラ用のPGMも完成したようだ

「一通りしゃべったな、じゃあ、俺はこれで」

「さよなら」

「おう！」

暁がいった後

「ねえ、スバル君今から展望台にいかない？伝えたい事があるの」

「うん いいよ！」

ウォーロックは『あゝあそこに行くのかよ』とただをこねるが、ハーブの飛び蹴りを喰らい何処かにつれさられていった

．．．変な話だがハーブに足はあるのだろうか？

話を戻そう．．．

展望台

「ねえ、私達ここで初めて出会ったんだよね」

「うん、僕が父さんを事故でなくして落ち込んだ時、ここにミノラちゃんがいたんだ」

「お母さんを亡くして泣いていた私に、「ブラザーになって下さい！」って言ったんだ」

スバルはその頃を思い出し照れたように赤面した。

「．．．前から言おうと思ってたんだけど．．．」

流石のスバルもそこまでいくと事を察したようだ。先程より顔が赤い。

「スバル君の事が……」

ズガアーン

車が炎上している……良い雰囲気か台無しだ。

二人の注意はそちらに向いた。

スバルはビジライザーをかけた。長年、この手の事件に関わってきたスバルだ、だいたいの推測は思いつく。

「っ!!」

スバルが見たのは1年前スバルが倒したムーの電波兵士エランドだった。数は5体。

「ミソラちゃん……」

「速くないかね」とね

「後ででいいの?」

「今はそんな場合じゃない」

「そつだね・・・行こう!」

二人は電波変換して現場に向かった。

第5話、伝えたい事（後書き）

ちなみにノイズチェンジはエースが、リブラ、コーバス、キャンサー、ジエミニ、

オヒュカスです。ジョーカーはキグナス、オックス、バルゴ、クラウン、ウルフ

になります。ブライは例外です

次回はいよいよ謎の男が姿を現わします。ちなみにオリジナルキャラクターです

感想まっけます

第6話、罨

スバル達はエランド四体を倒し、最後の一体を追いかけていた

「くっ!!速い!!」

『オイ!この調子じゃあいつまでたつても追いつけねえぞ!』

「分かってる・・・」

一年前、スバル達が戦ったエランドに比べ、現在、戦っているエランドは戦闘力が数段上である。

第一に装備が違う、一年前のエランドは装甲も薄かったし武器も片手剣と盾のみだった。

しかし、今のエランドは体にそれなりの装甲が施され、片手剣はサーベルになり、盾は厚く中心に十字架

の紋章が描かれている。強力な上に一回り大きいランスも追加され、丁度、16世紀の騎士のような装備になっている。

「こっちからいくぞ!バトルカード!プラズマガン!」

プラズマガンはヒットすると敵を麻痺状態にするプラズマ弾を発射する、これは、敵を足止めする時に使われるバトルカードなので攻撃力は低い。

ロックマンはプラズマガンを使って足止めを狙うが、分厚い盾によりその攻撃は憚れてしまう。

「なっ！！」

ロックマンの隙を見てエランドは巨大なランスで攻撃を仕掛けようとしてきた。

ランスはブレイク性能が付いているためバリアやシールドでは防ぎきれない。

「ショックノート！」

ハープ・ノートの不意打ちを喰らい、エランドは後ろに仰け反る。

「今だ！バトルカード！ブレイクサーベル！」

エランドはブレイク性能が付いているサーベルの攻撃を直に喰らい、その場でデリートされた。

「ありがとう、ミソラちゃん」

「どういたしまして」

先程の戦闘で手助けしてもらった事の礼をスバルはミソラに言う。

「オーイ！」

向こうから暁が電波変換したアシッドエースが駆けてくる。

どうやら先程の車体炎上で、通報があったようだ。サテラポリスの男性隊員が炎上した車の辺りを調べている。暁はその応援に来たよ

うだ。

「お前達で事件の要因である電波体はデリートしたのか？」

『ああ、かなり手こずったがな』

ウォーロックが自慢げに答える。

暁は残念そうに「そうか．．．」と言った、本人は「ヒーローは遅れて登場する！！」というのがポリシーらしくて、スバル達が既に片していたことで自分の出番が無くなったことによる事で残念がつているのだ。

スバルとミソラは、そんな暁を見て苦笑するしかなかった。

だが、そんな雰囲気も長くは続かなかった。

「．．．あのナイトメア5体を倒したのか．．．流石は地球を3度の危機から救ったロックマンといったところだな．．．まあ、所詮は試作兵器のナイトメアだな．．．」

「っ！！」

いつの間にもやらの暁の後ろに見覚えのない17〜19歳がらみ青年が立っていた。服装は茶色のボロボロのマントを着て、顔の下半分はマスクをしているため見えない。瞳の色は漆黒の黒で、髪の毛は銀髪だ。髪型は少し天然パーマがかかっており、全体的に髪がたっている。髪がたっているといってもスバルのように特徴的な髪型ではない。

そんな容姿の青年にスバルが問う。

「え、えくと……君は？」

「……………」

何も答えない。

青年は静かに暁の方を向くと……

「…………どけ、白パト！」

「な、なんだとー!!」

暁はサテラポリスのエースだ。でも、この変な青年に白パト扱いされたのだ、エースとしてのプライドが許さはずがない。

「お前…………!!」

「聞こえなかったか…………どけとっている！」

「…………あ、ああ」

殺気をこめた眼光で怒る暁を黙らせた。そうとうな実力者だ。

「…………ていうか私達の事見えてるの！」

ミソラは青年に問う。

だが、その答えはスバルが返してきた。

「何言ってるだよミソラちゃん、だってこの人電波体じゃ・・・ない！」

普通、電波体は周波数というものを発しているため、その周波数で遠くにいる電波体の存在も確認できるのだが、この青年の場合は電波体でないため、そのような周波数も感じられないのだ。

『どついでこつたおめえ！ここはウェーブロードだぞ！電波体でない奴がのれるはずがないんだ！！』

ウォーロックが怒鳴りながら問う。

「.....」

だが、やはり青年は答えない。

『なんなんだこいつは？.....』

ウォーロックが悪態をつく。

青年は何も言わずにいたが突然、腕を天に向けた。

「「「?????」」」

全員が疑問符をつかべる。

青年は「パチンー!」と指を鳴らした。

すると……

「「え!」」

スバルとミソラの下に大きくてドス黒い穴が空いた。

「「うわああー」」

地面に穴が空いたのだ。当然ながら下に落ちる。

「お前いつたいスバルとミソラに何をした!」

残された暁は青年に怒鳴り問うが、やはり何も答ええない。

『シドウ!』

どうしたことが、いつもの冷静なアシッドは今は慌てている。

「どうしたアシッド!」

『……ロックマンとハーブ・ノートの反応が消えました……』

「何!お前まさか!」

暁は青年を睨みつける。

「白パトは知る必要はない!失せろ!」

「なっ！・・・ぐがっ！！」

青年は暁の前に颯爽と移動し、バトルカード、マミーハンドのようなものを使って暁を気絶させた。
ほんの3秒程度で勝負は決まった。

暁が気絶したことを確認すると青年は黒い穴の中へ消えた。
青年がそこから消えると黒い穴も無くなった。

実は、先程のエランドもウイルスも青年、つまり謎の男によって仕組まれていたのだ。彼はスバル達が自分に反抗しないようにエランドやウイルスで十分に体力を奪った上で自分の世界に連れていったのだ。

つまりエランドやウイルスは罠だったのだ。

第6話、罫（後書き）

ちなみにあの車はリアルウェーブです。炎上するはずがありませんのでバトルカードを使ったんだよね？謎の青年君！

「・・・そうだ、あの車には誰も乗っていなかったからないや、誰も乗ってないからって火をつけることはいけないよ車の持ち主、迷惑だよ」

まあ、どうでもいいけどね。じゃあ、また来週

「・・・どうでもいいのかよ！」

第7話、異次元世界

ザーザー（雨の音）

ザバーーン（波の音）

「……………はっ!」

スバルは目を覚ました。その時に飛びこんできた風景は、鉛色の空、絶え間なく降り続ける雨、ビュービューと吹いている風によって自分の目の前で荒れる波、雨によってグツチヨリした砂浜、そして、スバルの後ろには誰も住んでなさそうなボロボロの母屋があった。リアルウェーブではない本物だ

「ここは……………どこ?」

そこは、スバルには見慣れない所だった。スバルの電波変換は保たれているので雨による冷たさこそ感じないが、そこは何か冷たい霧困気が漂っていた。空にはしっかりとウェーブロードがあるが、スバル達の世界にあるものに比べて、すごくもろそうだ

「……………あれ、僕は確か黒い穴の中に落ちていったと思うんだけど……………だめだ、何も思いだせない……………そういえばミソラちゃんは!」

スバルは辺りを見回した。すると向こうにピンク色の小さな存在が見えた、幸いな事にミソラは自分より数メートル離れたところにいた

「ミソラちゃん!」

スバルはミソラを見つけると彼女のところに向かって走りだした。
しかし

「ぐっ……体が重い……」

スバルはその場に倒れこんだ。それと同時に電波変換も解除される
冷たい雨がスバルの小さな体をうつ

「ぐはっ……ミソラちゃん……」

スバルはミソラの大事をはいつくばってでも確かめに行こうとする

「はあはあ……ミソラちゃん……無事でよかった……」

あれから何分たったであろうスバルはミソラの所にやっとかつこの
思いでついた

ミソラは、今は気絶している、どうやら先程のスバルと同じように
穴から抜けだした後、ここに落ちた衝撃で頭をうったようだ。電波変
換はとかれている

スバルはミソラの無事を確認すると、その場に仰向けになった
しかし、そこでスバルはおかしなことにきずく

「っ！！ビジライザーもかけてないのにウェーブロードが見えてる」

普通、生身の人間は電波を見ることはできない。しかし、今のスバルにはビジライザーもかけてない、電波変換もしていない、なのに見えているのだ

「どうして．．．．!」

突然、スバルの背中に明るい光が当たる、その明るい光は車のライトだった

車はスバル達の所にどんどん近ずいてくる

「．．．．．」

車はスバルの前で止まった

それは随分と古い型の車だった、スバル達の時代では車は電波化、所謂リアルウエーブだ。車の他にも、

電車、建物、学校にある桜の木までもが電波でできている

だが、その車は今では在りえないガソリン車だ。もくもくと煙を出している排気口がそれを物語っている

リアルウエーブの車は車輪がなく宙に浮いているが、それは車輪付きだ。それらのすべては23世紀では在る筈のないものだった

車のライトに照らされたせいか、それとも、もくもくとでる車の排気煙を吸ったせいか、ミソラが目を覚ました

「う、うん．．．スバル．．君?．．．うわっ!眩しい!」

目覚めてすぐに明るいライトを見たのだ眩しくなって当然である

そんなミソラを知ってか知らずか、車の中から背の高い男が出てきた

そして、その男は明るいライトに照らされながらこう言った

「待ってたよ・・・君たちを・・・」

第8話、プレールビーチ

20代前半に見える男性は金髪でブルーの瞳190cmはあると思われる巨漢ではあるが、とても爽やかな顔をしていて性格が顔にあらわれていると言ってもいいだろう

しかし、そんな男をいかにも怪しいという感じで見つめるスバルとミソラ

「そ、そんな怖い目で見ないでくれよ・・・」

爽やかな顔をした男は怪しい視線を注ぐスバルとミソラに苦笑する

「ま、まあこんな大雨なんだから・・・お茶でも飲んで温まりなよ・・・」

そついうと男は車を止めた横のボロボロの母屋に案内した

「うっわー・・・ボロすぎじゃん」

ミソラが、そのあまりのボロさに絶句する

「すまないね、あんまりここ使っていないからさ」

男は蜘蛛の古巣をはらいながら言った

「俺はルーカス、よろしくな！」

ルーカスという男は快活に自己紹介をした。それにつられたスバル

とミソラも自己紹介をする

「あ、僕は星河スバルです」

「響ミソラです、よろしくお願いします」

『俺はウォーロックだ!』

『ポロロン、私はハーブ』

「うお!」

二体が突然ウイザードONになって出てきたので二人は驚いた、ちなみに今までずっと出て来なかったのでスバルとミソラは二体の事をすっかり忘れていたのだ

雨漏りがところどころで、ピチャピチャと音を鳴らしている。この母屋がとてもボロイことが良く分かる

「ま、そこに腰かけてくれ、飲み物は何がいい? コーヒー、お茶、オレンジジュースがあるけど」

ルーカスは、埃かぶったテーブルと、イスに座るようにいった

「私、コーヒーで!」

「僕はお茶でお願いします」

「OK、任せとけ!」

もはや、さつきまでのルーカスに対する態度はいつたい何だったの
だろうか、二人は完全に懐いている

「ホイ、できたぜ！」

ルーカスが、コーヒーとお茶を煎れてテーブルによつてきた

スバルとミソラにマグカップを渡すと自分も彼らと対面した席に座
った

「・・・このコーヒー、美味しい」

ミソラがコーヒーの味の感想を述べる

「だろ！この国のコーヒー豆は世界一だったんだぜ！」

あくまで語尾が過去形だ

「ああ〜その前に、この世界の話をしなきゃいけないな・・・」

ルーカスが頭を掻きながら呟く

「この世界の話？」

スバルがルーカスに問う

「うん、まあ・・・いいにくい話なんだけどさ〜」

スバルは真剣に、ミソラはコーヒーを啜りながら聞いていた

「この世界の人類は滅んだ・・・」

「え!!!!!!」

スバルはあまりにも驚いて椅子から立ち上がり、ミソラは啜っていたコーヒートを吹き出した

第9話、滅亡した世界（前書き）

明けまして、おめでとうございます。

久しぶりに投稿しました。

内容的にグダグダです。歴史が苦手な人には、かなり辛いと思います

第9話、滅亡した世界

ルーカスは、人類滅亡までの世界の出来事をスバル達に語り始めた。「忘れもしない．．．西暦2020年、4月9日、午後2時半、数千年に渡って築かれた人類の歴史はたった一発の光線で幕を閉じた．．．」

それを聞いたスバル、ミソラ、ウォーロック、ハーブの四人は、哀れむ様な、悲しむような目でルーカスを見つめた誰も喋ろうとはしない。

当然ながら誰かが死ぬ、文明が滅ぶ、何かが亡くなるという事は悲しい事であると言えよう。例えそれが、当事者でなくてもだ。互いを憎み、殺しあう戦争も、勝利したその時は、喜ばしいかもしれないが、後になってみれば、自分達は、とり返しのつかない事をしてしまったという後悔が生じてくる

ルーカスは、自分達、人類はもう滅んだ、厳密に言えば滅ぶ寸前の世界に自分は生きているのだ、という自覚はあるようだ。その証拠に、哀れみや、悲しみの視線を送られても、気にしていないようだった

彼は世界地図を広げると、再び語り始めた

「1970年代から始まった東の大国アメリカ合衆国と、西の巨大国ソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）との直接の戦火を交えない厳しい対立が続いた。俗に言う、冷たい戦争、冷戦というやつだ。両国とも当時の最強兵器である核ミサイルの量産、非人徳的な研究、

植民地の拡大などを続け、ついには、あと1分で世界が終る、なんて事もあった」

ルーカスは、アメリカと、ソ連の位置を指でさしながら口を動かしている

「まあ、その時は何とか免れたものの、結局、世界は終わってしまった．．．争いを続けた人類の末路だ

よな．．．話を戻そうか．．．東西冷戦が終結したのは1995年、それまで対立していた両国は終戦

条約を結び、世界の平和を願って国際平和機関「国際平和連合」を設立し、以後20年間は争いが起きない平和な世の中になった．

．．．というのも、国連（国際平和連合）が管轄していた国際平和維持軍「K・P・M」が世界中の紛争や、テロリズムを武力で鎮圧したいたからだ、と、俺は思う．．．まあ、そんな仮の平和も長くは続かなかつたがな．．．悪い一方的に話てまった．．．」

やっと終わったと思ったスバル達は安堵の息を吐くが、まだ話は終わってないかった

「じゃあ、続けるぞ、今が2023年だから、丁度3年前だな、俺はその頃KPMに所属していたが、他の隊員達とゴチャゴチャあつてね．．．部隊から抜けたんだよ、そして俺はここ、ボスニアに引越し、終末の日を迎えた．．．あの時、俺はテレビを見ていたんだ、そしたら突然、ニュース速報に変わって．．．『臨時ニュースをお伝えします！落ち着いて聞いてください、先程、ソ連から大量破壊兵器、DESTRUCTORが世界に向けて発射されたという報告がありました。これにより、皆さんは、できる限り地下深くに逃げてください！．．．』って感じでね．．．俺は地下のシェルターに逃げ込んだ、こうなる事を予想して前々から作っておいた

んだ。世界が機械の誤作動で滅ぶなんて切なすぎるけどね．．．ポ
スニアは、ものすごく小さな国だから、そこまで影響はなかった。
だから、俺はここで生きていってな訳よ．．．」

ルーカスの言葉は笑っているが、顔は笑っていなかった

「ふう〜ここまでの経緯は分かってもらえたかな．．．って、あれ
？」

スバルは理科が得意分野だが、社会はピッタリにダメだ。もの凄く
疲れている、理系の人間にとっては、非常に厳しかったであろう。
他の面々もまたしかり、ウォーロックは完全にダウンしている、ハ
ーブは、

『もう、無理！』という顔をしている、ミソラも同じような感じ
だ。

ルーカスは速く喋り過ぎたのだ、その事に今更気付いたのだ

「わ、悪い．．．また、一方的に喋ってしまった．．．俺は歴史に
なると燃えてしまうんだ。」

つまり、スバルとは逆の人間という事になる。ちなみに、作者も文
系だそうだ

「さてと、それじゃあ．．．行くか！」

ルーカスが唐突に大声を上げたので、皆、驚いて彼の方を見た。

スバルが呟く

「行くって・・・どっか？」

「決まってるじゃん！俺達のアジトだよー！ー！」

第9話、滅亡した世界（後書き）

現在の歴史とほんの少し似ている所がありますが、気にしないでください。

次は、話が少しだけ進むと思います
それでは、また次回！！

第10話、プレール湾内海底施設

今にも黒い生物が出てきそうなキッチンの下の壇に小さな扉が四つあった

ルーカスは、その中から左から二番目の扉を開けて、中の荷物を取りだした

案の定、その時にドス黒い生物が出てきた。

ボスアニアは、南アメリカの赤道直下の国である。一年中を通して気温が高い、そのためか黒い生物のサイズもやけに大きい。

女性陣が驚くのは言うまでもないが、スバル、ウォーロックまでもが驚愕した。

「ギャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

「オイ、そんな驚かなくてもいいんじゃないか？」

「いや、普通、驚きますよ。こんなでかいの見たら」

スバルは虫は大丈夫だ、ウォーロックもたぶん大丈夫だ、ミソラはだめだ、ハーブもまたそうだ。

しかし、ただでかいと言っても、常識を超えている。ルーカスの靴のサイズと同じくらいだ

ルーカスの靴のサイズは28、29cm・・・考えたくもない

ミソラは失神しそうだ

「ルーカスさん・・・早く潰してください・・・」

失神しそうになりながら、ミソラがルーカスに黒い生き物を撃退するように入った

「この大きさの奴を潰したら、酷い事になると思っぜ」

ミソラ、ハーブ、スバルはアウトだ。ウォーロックはなんとか持ちこたえた、彼は、この気持ち悪い生物を見た事が何度かあった。しかし、ここまでの物となると流石の彼でもダメだろう。

そんなこんなしている内に奴はどこかえ消えていった

「さっ！気を取り直していくぞ！」

ルーカスは何ともない様子だ

先程、荷物を除けた所の床に、一人ぐらいは入れる扉があった。そして、そこを開けると、梯子があつて地下に続いているようだった
そこに一人ずつ入っていった

ようやく地面につくと、果てしなく地下通路が続いていた。若干、寒気を感じる所である

「ここは、プレール湾の下だから、少し寒いかもしれない、それに、空気も薄い、まあ、当然だな、何しろここは海底だから」

ルーカスは歩きながら、こここの説明をした

そして、この辺りの地理について語りだした

「ボスニアは、北のパナマと南のコロンビアに囲まれた小さな国だ、東にカリブ海、西に太平洋といった二つの海に挟まれた国でもある。ここ、プレール湾は、三角形に欠けた形になっていて、湾を出るとカリブ海になる。昔は海賊なんていう危ない輩もいたがな。ボスニアは、コーヒー豆や、パイナップルなんかが良く獲れる、そのおかげで、今、やっていける訳だ」

ルーカスが一通り話し終わると、ウォーロックがあからさまに質問した

『そつえばよお、この国の電波技術はそんなに発展してんのか？ スバルがビジライザーをかけて無くても電波が見えるって言うからよお』

ウォーロックがその質問をした時、ルーカスの目がキラんと光った。スイッチがonになった

「ふっふっふ、知りたいかい？」

『ゲツ！！』

「先程、冷戦の事について話したよね、冷戦っていうのは戦争だけじゃなくて、宇宙開発、電波技術開発ロボット技術開発、などのハイテク産業の競争もあったんだ、おかげで、たったの二十年で、電波が見えるようになったり、ウェーブロードが整備されたり、ウイザードができたりしたんだからね・・・人間はほとんど居ないけど・・・」

流石にこれには全員驚いた。何百年もかけて作り上げられた電波技

術をたつたの二十年で電波が見えるまでに発展するとは、冷戦の激しさが目に見える、電波技術の面ではスバル達の世界よりも何年か上を行っているのだ。

今日でも、冷戦によって得られた宇宙技術は今の時代の基礎となっている。あくまで現世の話だが。

「おっ！着いた、着いた！」

目の前には、小さなドアがある、これは自動式のようだ

ルーカスはIDカードを取り出すと読み込み口にそれを通した

「このドアわね、実は26枚のカードがないとトラップはクリアできないんだ、これは、そのマスターカード、これ一枚で全部のトラップをクリアできるようになっているんだ。」

ルーカスは奥に進みながら説明した。確かに、一つの部屋を出る度にカードの読み込み口があるのはそのためである。トラップがどういった物なのかは気になるが。

施設の最奥部に来ると、一人の男がパソコンを弄くってた

「おい、連れてきたぞ！」

ルーカスがその男に呼びかけた

第10話、プレール湾内海底施設（後書き）

冷戦というものは、現在の歴史と少し違います。そして、ボスニアという国は存在しません。空想の産物です。
次回は明日投稿すると思います
それでは！！

第11話、行動目的

パソコンを弄くっていた男はこちらを見ると自己紹介を始めた

「俺のコードネームはジャッカー、職業は軍事技術者」

ジャッカーという男はてっとり速く自己紹介を終わらせると再びパソコンを弄くり始めた

「こいつ、前に任務に出た時のコードネームをそのまま使ってるんだよ、こいつが技術者に成る前の話だけど・・・」

ルーカスが代わりにジャッカーの自己紹介をした

「そんな、どうでもいい話は置いて、さっさと目的を話したらどうだ、ルーカス」

「ああ、分かってる・・・ええと・・・」

ルーカスが何から喋ればいいのか迷ってる間にジャンカーが口を開いた

「もういいルーカス、俺が話す、お前ら、KPMの事は知ってるな」

「は、はい・・・」

スバルが代表で返答した

「今、奴らはこの国に駐留している、あいつらの思惑を阻止してくれ」

「は、はあ．．．」

スバル達は呆けた顔をしながらしぶしぶ答えた、突然、意味の分からない事を言われたのだから呆けて当然だろう

ルーカスが付け足す

「君達がこつちの世界に来る前に見覚えのない誰かと接触しなかったかい？」

ルーカスの質問に全員がうなずく、見覚えのない誰かというのは恐らくこつちの世界につれてきた張本人の事だろう、つまり、あのリアルウエーブの車を炎上させた青年の事だ

「やはりそうか．．．」

「あの、誰なんですか、あの男の人は？」

スバルが現実世界（これからはスバル達の世界の事を現実世界、ルーカス達の世界を異次元世界と呼ぶ事にする）で会った謎の青年の事について聞いた

「恐らくKPMの隊員だろう．．．」

『『『『えっ！！！！』『』『』』』』

これで何回目だろうか、再び四人から驚愕の声が上がる

『オイ、そのKPなんたらという軍隊は平和維持の部隊なんだろう、

「どうしてそんな事をする必要があるんだ？」

「今度はウォーロックがルーカスに聞いた」

「奴らの本当の目的は何なのかは不明だが、これだけは言える、奴らの今のターゲットは、お前達だ、特にスバル、ウォーロック、お前は以前、オーパーツを使用したことがあるだろう？」

「はい．．．それと何か関係しているんですか？」

「ああ、お前ら、ムー人という種族がいた事は知っているだろう？」

その時、四人とも一人の少年を思い浮かべた、赤い瞳に、ボサボサの銀髪、絆の力を否定するムーの末裔ソロだ

「ムー人は戦いを好むものと、好まぬものに別れた、好戦的になったムー人は自らの大陸を空に浮かべた平和を望んだムー人は隠れながらも平和に暮らした．．．これが後世に引き継がれたムー人の歴史だが、実は、ここで語られてない事がある、それは、好戦的なムー人が滅ぶ前に、一部の人間がこちらの世界に流れ込んできたという事だ、当時、彼らの間では異次元空間説というのが持ち上がっていた、そして、ムー大陸が海の底に沈んだら、生き残った好戦的ムー人の一部はこつちに逃げてきた、その子孫は今でも生きているが数は少なくなっているな．．．それと、異次元への行き方だが、その際に用いるのがオーパーツ、それを一度使うと以後二千年以上は自由に通行できる、その事を知ったPKMの連中はあっちの世界にあるオーパーツを使って何かを企んでいるんだろう、だが、オーパーツだけでは意味がない、オーパーツの力を覚醒させるには、スバル、ウォーロック、お前達が必要な訳だ」

ルーカスは二人に真剣な眼差しで言った、まるで、これからはお前達を狙ってくる連中がいるぞと言っているようだった

スバルはその事を聞いて、ゴクリと唾を飲んだ

「いままでどつりに戦って勝てる相手じゃない．．．もし、勝てないと悟ったら、その時は全力で逃げてくれ、頼んだぞ」

二人とも了承したようだ、コクリと頷いた

しかし、そこでスバルが二つ質問をする

「でも、どうして都合よくここに落ちることが出来たんですか？落ちる場所は敵が決めるから、あっちにとって有利な所に指定できると思うんですが．．．」

理系のおかげか、相変わらずスバルは洞察力がいい

「ふつ、そんなのあいつらのサーバーに介入してちよこつと細工すればいいだけの事だ」

スバルの質問にジャツカーが答えた、なるほど、この男のコードネームがジャツカーという意味が分かる気がする

ルーカスが再び口を開く

「もういいかな？」

「はい」

「よし、じゃあ今日はゆっくりしてくれ、明日に備えてね、部屋に案内しよう」

ルーカスが先頭に立って歩きだした

この時、スバルは胃の部分にムカムカを感じていた

第12話、日常とは離れた朝（前書き）

最近、受験勉強が忙しいので、更新速度がとても遅いです。すみません。高校受験が終わったら、もっと速く更新できると思います。それと、PKM、あれは、正しい表記では、KPMでした。間違えて、すみません。

第12話、日常とは離れた朝

このアジトはずっと学校の廊下をずっとのばしたような物でその通路の横に幾つかの小部屋がある事で成り立っている。

ルーカスが先頭に立ち部屋を案内していた。

「右がスバルの部屋で、左がミソラの部屋ね」

扉はやけに不愛想で、ただ単に自動式のドアがついているだけだった。

「じゃあ、何かあつたら呼んでくれ」

ルーカスはそう言うと、もと来た道を歩いていった。

「おやすみ、スバル君」

「うん、おやすみ」

簡単な挨拶をすますと、それぞれの部屋に入っていた。

スバルは部屋に入ってみると、病院で使われてそうな鉄製のベッドと、木でできた古机が置いてあった。上には電気が付けてあるが、電気なければ何も見えない状態だ。ここは海底なので窓なんて付いていない。そしてさらに、なんだか押し入れのようなくさいにおいがする。こんなにも鼻につくにおいがしている夜に寝ることすらかなわない。全体的に、物置き部屋を無理矢理に寝室にした感じだ。

スバルはベッドに腰掛けると「ふう〜」と一息ついた。そして再び部屋を見渡した。

何も無い、異臭がしなくて、暗くなければ、閑静でとてもいい部屋なのに、とスバルは思った。

突然、ウォーロックがウイザードonになつて出てきた。彼の不器用で、乱暴な性格は、場の雰囲気明るくする効果がある。まあ、そこがウォーロックのいいところなのだろう。

「なにしくてやがんだ？スバル」

相変わらず、彼は空気を読むことができない。だから、彼は訳の分からん質問ばかりしてくるのだ。

けれども、スバルはウォーロックと伊達に長い間、一緒に戦ってきた訳ではない。そういう、ウォーロックのがさつな性格は慣れっこだ

「だって、今日疲れたじゃん〜」

考えてもみれば、今日はいろいろと忙しかったはずだ。ウイルスの大群に襲われたり、車が燃えたり、謎の男によって異世界に飛ばされたり、本当に、スバルにとっては忙しい一日だった。

しかし、一日の反省も、ある事によって遮られてしまう。突然、スバルはお腹の部分が痛くなり、横にならないとたまらないくらい、きつくなった。

「オイ、スバル大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫・・・もう寝よう」

『そうしな．．．．．』

スバルは予め用意してあった毛布を被り、静かに目を瞑った。

ボスアニア、某所

そこには、二人の屈強な男戦士と一人の可憐な女戦士がいた。部屋には大きな窓と、本棚、軍旗などがある。完全に将校の部屋だ。机にどっさりと貯まった書類を除けばの話だが。

一人の男は立派な椅子に座っており、赤色のベレー帽に将校の着る軍服と、幾つもの勲章を下げている。

もう一人は、鋭い目つきに白い髪の男、以前、スバル達を異世界へ連れてきた張本人だ。

女の方は、赤い髪に割とルックスのいい顔、背は高く、スタイルがとて面白い、だが、可憐な見た目とは裏腹に、眼光がすどく、戦士としての覚悟が現れている。

いずれの者たちも年齢はそうとう若く、17〜19歳くらいだ。普通なら学校にいつて勉強している年齢である。

月明りに照らされながら、レッドベレーの男が銀髪の男に語りかけ

た。

「やはり、まだ見つかってないようだな」

銀髪の男が将校に対しての敬意を振るわず、荒い言葉で答える。

「ああ、こっちに連れてくる際に思わぬ邪魔が入った、おかげで、座標ポイントが狂ったよ。」

「ルーカスの仕業だな」

「そうだろうな、あん畜生、現れては消え、現れては消え、まるでルパン三世だ」

当然だ、外に出ることなんて全くないのだから。

「はっはっはっ、まあ、とにかく速めにあいつらのマジトは見つけ出すべきだな」

「いや、その必要はない。俺に考えがある。」

それを聞くとベレー帽の男はニヤリとした。

「期待してるぞ、ロゼット」

ロゼットと呼ばれた銀髪の男は「任せろ！」という顔をして部屋を出て行った。

「ジン、これ今日の分の書類とテキストね」

スタイルのいい女が机の上に書類をどさつと置くとハンターV Gを取り出して、テキストデータを送った

「はあゝあ．．．」

ジンと呼ばれたベレー帽の男はため息を吐いた。

女はそれが終わると、ロゼットの後を追っていた。

「たく、女とは分からん生き物だ」

彼の唯一苦手な物、それは女性だ。

所変わってその翌朝．．．

ミソラとルーカスとジャッカーの三人は厨房で朝食を摂っていた。朝食とは言っても、あまり豪華な物ではない。何かの肉を焼いただけのものだ。理由は、いつもK P Mに見つからないように隠れて暮らしているため、町に買い出しに行くのは月に一回くらい、その時に日常必需品や食糧を買い込むのだが、その食糧が昨日で底をついてしまい、早朝、町に買い出しに行ったルーカスがK P Mの哨戒兵に見つかってしまった。命からがら逃げてきたのだ。おかげで何も買ってきてない、だから、何かの肉を焼いたのが朝食なのだ。

ルーカスとジャッカーは、旧軍人なのもあって食べるペースが速いが、ミソラも同じように体力を使う仕事、歌手をやっているので、二人に負けなくらいのペースで食べ終えた。

ミソラが何かを焼いた肉についてルーカスに質問した。

「この肉おいしいですね、何を焼いたんですか？」

「知りたいか？」

ルーカスがあまり喋りたくなさそうな顔をした

「蛇だ……」

「へ、蛇!!!!!!!!!!!!!!」

ミソラにとって、それは初めての経験だった。まず、蛇を焼いて食べる小学生なんてそうそういない。いたら一度会ってみたい。蛇の味がいいとは到底おもえないが、何事も見た目で判断してはいけないのだ。

「ジャングル戦の時なんか食糧がないからな、蛇や蛙、魚なんかをとって食べるんだ。でも焼いたりはしないよ。敵に居場所を教えるようなものだからね。ジャングルにはヒルやマムシ、マラリア菌をもっているハマダラ蚊なんかの危険な虫も住んでる、だから、それらの対処法を身につけるために訓練中はサバイバルナイフ一本と、ほんの少しの携帯食をもって、ジャングルの中で訓練するんだ。あの頃はかなりハードだった、そうだろ、ジャツカー」

今まで会話に参加していなかった無口のジャツカーにルーカスが話しかけた。

「ああ、そうとうだった。ジャングルなんて二度と行きたくないな」

いつも冷静で真面目、そのくせ、強がりな面を持つジャツカーがそうだったのだ。ジャングルが人間にとつてどれだけ過酷な場所かが想像できる。ミソラはジャングルに対して、少し怖さを感じた。

「いや、あの時は本当に驚いたよ。顔をあげたら、目の前にワニがいたんだからさ」

ルーカスとジャツカーは昔話で盛り上がっているが、ミソラは二人の話を聞いていて、だんだん、背中に悪寒を感じてきた。二人がどのような所に行ってきたのが、目に映るようだ。

ミソラの顔がどんどん強張ってきているのを察して、ハープがハンターから出てきた。

「ちょっと二人とも、ミソラが怖がってるじゃない！いい加減にしてよ！！」

だが、屈強な軍人である彼らにはハープの小さな声は聞こえず、二人でわいわいとやっている。

ハープはため息をついた。

「はあ、．．．」

「いいよハープ、私は大丈夫だから．．．」

いろいろやっている内にスバルが部屋に入ってきた。顔には汗が滲みでていて、ひどく痛そうに左のわき腹を押さえている。

「あ、スバルくん、おは．．．」

スバルはその場に倒れこんだ。倒れこむと、左の脇腹を押さえながら、じたばたとして、喘ぎ声を上げている。

「ちよ、スバルくん？」

「まずい、急性盲腸炎か？」

さっきまで大笑いしていたルーカスが急に真剣な顔になってスバルに近寄った

第13話、ボスニア

「鎮痛剤を打つか・・・」

ジャツカーが注射器と鎮痛剤を持ってきた。彼の表情は、なぜか明るい。

「いや、いい、俺がやる」

ルーカスが慌てた表情で、ジャツカーの方を向いた。彼は今にもスバルの綺麗な肌に注射の針を突き刺そうとしていた。やけに楽しそうだ。まさかとは思うが彼は人に注射をしたがるタイプなのだろうか。いや
そのような事はないと信じたい。

ルーカスがジャツカーから注射器を取り上げると、さっさとスバルの左腕に針を刺した。

ジャツカーはルーカスに注射器をとれた事により、非常に怪訝な顔になった。

「このまま放っておく訳にもいかな・・・ジャツカー、何か案はあるか？」

怪訝そうな顔をしたままジャツカーはルーカスの問いに答える。

「この状態だと手術が必要だろう・・・仕方ない、市外の病院に連れていくか・・・」

「だが、この国で流行ってる感染症で病院が満員なんじゃないのか？受け入れる余裕があるとは到底思えんが・・・」

この国の政府は半ば転覆しかかっている。それによって感染症の拡大を食い止めることができず、国全体が、感染症にかかっている状態なのだ。そのために、援助としてKPMが派遣されたのだが、逆に彼らによって国が都合の良いように利用されているのだ。簡単に言うなら、悲惨な状態という事だ。

「大丈夫だ！」

ジャッカーが根拠のない安心を述べる。当然ながら、スバル以外の全員が反論する。

まず、ミソラ

「大丈夫なはずないでしょう！スバル君苦しんでるんですよ、変な事言わないでください！」

ハーブ

『ミソラの言う通りよ！スバル君に万が一の事があつたらどうするの！』

ウォーロック

『スバルは俺の大事な相棒なんだ！お前らでなんとかできないのか！』

ルーカス

「全員に同じ!!」

ジャッカーが、「まあまあ、落ち着け」という動作をすると、とても余裕な表情をした。

「俺に知り合いがいるんだ、行けば分かる」

反論側の代表で、ルーカスがものを言う。気のせいだろうか。ルーカスとジャッカーの立場が逆転している気がする。

「場所は分かるのか？」

「ちつとばかり遠いが、道は分かる。山の中にある小さな病院だ」

反論側は納得しきれない表情だが、他にあてもないので、ジャッカーの言う事に従った。

「電波変換なんてしたら敵に見つかってしまつから、車での移動となる。厳しいかもしれないが、敵に見つかってしまつよりかはましだ」

電波変換を行うと、周波数が特定され、一発で敵に見つかってしまう、この世界にもノイズウェーブというものもあるが、KPMの管理下にあるため使用はできない。よって、車での移動が一番妥当なのだ。

彼らはスバルを運びながら、地上へと向かっていった。

薄暗く、閑散とした地下通路を抜けると、昨日とは違って青空が広がっていた。太陽はそんなに高くはないが、波は穏やかで、海水浴にでも来た気分だ。

砂浜を抜けて、防砂林の所に一台のジープが置いてあった。険しい地形の多いこの国には丁度いいのだ。

「少し揺れるからきついかもしれないが、病院に行けばすぐ治して貰える。気にするな」

ルーカスが後部座席にスバルを寝かせると、心配そうな顔をしていたスバルを励ました。

「私が連れているから大丈夫だよ」

ミソラもスバルを励ます。スバルの頬が少し赤くなった。

「よし、出すぞー！」

ジャツカーの合図で車が動きだした。運転しているのはルーカスで、その隣にジャツカーが座っている。後ろにはスバルとミソラが座っている。

スバルの頭はミソラの膝のうえだ。つまり膝枕だ。スバルは鎮痛剤のせいか眠くなったようで、瞼を閉じると寝入ってしまった。

ミソラはスバルの頭を撫でながら、前の二人に気付かれないように、

彼の頬に軽くキスした。

『ん？ミソラ、今何かしなかつ．．．グフツ！』

ウォーロックがミソラの妙な行動に反応したが、ハーブによって気絶させられた。彼の鈍感さには呆れる。

ハーブの強力なタックルで車が大きく揺れ、驚いた前の二人が後ろを向いた。

「おい、どうかしたのか？」

「大丈夫です！」

ルーカスがミソラに安否を問うが、先程の事を知られたくないので、何も起こらなかつたという素振りをしたのだ。思春期なら誰でもあることだ。

車が防砂林の中を抜けると、やたらと寂しげな街並みがあつた。人っ子一人いない、中小くらい工場が並んでいて、道の真ん中に鉄パイプやドラム缶などが転がっている。昭和の下町を酷く悲惨な状態にしたと言つてもいいくらいだ。左の方を見上げると、火力発電に使う丸いタンクや、石油コンビナートが見えた

この国は、周辺諸国に比べ電波技術がそれ程までに高くなく、石油燃料に頼らないとやっていけないくらいだったのだ。現在でも行われているようだが、国が復興したら必要なくなるであろう。いずれ、彼らは職を失う事になるということだ。

「ああつー！！」

突然、ルーカスが大きな声を上げて車を止めた。

「どうかしたんですか？」

ミソラがルーカスに車を止めたことについて聞く

「先程、この国に感染症が蔓延している事をいったよね？」

「はい……」

「予防薬を打つとかないとね」

この国に広まっている感染症とうのは、エイズのように体の免疫が低下する病気である。エイズは患者の血液をあびるか性交でしか感染しないが、この感染症は空気感染するため極めて危険なのである。

予防薬は手に入りやすいのだが、注射器のほうが逆に手に入りやすく、限られた者でしか予防する事はできない。ルーカスがどうのようにして予防薬を手に入れたのかは分からないが、できる限りの対策はしておいた方がいい。感染症にかからないようにするための唯一の方法だ。

ミソラは自分の左の腕を捲り上げルーカスに出した。

「っ！！」

鋭敏な針がミソラの肌は静かに貫いた。注射といのは、いくつになっても痛いものである。

注射針を抜くと赤い健康な血液がでてきた。そいつをガーゼで拭き

取り、絆創膏を付けた。

使い終わった注射器を二度と使う事はない。理由は、他の病気に感染する危険があるからだ。せつかく予防接種をしたのに、別の病気にかかってしまつては元も子もない。

スバルにも同じような操作を施した。普通、寝ている途中に腕に痛みが走つたら、誰だつて飛び起きるはずだが、スバルは未だに鎮痛剤の副作用が続いているのか、ピクリとも動かない。ピクリもしないとは言つても、別に死んでいる訳ではない。単に寝ているだけだ。

それらのすべてを終えると車は再び走り出した。

サイドガラスから見える車外の光景はとても良いようには思えない。中心部に近づくのに伴つて、工場や住宅などは、どんどん酷い有り様になっていく。終いには、かつて栄えていたのだろう中心街はロボロのゴーストタウンになっていた。

「．．．．．酷い」

ミソラは心の底から死んだ町を嘆いた。ルーカスはそれを聞いて、少し表情を曇らせた。

「この町はな．．．見捨てられんだよ．．．国ね」

「そんな．．．なんで．．．なんですか？」

常識的に考えて、政府が倒れかけの町を見捨てるなんて有り得ない話である。

ルーカスは苦悩に満ち溢れた顔でハンドルを「バン！！」と叩いた。

「この町はこの国一番の工業が進んだ町だった。すべてが終わるまではない！」

ルーカスは、自分のやっている事の無力感から相当に苛立っている。

「国は、国民達を捨てて、自分達だけ助かろうとしたんだ。結果、こんな大混乱時代を招いたんだ！」

国政は、国民あつての政治だ。自分達中心の政治など、国政ではないのだ。これが、今の国の形を作り上げた者たちの言葉だ。かつてのフランスの女王であるマリー・アントアネットは自分達中心の国づくりをしたために、市民達の反感を買い、ギロチン台に送られたのだ。この場合も同じだ。国を守ると言って置きながら、言葉とは矛盾した事を行った。それによって市民が蜂起して、国家は転覆した。人類の哀れな歴史の繰り返しだ。

ルーカスが先程よりかは少し落ち着いたように話した。

「この町の地方議会は生活が苦しくなった市民を助けるため政府に助けを求めた。政府は援助すると言ったが、裏では国外逃亡の準備を進めていた。それが国民達にばれると、連中は白を切った。それによって市民が武装蜂起して国を倒したが、その後の政策がうまくいかず、今、このように成っている訳だが、

もともとは国のせいだ。おかげでこんなになっている訳だが・・・
うお！？」

突然、目の前に服がボロボロで痩せこけた老翁が飛び出してきた。

老爺は倒れこむと、呻き声を上げると

その場に倒れこんだ。ピクリとも動かない。どうやら死んだようだ。

「……………これが国の正体だ!!」

ルーカスはミソラに言い聞かせるように、声を上げた。

老爺の遺体を轢かないように避けてその場を通り、車は先を急いだ。
病院は山の中にある。

第13話、ボスニアニア（後書き）

来週に持ち越します。すいません。

それと、感想とか評価とか書いてくれると嬉しいです。

これからの参考にしたいと思えますので。

第14話、病院

車は視界が悪く、道路がはっきりしてない、山道を走っていた。

とても、人間が素っ裸で入れるような所ではないが、熱帯地方に存在するジャングルかと言うと、そうでもない。車が走っている道とは外れたところに、折れ曲がった道路標識があった。大きな木々が立ち並んでいるこの森に、それはポツンと佇んでいた。木を比で現わすと3くらいで、道路標識は1、つまり、3：1と言ったところだ。

今まで書いてきたことを噛み砕いて言うならば、ものすごい数の樹木が生い茂っていて、昔は道路が整備されていたのだろうが、今はその後片もなく、人間が一度そこに迷い込むと、二度と出られなくなってしまう樹海を走っているという事だ。日本にある富士山の麓の樹海を想像して貰えると分かりやすい。

しばらく薄暗い山道を走っていると、やっと出口が見えてきた。

薄暗い森の中を抜けると、規模がかなり大きめの住宅地が広がっていた。

ルーカスによると、麓にある工場町と、山を一つ越えた所にある住宅地、その先にある中央の市街地で構成されていて、この都市の名前をサンビア市というらしい。ボスニアは国の半分が山になっていて、大きい町といったら、このサンビア市と、中央市街地をさらに抜けた所ぐらいだろう。しかも、サンビア市はこの国の首都だ。市街地を抜けると大きな渓谷があつて、更にそこを抜けて熱帯雲霧林を通つて行くと、もう一つの工場町に出るらしい。そこには貿易港もあり、今もなお、活気の溢れる町だという。

住宅地に入ると、やっと人の面影が見えてきた。流石は住宅地、子供から老人まで実に様々な年齢の人々が住んでいる。先っきの潰れた町とは大違いだ。

人間は、人の数が多ければ多い程、安心するという妙な精神がある。それは国民的歌手である響ミソラでも例外ではない。

「・・・ここは先っきの町とは全然違いますね」

今まで黙りこくっていたミソラがルーカスに話しかけた。

「まあね。ここら一带は奴ら（KPM）の管轄下にあるから・・・」

「KPMって、一体何者なんですかね・・・」

運転で忙しいルーカスに代わってジャッカーが答える。

「それが解らないから今こうやって調べてるんだ」

ジャツカーがハンターV Gをミソラに見せた。ハンターのエアディスプレイには細々しい情報が記されてあった。

「こいつはKPMのパトロール隊のローテーションだ。盗むにはベラボウな時間が掛ったがな」

相変わらずどんな趣味をしているんだとルーカス以外の全員が内心で突っ込んだ。

「さっ！そろそろだぜ」

住宅地の中央部を抜けて、裏山に入るか、入らないかぐらいの所に規模の小さな病院があった。

「ここでいいんだろ？」

ルーカスがジャツカーに聞いた。ジャツカーはエアディスプレイを操作しながら答えた。

「ああ、ここで問題ない・・・」

車を病院の浦口に止めた。浦口には医療廃棄物や、その他のゴミが幾つかあった。いつもゴミ収集車が回ってくるのである。先程、ジャツカーが見せたくれた警備隊のローテーションの表と同じように収集車が回ってくる日取りが記された表が張り付けてあった。

「掛け合ってこよう・・・」

ジャツカーが浦口のドアから入って行った。

ジャツカーが浦口に入って行ってから数分間の沈黙が続いた。スバルの寝息がやけに大きく聞こえる。

しかし、ジャツカーは、物の一分も掛らない内に浦口から出てきた。

「中に入っていいぞ……」

まるで、ジャツカーが病院の主になったような言い方をした。

中は、病院にしては薄暗い。浦口という事も関係しているのかも知れないが……

通路は狭く、一人で通れるのが一杯一杯だ。

いくらか奥にすすんで行くと、ベンチに腰掛けた二人の中年程度の男が居た。恐らく患者であろう。二人とも検査服を着用している。

奥の方から、もう一人の中年の男が現れた。髪は白髪で、メガネをかけているが、その眼差しは鋭く、医を貫き通す。というような信念を持ってそうな感じだ。

メガネの男がジャツカーに語りかけた。

「急患つてのはそいつか？」

メガネ男はミソラにお姫様抱っこされているスバルを首で指した。

「ああ、そうだが・・・」

メガネ男はしばらく腕組みすると、再び口を開いた。

「手術室まで来て貰おうか」

男が先頭に立って道を先導する。行きかけの駄賃では、ナースの一人としてすれ違わなかった。

そこは、まるで野戦病院のような所だというと大げさになるが、とにかく、暗いという事だけでも分かって貰えるとよい。

「バトンタッチだ・・・」

メガネ男がミソラに言った。スバルを渡せと言うことだろう。

ミソラは渋々、抱えていたスバルをメガネ男に引き渡した。

「ここで待つといってもらおうか・・・」

メガネ男はスバルを引き取ると、その場に居た全員に言った。

メガネ男が手術室に入って行くと、初めにルーカスが口を開いた。

「おい、ホントに信用に足る奴なんだろうな？」

それに答えるべく、ジャツカーが口を開いた。

「あんな奴だが腕は確かだ」

「「キヤー————！！！」

ジャツカーがそのセリフを言った瞬間に表から悲鳴が聞こえた。

「「「?????」」」

そこに居た者達は全員が疑問符を浮かべた。

第14話、病院（後書き）

お久しぶりです。

次回の更新予定は未定です。

なるべく早いうちに更新したいと思っています。

第15話、クレイジー

先程の奇声の根源を調べるため、ルーカスとミソラは待合室を出た。ジャツカーは居残りである。

ここに来るまでの通りは暗くて狭い、一回通っただけで妬けを起しそうなくらいだ。

本来なら、こんな獣道を通るのは御免被るが、状況も状況なので仕方がない。

この病院は裏口からの通路では、正面玄関に行くことはできない。よって、もと来た通路を通らなければならないのだ。

「はあ、ここホントに病院なのかよ」

あまりの道の狭さにルーカスが絶句した。

「でも、仕様がないですよ。ここでしか診て貰えないんだから」

ミソラが宥めるようにルーカスに言った。

「そりゃそうだけど・・・」

ルーカスの、持ち前の明るさがすっ飛んでいる。いつもに比べて元気がない。

ジャツカーが言うには、ルーカスは病院が苦手らしい。理由はジャツカーにも分からないそうだ。

曲がっては進み、積み上げられた段ボールを避けながら、電灯は付い

ているのに電気はついていない廊下を二人はひたすら歩いた。

接触の悪い電灯がビカビカと音をたてている。

「そういえば、俺、顔が知れ渡ってんだよねエ〜」

ルーカスは、そう発言すると、変装用のマスクとグラスンをポケットから取り出した。

それらを着用した彼は、まるで指名手配犯のようだ。というか、彼は一様、指名手配犯だ。

「.....」

ミソラは、その姿を見て言葉も出なかった。ルーカスの事を知らない人が見たら、完全に挽くだろう。

二人は浦口のドアを開け外に出た。

途端に、太陽の光が目に入ってきたため、思わず、ミソラは目を瞑った。

ルーカスはグラスンを掛けているため、どうともない様子だ。

そうしながらも、二人は、足を進めた。

丁度そのころ・・・

「ZZZZZ・・・」

スバルの手術が終わるまで待っていたジャッカーは、寝息をたてて眠っていた。

そして、ジャッカーの前には、見たこともない男が立っていた。

場所は、病院の正面玄関・・・

「な、何だと!?!」

ルーカスは、驚きの表情を隠しきれない。ミソラも「何!?!あの人!?!」といった様子だ。

「仕方ない・・・」

ルーカスのサングラスが彼自身の吐息によって曇る。先程から、二人が驚愕しているのは、病院の待合室で、片手に包丁を持ち、暴れ

狂う男が居たからだ。

男は、仕切りに、「殺されるうー！！」だの、「死ぬのは嫌だー！！」だの、訳も分からん言葉は発しながら、暴れている。

また、男の容姿は、ボロ衣に、サンダル、ボサボサの頭に充血した眼は、ホームレスより酷い有り様だ。

そして、二人の驚いている点は、もう一つあった。それは、病院の正面は、まともで、中の待合室はとても綺麗だったからだ。あんな、獣道を歩いて来たのだから、無理もないだろう。

それは、置いといて・・・

ルーカスは中に入って行った。クレイジ　な男を止めるつもりだろう。

中に居た者達は、かなり驚いた。当然だろう。暴れ狂う男と、グラサンかけたマスクマンが出て来たら、誰だってビックリする。

男の包丁が、ルーカスに向けられる。しかし、ルーカスは、それを見事にかわし、男の腹部に思いっきりパンチを入れた。

男は、その衝撃で、その場に倒れこみ、気絶した。周りからは、感謝の気持ちや、褒める気持ちを現わす喝采がわいた。それを見ていたミソラも同じように、パチパチと両手を何回も合わせていた。

手術室にて．．．

スバルを手術してくれた眼鏡の中年医師が、無事に術式を終え、手術室前の待合室に向かった。

自動ドアの開いた先で彼が見たのは、寝息をたてているジャッカ一の姿だった。

「良くこんな時に寝れるな．．ん!?」

眼鏡の医師が、背後に誰かいるのに気が付き、後ろを振り向こうとするが、その刹那、鉄パイプか何かで後頭部を殴られ、医師は気を失ってしまった。

医師を殴った男は、彼の体を抱え、どこかえ消えていった。

第16話、推測

待合室に戻ったルーカスとミソラは、居眠りをしていたジャッカーに気が付いた。

「おい、ジャッカー起きろ」

ルーカスの少し気合のない声が病室に響き渡る。やはり、彼は病院が苦手なようだ。

「ZZZ...んっ!?ルーカスどうした?お前、病院苦手じゃなかったのか?」

何分か経った後にジャッカーがようやく目を覚ました。だが、ルーカスはその事よりも気なっている事があった。

「おい、これ麻酔針だよな」

ルーカスが、ふるえる手で鋭敏な針をジャッカーに見せる。

「そうだが...それがどうした?」

ジャッカーは不思議そうな目でルーカスを見つめる。

「お前の首の所に刺さってたんだよ」

「何!?!どう言うことだ!つまり、俺はその麻酔針のせいで眠らされたってことか?」

「俺に聞くなよ。お前だから知っていると思つてさ」

そう言っているルーカスの目は泣き眼だ。ジャッカーに怒鳴られたからではない。長時間病院の中に居たので、彼の精神的スタミナがもう、耐えきれなくなっているのだ。

突然、後ろの方からドタドタと慌ただしい足音が聞こえた。

三人が後ろを振り向くと、息せきつて走ってくるナースの姿が見えた。

その途端、ルーカスは倒れそうになる。どうやら彼の病院嫌いの原因は、ナースにあるようだ。

豊富な胸を踊らしながら近づいてくるナースを見ると、ルーカスは気を失ってしまった。彼にとって、ナースはトラウマだったようだ。

「星河スバル様のおつれ様ですね。ブラック先生を見てませんか？」

まだ若いナースが、息を切らして声を掛けてきた。

「ブラック先生？」

なにやら妙な名前の医師にミソラは首をかしげる。

「ブラック先生つてのは、ここで一番の天才外科医だ。さつきスバルを手術したのもその先生だ」

ジャッカーが、ルーカスの顔を叩きながらミソラの疑問に答える。

「いや、知らないけど・・・どうして？」

突然、ルーカスが立ちあがりナースの質問に答える。そこにいた皆は内心、（回復はや！）と突っ込んだ。

「先生の姿が見えなくて、星河様が目を覚まされたというのに・・・」

「えっ！？スバル君、目を覚ましたんですか？」

ミソラが驚いた声でナースに問う。

「あっ！ひよつとして彼女様ですか？部屋に案内しますのでお二人で・・・ウフフフ！！」

それを聞いた途端、ミソラは顔を赤くした。何やら良からぬ事を考えてそうなナースだ。

「行ってやれ。ミソラ」

「はい！」

ジャッカーがミソラに笑みを混ぜながら言う。ルーカスはどうと、また気絶してしまった。ジャッカーは呆れて無視している。

「見つけたら教えてくださいね！」

そう言って、ナースと共に何処かへ行ってしまった。

「なあ、可笑しいと思わないかジャツカー」

「ああ、俺の予想では、恐らく医師はさらわれたと思う」

回復の早いルーカスの質問に驚く間もなくジャツカーは答えた。何故、彼がそのような推測をたてたか？それは、彼のポケットの中に一枚のメモ用紙が入っていた。

メモ用紙には、大きな文字でこう書かれたあつた。

【よこせ】

この文字だけで誰だつて分かる。彼は何者かによつて誘拐され、身代金をよこせという事であることを．．．さつき、この事を持ち出さなかつたのは事を大きくすることを避けるためだ。警察やKPMに通報するなど、彼らからしてみれば自殺そのもだ。

「お前が寝ていた時間から考えて犯人は近くに居るはずだ」

ルーカスがジャツカーの推測をもとに犯人の居場所を推理する。

「身代金をよこせと言つくらいなのだから、潰れた町、いや、潰された町の住民だろうな」

「市街地はまずないだろう、犯人には目立ちすぎる。となると、犯

人が居る場所はあなたがち決まってくるな」

「秘密の地下道」

第17話、追跡

病院の浦口に二人の男がいた。ルーカスとジャッカーだ。二人は自分のハンターを見ている。

「おい、まだか？まだ終わらないのか！」

ルーカスがジャッカーに怒鳴り声に近い声で言う。病院の発作は治ったようだ。

ジャッカーは怒鳴られても平然とハンターを眺めている。

「もう少しでダウンロードが終了する。ロードが遅いのは我慢してくれないか。これ試作だから」

いつでもどこでもどんな状態でも彼は冷静さを欠かさない。ルーカスにない一面を彼は持っている。

「試作だからっていくらなんでも遅すぎやしないか？もう一時間経つぞ。犯人に逃げられてしまう」

「見つかるよりかはマシだろ？」

「そりゃそうだが・・・」

突っ込みのネタが無くなってしまったのかルーカスは黙りこくつた。先刻から彼らは何の話をしているのかという新たなPGMプログラムの話だ。そう、スバル達の装着しているのと同じような物だ。試作ではあるが十分な機能を発揮するらしい。名前は「ステルスPGM」だそう

だ。何でも、電波体時に発せられる周波数が敵に探知されたりされなかったり・・・

「よし、終わりだ！早速、電波変換しよう！！」

ジャッカーがルーカスに目配せしながら言う。

「なんか、電波変換すんの久しぶりだな」

「ああ・・・最後に電波変換したのは、俺達の最後の任務の時だな・・・」

突然、二人の空気が重くなった。ジャッカーは言うてはいけない事、つまり、禁句を発言してしまったようだ。ちなみに、二人は電波変換が可能だ。素となるウィザードも持っている。

「ま、まあ・・・は、早くしないと逃げられちまうぞ」

ルーカスは気を取り直したようだ。

「あ、ああ・・・」

ジャッカーも何とか気を取り直したようだ。

「さあ、行くぞー!!」

「電波変換!!!」

同時刻、ボスアニア某所

「.....」

ジンは今にも雨が降り出しそうな空を部屋の窓を通して眺めている。彼の右手には懐中時計が握られている。時計の中には綺麗な女の人の写真が貼ってある。女が苦手のはずなのに奇妙なものだ。

「まだ悔んでんの？」

突然、後ろから声をかけられ驚く。振り返ると、昨日、書類をジンの押し付けた女が立っていた。

「.....ノックくらいしろ.....エリー.....」

女の名前は、エリーゼ・エリダヌスという。愛称でエリーと呼ぶのだろう。

「あなた.....泣いてたの？」

エリーがジンに向かって冷やかし込みの言葉を送る。

ジンの顔は急に赤くなる。

「な、泣いてなんかいない！」

「そんなに恥ずかしながらなくてもいいんじゃない？私がお姉さん代わりで抱いてあげるから」

「同じ年の奴に言われたくない！・・・お前、俺の性格知ってて言っただろ！」

「ちよつとは落ち着いた？」

ジンはますます顔を赤くする。知らぬ間に慰められていた事を恥じたのだ。

「べ、別に・・・それに、悔むだろ・・・悔み続けなければいけないだろう」

「あんたが世界を滅ぼした訳じゃないでしょ？」

「俺があの時、あのポジションに居ながらデストロイヤーDESTROYERの発射を止められなかったのは事実だ・・・」

「世界が滅んだのはあんたの責任じゃない。あんたがこれからやんなきゃいけないのは、この国を一刻も早く復旧させることでしょ？違っ？」

「そっだ・・・その通りだ！」

「やっと、元気を取り戻したみたいね。じゃ、これお願い！」

エリーは片方の手に持っていた小包を机に置いた。

「ま、またか・・・」

「これがあなたの仕事でしょ？」

ボスアニアライフライン地下道

こここのトンネルはトラック一台が通れるほどのスペースがある。世間には知られていない秘密の地下道だ。KPMもこここの地下道の事は把握できていない。

誰が、いつ、何の目的だ造られたのかは不明だ。

その中を一台のトラックが走っている。トラックを運転しているのは20代後半の男だ。表情は少し焦っているようにも見える。

その男の隣には行方不明になっていたブラック医師が座っている。気を失っているようだ。

そのトラックの後を追うようにして、ルーカスとジャッカーが走っている。今、彼らは電波体だ。並みの人間には敵わぬスピードでトラックを追い詰めていく。

電流体二人のボディはロツクマンと同じ青色だ。バイザーの色は黒く、全体的に鋭利を思わせる体つきだ。今の彼らはイグザム・グラージャ、世界的にも使われていた軍用ウイザード「イグザム」と兵士が電波変換することで「イグザム・グラージャ」となる。武装は軍用バトルカードを主体にして戦う。通常の装備は「レグザガン」と呼ばれるライフルを使用する。また、人間の状態の時に使う武器も使用可能なのだ。KPMがイグザムを造り出し、軍用目的とした世界初のバトルウイザードである。

トラックとの距離を十分に詰め、ルーカスはバトルカード、スコープガンを用いて、後ろのタイヤ二つをパンクさせる。見事な狙い撃ちだ。

トンネルの壁にぶつかり、トラックは身動きが取れない状態になる。その中から医師を抱え男が出てくる。

男は逃げようとするがルーカスのスコープガンに足元を狙い撃ちされ恐怖のあまり足がすくんだのか、医師を離しその場に倒れ込む。

「動くな！」

ジャッカーがレグザガンを男に向けながら言った。

男は立ち上がり手を挙げる。

「手に持っている手榴弾も捨てる！」

男は手榴弾を手に隠し持っていた。諦めて投げ捨てようとする振りをし、ピンを抜いて彼らに投げつけたが、あまりにも高く上がり過

ぎてしまつ。

そこをすかさずルーカスがスコープガンで狙い撃ち、空中で爆発してしまふ。彼にはスナイパーの素質があるようだ。

「無駄な抵抗はせんことだな．．．それに、さっきの投げ方、お前し素人ろくにんだろ？」

男は凶星を突かれた表情をした。ジャツカーの予想は的中したようだ。

「何故誘拐したのか、その理由を聞かせて貰おうか．．．正直に言つたほうがいいぞ。その方が身のためだ」

ジャツカーの長い尋問の始まりだ。

第17話、追跡（後書き）

久々に更新しました。もう一方のほうばかり更新してたので、次からはこつちをメインにしていきたいです。もちろん完結はさせません。クライマックスまでのだいたいの筋はかんがえてあるので。感想おまちしております。感想かいてねえ〜

第18話、真相そして…

男は観念したようにその場に土下座した。それを見たルーカスとジヤッカーは驚いた表情をする。二人とも赤い血を持つ人間だ。土下座状態の男に銃を向けるような趣味は持ちえていない。

「申し訳ないです。私の妹が近年流行っている感染症に罹り、苦しい、苦しいと言っているので思わずとんでもない事をしでかしてしまいました。お金もないし、職もない。それゆえであります。どうか申し訳ない。本当に申し訳ない」

男は拳を強く握りしめ、唇を噛みしめ、今にも泣き出しそうだ。そんな彼に二人は話しかける言葉が思いつかなかった。

「そんな事だろうと思った・・・」

今まで気を失っていたブラック医師が、話に割り込んできた。

「おい、大丈夫なのか？」

ジヤッカーが医師を心配したように言うが、彼はジヤッカーの問いかけを無視した。体は問題ないという証拠だろう。

「で、でもあなたは・・・」

男が弱々しく喋る。顔つきを見ても分かるが、少し弱気な性格だ。しかし、自分の妹を苦痛から救ってあげたいという意味は本物だ。

「自分で言うのも何だが、俺は診察するだけでベラボウな金を持つ

ていく腐れた奴じゃない。ブラック医師ってのは、俺の風貌が．．．
まあ、それは置いて、あだ名だからな！漫画と勘違いしないで
くれ」

それを聞いて、男は安心したような表情をした。

「さっ、俺を呼んだってことは患者がいるんだろう？そこに連れて
行ってくれないか？」

男は、ボロボロに泣きだした。彼を浚^{さら}った傲慢な自分を許し、妹を
救ってくれるというのだから男にとってこれ以上に嬉しいことはな
いだろう。

医師と男は二人で並んで歩きながらトンネルの奥に消えていった。

「一件落着だな！」

ルーカスが、はりきった声でジャッカーに言う。

「そうだな。一時はどうなるかと思ったが．．．そういえば、俺達
何か忘れていないか？」

「ああ！そうだよ！確か、ナースが言ってた「先生を見つけたら連
れ戻せ！」って」

「いや、少し違うと思うんだが．．．」

「呼び戻した方が良くないか？」

「問題ないだろう。そのうち帰ってくるさ」

ルーカスは、少し考えた後、結論を出した。

「戻ろう！彼らが待っている」

「ああ！」

同時刻、ボスニア某所

何処の地下かは分からないが研究室とその隣に独房がある。房の中には、赤い瞳を持ち、ボサボサ頭の銀髪の少年が閉じ込められている。

研究室の中で誰かが話し込んでいるのが聞き取れる。

「どうだ、あの少年の様子は？」

スラリと背の高い男が中年程度の白衣の男に上目線で話しかける。研究室には一枚の写真が飾られていた。白衣の男が妻の横に立ち、彼女との間にできた三歳くらいの娘を抱っこしている写真だ。表情はとてもニコニコしている。

「駄目です。全く在り処を吐こうとしません。やはり、投薬では限

界があるのかと」

白衣の男の答えにスラリとした男は冷酷かつ、大胆に答える。

「ならば肉体的に拷問するしかないだろう」

白衣の男は少年を庇^{かは}うようにして話す。

「あ、相手は子供ですよ！何もそこまでしなくても．．．それに、この事が上の連中にはれたらどうするんです？」

だが、スラリとした男は依然と、意見を変えようとしなかった。

「お前そんなことで怯えているのか？相手が子供だろうが何だろうが、絶対に在り処を聞き出す！ムーの少年なら在り処をしっているはずだからな」

「し、しかし．．．」

スラリとした男は、うろたえている白衣の男を冷たい目でギロリと睨みつける。

「貴様！これ以上俺に逆らったら命はないと思え！お前の家族とも会えなくなるぞ」

白衣の男は怖くなったのか逆らうのをやめた。

「そ、そうですか．．．」

「できる限り投薬は続ける。壊れない程度にな」

「・・・はい」

白衣の男はやり切れない表情で返答した。

「今から拷問してみるが、効果はあまり期待できそうにないな・・・」

そう言ってスラリとした男は研究室を出て行った。

病院の受付窓口

「なんで連れ来なかつたんですか？」

二人はナースに怒られていた。先生が誘拐されたことを知っていたながら黙っていたことと、その先生を連れて来なかつたことだ。

その光景は、二人の息子が母親から怒られているようにも見て取れる。

ルーカスが一生懸命言い訳をする。

「いや、だつてさ……なんか仲良さそうにしてたし、あの空気を壊すのはKYだし……」

ルーカスは自分の根性でなんとか立っている。そんなルーカスの言い訳をナースは受け入れなかった。

「そんなの知らないわよ！私をあそこで連れてきてと言っただけど！麻薬中毒者が暴れ出したって大変だったのに！まさか、忘れていたとかないわよね！？」

ナースの口調がどんどん強くなってきている。お見事に凶星にはまり、二人はギクツとする。ちなみに、麻薬中毒者というのはルーカスが倒した狂人のことだ。

ジャッカーは無理矢理に話題を逸らそうとした。

「そ、それよりもスバルに会わせてくれないか？め、目を覚ましたんだろ！？」

「駄目！」

「なんで？」

「駄目だったら駄目！！話を逸らしたという事は凶星ってことね？」

ナースの見事な洞察力に二人は冷や冷やするばかりであった。

病室では・・・

四人でわいわいしていた。スバルが無事に手術を終えたことを、ミソラ、ウォーロック、ハープは喜んでいるのだ。

『いやゝしかし治ってよかったなスバル』

ウォーロックが豪快な笑い声を挙げながら言う。

「うん、これでやっとこの小説の主人公に戻ることが出来たよ」

すまないスバル君！それはこの作者の能力が低いがためだ。勘弁してくれ。確かに、最近、ルーカスとジャッカーの描写が多くなりつつあった。というか、あの二人の描写しかできないのもあるのだが、だってそうだろ！スバルの手術しているところの描写なんてハイレベルでできねえよ！

「そうですね、私とスバル君のラブラブな描写とか書いてくださいよー！」

「ミ、ミソラちゃん！？」

スバルは驚いたような声をだす。

「えっ！？いや、そのこれは・・・その・・・」

ミソラは真っ赤になりながら、どんどん語尾が弱まっっていく。勿論、スバルの顔も太陽のように真っ赤だ。

『ひでえな作者！逃げやがった』

無茶言わないでくれ！俺がこの小説進めなかつたら誰が進めるんだ？えっ！なんか文句あんのか？こら！ああん！？

『現実とはまるで違うな』

ちよつと調子に乗ってみただけだ。まっ！それは置いて・・・

そんな訳でスバルは三日後に無事、病院を退院した。その間、ルーカスとジャッカーは病院の掃除をさせられたそうだ。

第18話、真相そして…（後書き）

病院編はこれで終わりです。

次からやつと本番に入ります。毎度、毎度更新遅くてすみません。それでも、応援して下さいる方々には感謝です。

できれば・・・その・・・感想を書いて貰えるとうれしいです。

感想、それは作者にとって元気の源です。よろしくお願いします。

「くどい！」

口、ロゼット!?!?

「感想、感想と何度も何度も」

いや、なんかすいません。ホントすいません。

第19話、ひと時の時間

雨が降っている浜辺に一人の女の姿が見えた。女は透明のレインコートで雨が直接体にあたるのを防いでいる。その女はずっと海の向こうを見ている。雨風で荒れた海をずっと見ている。彼女は海が好きなのだ。朝日の登るときの海、嵐で荒れた海、嵐が過ぎ去ったあとの海、夕日が沈む時の海、星空が輝、波の音だけが聞こえる静かで、それゆえに、綺麗で美しい海。彼女はどの海も好きだ。彼女の初恋の相手こそ海なのだ。海こそがこの世のすべてである彼女は考えている。我々、人類の他にも沢山の命を生み出した母なる海、これこそがこの世のすべてなのだ。その原則は、世界が崩壊した今でも変わらずに、彼女の心の中だけに残っている。

今度は、ぬかるんだ砂浜に腰かけ、低い視点から海を見た。

何一つ変わらない。

幾らどのように視点を変えて見ても海の美しさは変わらない。例えば人間がこの星から消え去っても海は変わらず在り続けるのだ。

「最近、雨ばかりだね」

眠りかけていたスバルにミソラは唐突に話しかけた。いくらなんでも、ずっと海底施設の中にいたら気がめいってしまう。そこで、スバル、ミソラの二人は地上のボロ小屋で寛くわんいでいた。

雨じゃなければ、快晴の海をおがむことができたのだろうが、赤道の国は雨季だの乾季だの関係なしに一年中雨が降る。

この前の快晴はマグレだろう。

仕方がないので、二人は小屋で過ごすことにしたのだが、何も無い古小屋に娯楽があるはずがない。

先日の事もあり、疲れが十分にとれていないスバルは、次第にうつとなってしまったのだ。

声をかけられ、驚いたスバルは寝ぼけていて、なにやらボソボソ言った後、ぐったりとなり寝息をたててしまう。

ミソラは、すうすうと気持ち良さそうに寝ているスバルの寝顔を見て、心臓の鼓動が高鳴り始める。

一人の男子に恋心をよせるというのは、こついうことなのだろう。

ミソラは、ずっとスバルの寝顔を見ているが、鼓動が速まるばかりだった。

数分経ってもスバルは目を覚まさなかった。ミソラの鼓動は高まる

ばかりだ。

ふと、彼女は思った。「寝ている間なら、ちょっとしてもばれないだろう」と……

ミソラは、高まる鼓動を押さえようとしながら、スバルの顔にゆっくりと近づく。

バタン！！

小屋の扉が突然開いた。強い風と、それに乗って雨粒が中に入ってくる。扉の開いた衝撃で、ビックリしたのかスバルが顔をあげた。

当然、ミソラの顔が近くにあることをスバルは気付かない。

「！！！！！！」

知らぬ間に唇は重なりあっていた。次第に二人とも赤くなっていく。

「うわわわわ！！ミソラちゃんゴメン！」

スバルは赤面しながら、ミソラに謝る。ミソラも当然ながら赤い。鼓動を押さえるようにしてミソラは言う。

「べ、別に……謝らなくていいよ……その……あの……う、嬉しかったから！」

これを聞いて、スバルはいつもの倍に赤くなり、汗を流す。大胆な方のミソラでも、あまりにも突然の出来事にいつもの自分を維持できていない。

「ス、スバル．．．君？」

「な、な、何？」

「あのね．．．」

「ゴホン！！」

後ろから、女性のわざと咳き込む声が聞こえて、より一層驚く二人。ミソラは扉と対面して座っているが、さっきの事で全く気付かなかったのだ。

スバルはゆっくりと後ろを見る。

レインコートを着用した女性は、20代で、若々しい。フウドによつて顔はかくされていてよく見えないが、白人ではないことは確かだった。

スバルは得体のしれない女性に話を聞く。

「だ、誰ですか!？」

女性はレインコートを無言で脱ぎ、置いてあつた傘立ての中に無理矢理押し込む。

二人は、その行動から怪しい奴と判断し自分のハンターを構えるが、生憎あいにくウィザードは外出中だ。ハープが気を利かしてバカロックを強靱なキックで何処かえ連れ去って行つたのだ。

それ故、二人は戦う術スベがない。本能的が万事休すと判断し、二人は逃げ出したい衝動に駆られる。

「心配しないで!あなた達の敵じゃないわ。味方よ!」

女性がそういうが、信用出来る筈がない。二人は完全に無視する。

「ちょ、ちょっと聞きなさいよ!...はあ、ルーカスとジャックカーに会わせてよ...」

二人の態度が突然に変わった。二人の名前を聞いて正直に味方と判断したようだ。

「態度変えんの速!」

二人の態度の変わり様に女性は思わず突っ込む。

今に見て思うが、なかなか美しい顔立ちをしている。肌の色は黄色おうじよくに近い。混血だろう。

知っているだろうか。混血の多い中南米は、思わず見とれてしまう

ほどの美しい顔を持った女性は多く暮らしていて有名なのだ。

見とれるのは、その二人も例外ではない。スバルだけでなくミソラまで見とれてしまうほどにだ。

要するに美しいの三文字なのだ。

女性は二人に質問を始める。

「あなたが流星シューティングスターのロックマンとハーブノートね？あの変人どもと会わせて欲しいんだけど、お願いできるかしら？」

スバルが代表で物を言う。

「いいですよ！知り合いですか？」

傘立てにレインコートを突っ込むこの女性も十分な変人なのだがそこは触れないで話す。

「そつよ。昔からのね・・・」

「おいおい来るの遅すぎだろう。そんなに手間がかかったのか？」

ルーカスが混血の女性に呆れた声で話しかける。スバルとミソラはここに狭い梯子はしを通って、ここまで連れてきた。

さっきのルーカスの態度からしても古くからの知り合いというのは本当の様だ。

ジャッカーが面倒くさそうに彼女を紹介する。

「あのクソ野郎はリーゼだ。エージェントとして働いて貰ってる」

「よろしくね！」

綺麗で透き通った声と笑顔にスバルは頬を赤くする。ミソラはしかめっ面で非常に気に食わなかった。デレデレしているスバルの足を思いっきり踏みつける。

「痛い！！ミ、ミソラちゃん！？」

あんなことがあってもスバルの鈍感さには呆れるほどだ。ミソラは知らんぷりをして、怒った足取りで部屋を出ていく。ちなみに、ハントーの中に戻ったバカロックは、笑いをずっと堪えている。

スバルは踏みつけられた足を押さえながら、ミソラのとを追う。

「はは、青春だな」

ルーカスが笑いながら言うが、結局はルーカスもそれに入るのだ。

「さて、本題に入るけど、やっぱりオーパーツは山の中にある奴ら

のアジトにあったわ。これがその地図よ」

キリツとした顔に変わったリーゼは、テーブルの上に奪ってきた地図を置く。

「流石だな。敵の本拠地から地図を奪ってくるとは」

ジャッカーが褒め言葉を言うが、悲しくも褒め言葉は無視される。

「はっはっ！スルーか・・・」

更にリーゼは話しを進める。

「警備はかなり嚴重になってるわ！普通じゃ侵入するのは不可能よ。新配備されたナイトメア達や、ウイルス、警備ウイザードなどがウジャウジャ居る」

リーゼの言う事にジャッカーが一々反応するが、ルーカスまでもが無視する。ルーカスは話しを進める。

「それはそうだろうな。彼らにとってオーパーツは切り札なんだからな」

「今夜、オーパーツは貿易港に運ばれるみたい。狙うならそこね！」

「残念ながら、隙はその時だけのようだな。ジャッカーが敵から盗んだって言うローテーションのリストとこの地図を見る限り、見つかったら終わりだな」

「それなら俺に・・・」

またしても、ジャツカーが言ってくるが彼を構う気はない。

「三つのオーパーツは研究室の中で嚴重に保管されているわ！搬入する時に奇襲をかけるしか方法はないね。ゲリラ的なやり方だけど仕方ないわ」

「青春をエンジョイしているあいつらにも伝えておこう。今夜出発するとな」

「もういい！勝手にしやがれてんだ！！」

無視し続ける二人にジャツカーはキレた。しかし、それさえも無視される。可哀そうなジャツカーだ。

第20話、ステルスPGM（前書き）

復活しました！！久々に流星を執筆しました。
それではどうぞ！

第20話、ステルスPGM

コンクリートでできた床がコツコツと鳴る。ジャッカーはスバルとミソラの部屋に急いでいた。ルーカスが突然、「今夜、出発だ！」などと言いだしたのでプログラムの最終調整を急いで済ませ、今、二人の部屋に速足で向かっている訳だ。前にも話したと思うが、プログラムというのは「ステルスPGM」のことだ。だが、あれは試作段階だったため十分な機能が発揮できていなかったのだ。実用化できて新たに加わった機能もあり戦闘面で大いに役立つプログラムとなった。その「ステルスPGM」をスバルやミソラにも装備させるためハンターを貸して貰いに行っているのだ。

「ふう、やつと着いたな・・・しかし、ここの廊下は長いな・・・いや、今はそんな事を言っている場合じゃない」

廊下が長いことを愚痴っている場合ではないのは確かだ。気を取り直し、ドアの前で入室の許可を聞く。

「スバル、すまないが入ってもいいか？」

「・・・いいですよ・・・」

何やら声が重たい、何かあったのだろうか？

「入るぞ！」

瞬時、スバルの声の重さに戸惑ったが、一つの事に時間をかけてはられない。マスターカードを取り出して自動ドアを開き、中に入

った。

スバルは思いつめた表情をしていた。緊張しているのか若干、手が震えている。それを見たジャッカーはおおよその見当がついたが、事は急を要する。それに、彼にはウォーロックという相棒がいる。彼に任せておけば問題はないだろう。ルーカスやジャッカーの持っている第一世代のバトルウィザード、イグザムは人格プログラムを持っていない。敵に感情移入しないためという目的もあるが、そこまでウィザード自体が発達していなかったのだ。現在の第三世代のバトルウィザード、「ライガ」は改良により戦士の頼れる友となるべく人格プログラムが導入され戦闘能力も上がっている。

「取り込み中すまない。少しだけハンターを貸してくれ、都合によりウィザードオンになってしまいが、いいか？」

早口でジャッカーは喋ったがスバルはついて来れてる様だった。ウォーロックがウィザードオンになり、スバルは自分のハンターを無言で差し出した。

「すまない」

そう言って、ジャッカーは急ぎ足で部屋を出て行った。

「.....はあ〜」

スバルが緊張混じりの溜め息を吐く。いつまでもウジウジして始まらないスバルをウォーロックは持ち前のガサツさで励ます。いや、励ますというよりは、ただ自分の疑問をスバルにぶつけると言った方が正しいだろう。

『何をさつきから溜め息吐いてんだ？そんなに緊張することか？』

スバルは浮かぬ顔のまま淡々と話す。

「・・・ロックには分からないよ。僕はロック見たいに経験も豊富じゃないし、知識も全くない。それに、今回はメテオGやムー大陸の時とは違うんだ・・・僕の力でミソラちゃんを守りきれるか分からないし、不安にもなるよ」

確かに今回の敵は一筋縄ではいかないだろう。いつ、何処から狙われているか分からない上に敵との戦力差があり過ぎる。経験の少ないスバルからしてみれば不安や恐怖心で心がいっぱいのはずだ。正直な話、スバルはルーカスの口から出発と告げられた時は怖かつたはずだ。緊張して当たり前である。だが、この壁を乗り越えなければ敵の陰謀を阻止する以前に自分達の住む世界に戻ることができないのだ。異次元のゲートが閉じてしまった以上、再びオーパーツの力を使ってゲートをこじ開けなければならない。しかし、肝心のオーパーツは敵の手にある。しかも、そのオーパーツを兵器利用するため使用経験のあるロックマン、つまりスバルを全力で見つけ出し連れて行くはずだ。事態はスバル達にとって完全に不利な状態にある。

ウォーロックは突然、真剣な顔でスバルに語りかける。

『スバル、それは違うぜ』

「・・・え!？」

いつも横暴で不真面目なウォーロックが真面目な顔したのでスバルは驚く。

『俺達は好き好んでこの世界に入ってきた訳じゃねえはずだ。俺だつてこんな荒れた世界はとつとオサラバしたいぜ。つまり、俺達は巻き込まれたつてことだ。だが、そんな俺らのために、俺らをもとの世界に戻すために動いている人間がいるじゃねえか！奴ら（KPM）の陰謀を阻止することは俺達をもとの世界に戻すということにも繋がつてるんじゃないか？要するにだ。俺達は守られる側つてことだよ。確かに、お前は地球を三度の危機から救つた英雄だ。だからつて、いつまでもお前が戦わなければならぬことはないことはいんだ。スバル、お前は自分とミソラを守ることを考える。そのことが、あの二人に対しての恩返しになるはずだ。ずっと、お前が英雄じゃなくてもいいんだ……ああ、何か俺、変なこと言つちまつたな』

「ありがとうロック。僕は、自分を守ることとミソラちゃんを守ることだけを考えるよ！」

『あ、ああ……』（なんか元氣を取り戻したようだな）

ウオーロックもたまにはいいことを言う。ガサツさと戦闘力だけが取り柄じゃないということだ。

「え〜っ！！ハンターを貸すんですかあ〜？」

「お願いだ！！頼むよ！！中身は見ないからさ」

ジャッカーはミソラに苦戦していた。ジャッカーは一刻も早くミソラのハンターを借りたい。ミソラはプライベートだらけのハンターを渡したくない。一步も引けない状態だ。

「本当に頼む！！時間がないんだ！！」

いくらジャッカーが説得しようと女性陣は応じない。ハーブがミソラに助っ人する。

「ダメよ！女の子には誰にも知られたくない秘密があるんだから！！」

「だ〜か〜ら〜見ないつつてんだろ！！こっちには時間がねえんだよ！！プログラムをテストロードしなくちゃなんねんだよ！！！！」

だんだん、ジャッカーの口調がきつくなってきた。このままではプチギレそうだ。

「プ、プログラム？」

「そ、ステルスPGMだ。^{プログラム}説明している時間がないんだ！分かるか？時間がないんだぞ！おめえのプライベートなんか見ている暇なかねえんだよ！」

「し、仕方ないですね・・・」

キレ気味のジャッカーの説得で何とか女性陣を落とすことはできた。ミソラは不満そうな顔でハンターを差し出す。

「絶対に見ちゃだめですよ！」

ミソラが念押しでプライベートな内容を見ないようにジャッカーに言った。

「見ないって！」

ミソラからハンターを受け取ると、大慌てで部屋を出て行った。不満そうな顔をしているミソラにハープは聞いた。

『良かったの？』

怪訝そうな顔でミソラはハープに聞き返した。

「何が？」

『だって、あの中には男の人、特にスバル君には見られちゃまずい物が入ってるじゃない』

「スバル君は見ないよ。私なんかに興味ないんじゃない？」

実は、まだミソラはリーゼの笑みでニヤツいたスバルを許してはいなかったのだ。だが、恋人同士と言えるほどのことはしていないし、かと言って単なる友達フライザーという訳でもない。要するに、奇妙な関係状態にあるのだ。ミソラは、この状態を速く脱却したいのだが、スバルがああ調子ではいつになるかは分からない。

そして、数分が経過した・・・

部屋についているスピーカーからアナウンスが入った。このアナウンスは、ミーティングの呼びかけや、起床時の目覚まし代わりにして使われている。

『ゴホン、え〜と、出発する前に確認しておきたい事があるから、ミーティングルームに来てくれないかな？出来れば急いで』

アナウンスをかけるのは大抵ジャッカーなのだが、今回は珍しくルーカーが放送している。慣れていないのか少し声が上がっている。

「いよいよだね。ウォーロック行くよ！」

『おっ！』

相棒二人組は元気よく部屋を出て行った。はずだったが、

「ミ、ミソラちゃん！！」

ほぼ同じタイミングで部屋から出てきたスバルとミソラ。目が合っ
てしまい瞬間的に二人の間の時間が止まった。

結局、ミソラがスバルと目を合わせないようにして、ドアからミー
ティングルームの方に走り出した。

「・・・はあ〜」

『ドンマイ、スバル』

可哀そうなスバルに、ウォーロックはかける言葉はこれしかなかった。

「よし、みんな集まったね。」

ミーティングルームのモニターに映像が映し出されている。モニターの前には司会のルーカスが作戦内容を説明している。

「今夜、ここを出発して拠点の近くにリアルライザーのテントを張る。ここで深夜まで休憩を摂る。深夜二時ごろになったら拠点の警備が薄くなるそうだ。警備員や警備ウィザードなどが休息や整備に取り掛かる時間だからだ。少数派のこっちには、いざ、ウェーブバトル戦闘となると不利だから隠密行動だ。でも、隠密に動くなんて訓練された人間でない限りきつい。そこで今回、役に立つのがステルスPGMだ！ ジャッカー説明よろしく！」

ルーカスに説明を振られて面倒くさそうにジャッカーは椅子から立ち上がり、スバル、ミソラ、ルーカス、リーゼのハンターそれぞれを持ち主に返すと、プログラムの説明を始めた。

「俺達は電波変換を行い、電波体になることが出来るが電波体はそれぞれ特有の周波数を発している。そのおかげで、目視では発見しにくい他の電波体を認識、発見することができる。周波数を変換することでエリアを移動することだって可能だ。しかし、この周波数が命取りになってしまつんだ。各地に設置された周波数探知機、これによつて敵対する電波体の周波数をキャッチするとその情報が本部に送られ周波数の根源を絶たれてしまう。そうならないためのステルスPGMだ。こいつは探知機に発見されないように周波数を周囲に漏らさない役目を担っている」

ジャッカーが一通り喋り終えるとスバルが手を挙げた。

「何か質問かい？」

「他に機能はあるんですか？」

「それは今から話す。ステルスPGMはもう一つ特殊な機能を持っている。ゴーストインビジブル効果だ」

聞き慣れない言葉に全員の頭からハテナマークが飛び出した。

「ふつ、聞きなれないだろう？こいつは一種の光学迷彩のようなものだ。光学迷彩つてのは名前の通り体が透明になるんだ。だが透明になるだけで足跡や影は残ってしまう。しかし、こいつは違う。透明になるだけでなく足音、足跡、影、全てなにも残らない。周波数は漏れないからエリア移動を行えば幽霊の気分が味わえるぞ。まあ、本当になつてしまつたら意味がないんだが．．．ゴーストインビジブルだけでなく戦闘面でも役に立つ。人数の少ないこつちには攻撃を集中的に受けることが予想される。そのためにバトルカードのバ

リアやシールド、インビジブルなどが各十枚ずつフォルダ以外で使
用が可能になる。個人の攻撃力を上げるためギガ+1やメガ+3な
どの効果でフォルダの中に組み込むことが出来る。全機能はこの四
つだ。次は容量の面なんだが、こんなにとくさんの機能があるんだ。
スバルやミソラ着けているメテオPGMとは違って無茶苦茶に容量
を食う」

この時スバル、ミソラは疑問に思った。彼らにはメテオPGMのこ
とは話してないはずだ。スバルが代表で質問する。

「ちょっと待って下さい。なんでジャツカーさんはメテオPGMの
ことを知ってるんですか？」

ジャツカーはいつも通り平然と答えた。

「ちよいと拝見させてもらったよ。君達が病院に居る時にね」

「いつの間に・・・」

「基礎概念は同じだ。元々は君達の世界に住んでる優秀な科学者が
創ったんだらうけど、いたって簡単だったよ」

その時、二人は同じことを思った。ジャツカーは天才なのではない
かと・・・ゴン太がここに居たら全く理解できないだらう。

「話を戻そう。こいつは大食いでね。容量も半端ないが、ゴースト
インビジブル効果、こいつはハンターの容量残量が持続時間になる
んだ。そのため、戦闘に不必要なデータはすべて予備のハンターに
移させてもらった」

ジャッカーは予備のハンターを手に持って見せた。

「心配するな中身は見えない。俺は他人のプライベートに興味がないのでね。何か質問は？」

そこで初めてルーカスが手を挙げた。

「何だ？ルーカス」

「幽霊っているのか？」

「「「「「.....」」」」」

ルーカスは皆から冷たい視線をおくられた。

第20話、ステルスPGM（後書き）

次回、敵の本拠地に突入です。
二話に分けるかもです。

第21話、ジャングルに行く

暑苦しく、視界の悪いジャングルの中でリアルライザーでできたテントが張ってあった。寝室付きのテントの中で夜が更けるのを待っているのだ。スバル、ミソラ以外は交代で見張りを続けている。現在、0時30分だ。今の見張りはリーゼだ。リアルライザーのテントはジャッカーの技術力によって光学迷彩が施されているため発見される危険はないが万が一のことを考えると、見張りが必要だろう。手持ちのイグザムを使って異変がないか索敵している。ゴーストインビジブルもオンの状態だ。

リーゼはハンターのエアディスプレイを見ながら大きくあくびをした。コックリ、コックリなっていく。しかし、それでは自分の役割を果たしたことはないので慌てて顔を叩き、自分で自分を起こそうとする。そんな時間が何分か続き、時計は午前1時を回っていた。

「ZZZZ・・・」

リーゼは完全に眠っていた。たび重なる睡魔との闘いに耐えられなかった彼女はイグザムを放置したまま夢の世界へ旅立ってしまった。いた。

リーゼがいつまでも寝室に来ないので様子を見に来たルーカスはグーと寝ているリーゼを発見した。

「おい、起きろー!」

「ムニヤ、ムニヤ・・・もう、食べれない・・・」

「起きろって！おい！・・・はあ〜」

ルーカスは苦肉の策として、懐に入れていた唐辛子をリーゼの口に放り込むことにした。

リーゼの口をゆっくり開け、赤色の唐辛子を口内に押し込む。

何も知らないリーゼは放り込まれたそれを噛み砕いた。唐辛子は激辛だ。

「ギヤヤヤヤヤー！！！！」

激辛の唐辛子はリーゼの舌を焼きまわし、辛さに耐えられなかったリーゼは悲鳴をあげ飛び起きた。

今の悲鳴がどれくらいに響き渡ったかは分からないが、寝室まで聞こえたのは確かだ。叫び声を聞きつけたジャツカーが様子を見に来る。彼の頭は情けなくも寝癖が立っている。しかも、髪が上に立つならまだいいが、全体的に左に立っている。正直なところ非常に見栄えが悪い。

「ど、どうした！何があった？」

慌て気味のジャツカーにルーカスは作り笑い話す。

「いや、心配ないさ〜」

隣で口を押さえているリーゼからして何かがあったのは明らかだが、

深追いはしなかったジャツカーは面倒くさそうに寝室に戻って行く。

「はあく妙なことをするなよ。目が冴えちまったじゃねえか・・・」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら二階の寝室に駆けあがった。

「全く、お前は何をやってるんだ」

涙目のリーゼに呆れた調子で話すルーカスの目は少しニヤついていた。

「ほわぁ、ほほひ、ほひふふふ！」

舌を焼かれた様な感覚のリーゼは水を流し込みながら物を言うため何と言っているのか分からない。

完全に呆れ切ったルーカスは聞き取れない言葉など聞く気はない。そのまま無視した。

「緊張感なさすぎだろう・・・」

ジャツカーはこっそりと二人の様子を影から覗いていた。相変わらずの悪趣味だ。

「悪趣味じゃないぞ・・・」

それから一時間が経過し、いよいよ突入開始時刻の10分前になった。皆が緊張した表情だ。眠気を感じている者など誰一人いない。スバルやミソラは言うまでもないが、ルーカス、リーゼ、ジャツカ―までもが緊張気味の様子だ。とりあえず、リーダーとしてチームを率いるルーカスが全員に喝を入れる。

「みんな、緊張しているな。どんな時でもそうだが現場での緊張感は大切だ。程良い緊張感や恐怖心は体の動きを機敏にしてくれる。心が大きく影響するってことだな。一番いけないのは慣れだ。特に、こういう場合による慣れは、死亡フラグを生む可能性が高い。慣れない奴は恐怖感から死にたくないと思つて迅速に行動できるが慣れたやつは一つ一つの行動を面倒くさがる。面倒という気持ちは死に直結するんだ。スバルやミソラならば現場で慣れは感じないだろう。だが、このメンバーの中で、だるさを感じている人間がいたらあえて言わせてもらう。すぐにここから立ち去ってくれ。仲間を失いたくはないからな。面倒くさいから死にますなんて話にならん」

皆、彼の話真剣に聞いている。これならば彼らの中から死人がでることはないだろう。そう判断したルーカスは、再び話し始める。

「・・・誰もいないようだな。それじゃあ、緊張している俺達は敵が拠点としている廃ビルに乗り込む。

ここからずっと進めばいい訳だが、ジャングルだ。視界も悪いし、敵の警備網も厳しい。だが、俺達にはステルスPGMがある。こいつを使えば何不自由なく足を進めることが出来るだろう。廃ビルまでウエイブロードは一切ない。ジャングルを地道に進んで行かなくちゃならん。先頭はリーゼが行け、廃ビルまでの道ならわかるだろ」

「ええ、なんとか」

リーゼは不意に話を振られ虚を吐かれた顔をするが、一瞬で落ち着きを取り戻しルーカスの問いに的確に応答した。

「オーパーツがなければスバル達をもとの世界に戻すことはできない。本来なら、彼らには待機してもらいたところだが、使用経験のあるスバルにはオーパーツの気配を感じるはずだ。すまないが、君たちにも同行して貰う」

ルーカスが申し訳なさそうに彼らに言うが、心優しき二人はそれを許した。第一に彼らにとって自分達に関係することを他人に全部押しつけるのは幼いながらいい気はしないのだ。彼らも、もうすぐ中学上がる。多少の気遣いも必要になるだろう。二人は無言で頷くとルーカスは話を続けた。

「ありがとう．．．よし、俺達はやれる。ウィーアー・ナンバー・ワンだ。円陣組むぞ！」

今まで真面目な顔で話していたルーカスがいつもの気さくな彼に戻った。真面目な話には似合わない。

ジャッカーは円陣を組むと言われた、嫌そうな顔をし拒否しようとするがリーゼから強烈な眼光をくらい、仕方なしに円陣の中に入った。

「生きて帰るぞ！」

「「「「「おっ！」「「「「「

リーゼがガイドとなって先頭に行く。それに続いてルーカス、ロツクマン、ハープノート、ジャツカーという蛇のような配列で進んでいる。言うまでもないが、ゴーストインビブル（以下、G Iと呼ぶ）もオン状態だ。だが、あまり気分の良い物ではなかった。自分が透明になっているので、自分の体がどうなっているのか分からないのだ。ジャツカーはそうでもないようだが、他の者たちは慣れない手つきで進んでいた。

ジャングルの奥にどんどん進んでいく。ここまでは順調だ。川が流れている所まで来た時に、突然、先頭のリーゼが動きを止めた。

不思議に思ったルーカスはリーゼに問う。

「どうした？」

「ナイトメアよ。一体だけのようね」

葉の間から川の向こう岸にいる騎士の風貌をしたエランドが見えた。ナイトメア、スバル達には心あたりがあるはずだ。

ロツクマンが驚いた声をあげる。

「あれって・・・この前の奴じゃないか！」

それを聞いたジャツカーはスバルに質問する。

「心当たりがあるのか？」

その答えは驚いているスバルに替わってウォーロックが答える。

『俺達がこつちの世界に連れて来られる時に遭遇した奴だ。かなり手こずった。俺から見てもかなりの強敵だ』

AM星の勇敢な戦士であるウォーロックが言うのだ。強敵であるに違いないだろう。そのナイトメアがそれなりの数で配備されているとなると、戦闘になって苦戦を強いられるのは言うまでもない。極力、戦闘は避けたい奴だ。

「どうするの?」

リーゼがルーカスに判断を仰ぐ。

「やり過ぎそう。と言っても向こうに行く気配のないナイトメアをやり過ぎすとなると日が暮れてしまう」

日はまだ登っていない。それはさて置きルーカスは話を続けた。

「G Iで何とかならないのか? ジャッカー」

「今の俺達は完全なお化け(ゴースト)だ。ナイトメアに気付かれることはまずない」

ステルスPGMの制作者であるジャッカーは性能スペックの面から考えてルーカスへの答えをだした。

「じゃあ、このまま突っ込むか」

「そうね」

ルーカスの作戦に乗ったり、ゼは再び行動を開始した。泥が混ざっている規模の小さいこの川は、浅すぎて魚はあまり住んでいない様だ。川を渡るときは普通、ジャブジャブと水しぶきがあがるのだが、GIの効果で水しぶきはおろか音すら発生しなかった。便利であると同時に薄気味悪さを感じる。

問題のナイトメアだが、簡単に通り抜けることができた。何も知らないナイトメアは、彼らの居たところをずっと眺めている。

再び森の中に潜って行くと、蜘蛛の巣を発見したミソラは声を上げそうになるが、堪えて蜘蛛の巣の下をくぐろうとした。だが、わずかに巣に当たった気がしたが、巣自体は無傷だった。日常と違う感覚のするPGMだ。^{プログラム}ミソラは、それに慣れるのに時間がかかりそう

だ。KPMが拠点としている廃ビルは近い。この森を抜ければすぐそこ

第22話、拠点突入

ようやくKPM拠点の廃ビルまで来ることが出来た。時計の針は午前3時を回っている。そろそろオーパーツが搬出される時間だ。急がないとまずい事になる。休憩を摂っている時間はない。ナイトメア達を無視して進む。という訳にはいかなくなってしまった。GIを長時間使用していたため全員もろとも効果が切れてしまったのだ。幽霊でなくなつた彼らは丸腰同然だ。

「おい、ジャッカー！なんとかならないのか！」

ルーカスが厳しい口調でジャッカーに当たる。

「容量が回復するまで待つしかない。最低でもあと一時間はかかる」

「一時間！？そんなにかかるのか！他に方法は？」

「ない」

「あっさり言うな！」

「何だと！」

ルーカスとジャッカーはこんな状況だというのに喧嘩を始めてしまった。大人なのか子供なのか分からない連中だ。

「はいはい、喧嘩はよしなって」

殴り合いを始めようとしていた二人をリーゼが宥める。二人とも互

いの拳を下ろした。

「G Iが使えないんじゃ強行突破するしかないわね」

リーゼが腕を組みながら考えている。五人とも茂みのなかに隠れているが、身動きがとれずナイトメアに見つかるのも時間の問題だ。

「俺達にだけであの数を？いくらなんでもそれは無理だ。それぞれの戦闘能力もそれほど高くない上にたった五人で乗り込むなんて、各個撃破されてしまうのが落ちだ」

リーゼの考えにルーカスは乗らなかった。隠密行動は今の彼らにとって難しいだろう。力にものを言う事も出来ない。そんな最悪の状態だ。だからと言ってここまで来て置いて引き返す訳にもいかない。三人は口論を始めた。皮肉にもさっき二人の喧嘩を宥めたリーゼが火種となっていた。

スバルはひとり考えて考えた。そしてあることを思いついたのか、ハンターの中に居るウォーロックに話しかけた。

「ねえ、ロック。メテオP G M使える？」

「あ？それがどうかしたのか？まさか、ファイナライズする気が！なかなか良い感じしてるじゃねえかスバル。最近、おもしろえ事がなくてつまんなかったんだよな。久しぶりに暴れるか！」

スバルはウォーロックにかなり小さな声でいったのだが、興奮しだしたウォーロックの声はトーンがでかくなっていった。それに気付いたミソラはすかさず彼に声をかける。

「何してるのスバル君？」

「えっ！うわあ！」

かなり興奮しているウォーロックは勝手にハンターの中から出てきて、近くに居たナイトメアに飛びかかろうとする。茂みが大きく揺れて異変に気付いたナイトメアは茂みの方に近付く。だが、茂みの中に居るスバル達は脅威が近付いていることを知らずにいた。

「ちょ、ロック！待って！」

『ああん？なんでだよ』

突然、ハンターの中に戻されて欲求不満のロックはビーストスイングで気を晴らしている。

「まず、みんなに言うてからにしようよ」

『はあ、じゃ速くしてくれ』

面倒そうな声を上げるとウォーロックは再びビーストスイングの練習を始めた。

「どうかしたの？」

不可解な行動をとっているスバルにミソラは疑問符を浮かべながら聞いた。

「いや、ちょっとね・・・あの、みんな聞いてください！」

口論していた三人はスバルに呼びつけられたので彼の方を向いた。

「何だ？」

手前にいるジャッカーがスバルに聞く。

「提案があるんですけど．．．」

「あつ！！スバル伏せろ！」

ジャッカーがとっさに大声をあげる。

「．．．えっ！？」

何の事だかわからないスバルは疑問符を浮かべる。仕方ないので、ジャッカーはロックマンを無理矢理伏せさせ、後ろに居たルーカスがライフル状のレグサガンでフルで撃ち続ける。スバルの後ろで一体のナイトメアが剣を振りおろそうとしていたのだ。

『うつ、ぐふつ、があつ、くっ！うあ．．．』

不意を突かれたナイトメアは、ルーカスのレグサガンをフルにくらい、デリートされる。

『どっしした？』

巡回していた他のナイトメアたちが異変に気付き集まってくる。

「スバル、手短に言え！」

ジャッカーが急ぎ口調でロックマンに言う。

「あっ、はい！僕がファイナライズで囿になりますから、その隙に乗り込んでください！」

「分かった！生きてかえれよ。おい、スバルが囿になるからその隙に乗り込むぞ！」

ジャッカーは大声でルーカスに言う。彼は少し驚いた顔をしたが無言で頷いた。

「じゃあな、必ず戻ってこいよ！」

ジャッカーはそう言い残し、ルーカスに続いた。

「スバル君……」

「ミソラちゃん、僕は大丈夫だから速く行って！」

「……必ず生きて帰って来てよ！」

「僕はいつも無事に帰ってきてるよ」

アンドロメダの時も、ラ・ムーの時も、メテオGのときだってスバルは仲間との絆で強敵に打ち勝ち、無事に帰還した。

「……じゃあ」

ミソラは名残り惜しそうにスバルにそう言い残すと、彼の方を見ながらルーカスの方に向かって行った。

『これじゃあ死ぬことはできないな』

ウォーロックが喝を入れる。

「死ぬ気なんて毛頭ないよ！それより、ノイズの方は大丈夫？」

『問題ない。徐々に貯まってきた』

「じゃあロック、行くよ！」

『おう！』

リーゼは事前に廃ビルを調査していたため、おおよその場所は分かる。リーゼは先頭に行くルーカスに耳打ちし、裏口から侵入するようについに言った。

廃ビルの浦口ドアの前に来た時、彼らの前に三体のナイトメアが立ちただかった。

『喰らえ！』

ナイトメア一体がロケットランチャーで彼らに向かって撃ってきた。

「シヨック・ノート！」

後方にいたハーブノートが放たれたミサイルに向かって音符状のシヨック・ノートを撃つ。それは見事に命中し、ミサイルは撃破された。

「ミソラ、やるじゃないか！助かったぜ！」

「私もスバル君に負けてられないですから」

ルーカスがミソラの行為を称える。ミソラは少し照れた顔した。

『くそっ！舐めやがって、おらあ！』

好戦的なナイトメア達は剣を抜きルーカス達に飛びかかる。

「バトルカード、マンティスダガー！」

「レグサガン、フルチャージ！」

ジャッカーはカマキリの鎌の様なバトルカードで、ルーカスはレグサガンで応戦する。スペック的にはナイトメアのほうが上だが、経験の差では敵わない。

三体のナイトメアは全員、デリートされてしまった。爆発の後から気絶したKPMの隊員たちが出てきた。どうやらナイトメアはウィザードと電波変換することで誕生する兵士のようなようだ。

「よし、先を急ぐぞ！」

ルーカスがドアを開け、それに続いて中に入って行った。

第23話、ジョーカー（前書き）

今回は話の都合上、少し短いです。

第23話、ジョーカー

スバルは、ルーカス一向から離れウォーロックと共に戦っていた。

スバル（ロックマン）は押し寄せてくるナイトメア達に苦戦していた。この前戦った時とは桁違いの強さだ。いくらブラックエースの機動性と攻撃力を持ってしても彼らの人海戦術には敵わなかった。ノイズフォースビッグバンで敵を一掃しても無限のごとく出てくる彼らには太刀打ちできないのだ。

「はあ、はあ、さっきNFBを使って一掃したはずなのに、もうこの数・・・勝てる気がしない」

スバルは極度の疲れを感じ始めていた。ファイナライズは、通常の状態で戦うときよりも体力の消耗が激しい。いくら踏ん張っても三十分が限度だ。ノイズの力を物にするということは、それなりの対価がでてくるのだ。現にスバルがファイナライズをしてから三十分を切ろうとしている。体力が持たなくても可笑しくはないだろう。実際、体と心は密接に繋がりが合っていて、一方が心に精神的ショックが伸しかかれば、その影響は体にも現れる。同じように体に苦痛や疲れが貯まっていけば、士気を下げってしまう。まさしく、彼は今その状態にあるのだ。

「くっ！もう・・・だめだ・・・」

想像以上の激戦にスバルは耐えきれず、その場に倒れこんでしまった。それと同時にウォーロックとのシンクロも合わなくなり電波変換ごと解けてしまう。だが、敵は手を緩める気配はない。ロックマンを倒すことが正義だと思っている彼らは、倒れたスバルのもとに

じりじりと寄ってくる。

『くそっ！スバル、立て！やられちまうぞ！』

内心、ウォーロックは後悔していた。自分があそこで乗り気な態度を見せなければ、こうはならなかったはずだ。自分があそこで止めていれば、スバルがこんなに苦しむことはなかったはずだ。もし、このことでスバルを死なせてしまえば、彼は向こうに居る仲間達に会わせる顔がない。せつかく、大吾も帰ってきて元の幸せな家庭に戻ったというのに、ここで逝かせてしまつては死んでも死にきれないはずだ。この世に未練を残してしまうはずだ。それに、ミソラとの約束も破ってしまう事になる。おそらくルーカスは、俺が付いているから、スバルの囮作戦に乗ったのだろう。自分はなんて薄情な奴なんだ。地球でできた大切な友人すら守つてやれないなんて。ウォーロックは自分が出発前に言ったことと真逆のことをしてしまったことに後悔し、苦しんでいた。こうしている間にも敵をスバルの小さな生を奪い、正義を飾ろうと近寄つて来ている。ウォーロックは苦肉の策に出ることにした。

『おい、クソ野郎どもスバルを倒してえのならこの俺を倒してからにしる！』

ウォーロックはスバルの前に立ち、彼らを睨みつけた。だが相手は電波変換を行い、強化された人間達、ウィザードごときに負けるわけがない。一人のナイトメアが嘲笑いながら言った。

『ふん、ウィザード風情に何が出来る？丸腰の貴様が俺達に敵うとでも？だが、その雄姿は認めよう。そんな犯罪者など捨てて、俺達のところ来い！それなら命だけは助けてやるぞ』

ウォーロックは激怒した。今まで何度も命がけで戦ってきた。皆が朝日を見ることが出来るように。自分の大切な人達を守ることが正義だと信じてきたから。そんな皆のスーパーヒーローを「犯罪者」と言ったのだ。仲間のために戦うことのどこが「犯罪」なのか。ウォーロックは分からなかった。

「てめえ、何が「犯罪」だ！！スバルは大切な友人や家族、そして地球のために戦ってきたんだ。本来なら、朝寝坊して学校に遅れ気味になって、友達と笑いながら平和な生活をしているはずの人間が自分の人生差し出して必死で戦ってきたんだ。そのどこが「犯罪」だって言うんだ！！！」

「嘘が上手だなお前は。そんな綺麗事を並べて俺達が動揺すると思っただか？白を切っても無駄だぞ！お前らの犯した罪はすべて証拠として残っている。お前がいくら喚わめこうとも犯罪は犯罪だ。それは逃れることのできない事実なんだよ！シューティングスターロックマンはブラックリストに入っている。ブラックリストに入っている以上、制裁を与えなければならぬのだ」

もはや何を言っても、何をやっても相手は聞き入れる様子はない様だ。英雄、流星のロックマンが犯罪者なはずがない。ウォーロックは、ずっとスバルと共に居たから分かる。彼は犯罪を犯す勇気もないし、他人に迷惑をかけたら謝るほど正直で素直な奴だ。そのことに嘘偽りはないと確信できる。

「お前はどちらに付くのだ？ウォーロック？」

先程のナイトメアの一人が冷淡な声と表情でウォーロックに言った。

「俺は、スバルを信じる。俺はお前たち見たいなクソ野郎とは違う。」

お前らの味方にはならない』

彼の問いかけに対し、ウォーロックはあくまで自分の信念を述べ、敵に寝返ることはないと今ここで宣言した。

『．．．そうか、残念だ』

ナイトメア達は一斉に武器を振り上げ、その矛先をウォーロックに向け、今まで彼と議論していたナイトメアの一人の合図で、それは一斉に放たれた。

『．．．．．ん!?!?』

数秒経つてもウォーロックの体に激痛が走ることは無かった。彼は恐る恐る目を開けると、そこにはナイトメアの兵装をしていない生身の人間たちの体が横たわっていた。百は超えていたはずのナイトメアが全滅していた。彼はハンターの中に居ることに気が付いた。そして、相棒の顔を見上げた。

『スバル!それは!』

「大丈夫? ロック? ずっと見てたよ。僕は別に大丈夫だから」

相棒の体はいつもの漆黒とは違い、紅蓮色に輝き、頼もしいくらいに、その場にどっしりと構えていた。

第23話、ジョーカー（後書き）

次回、お楽しみに

第24話、遺産を求める者達（前書き）

前回からかなり間が空いてしまいました。忘れてしまった方は、前回の話から良雲でください。

第24話、遺産を求める者達

スバル達が外で激戦を繰り広げている間にルーカス達は、遺産が保管されている部屋を探し当て、侵入したが、残念ながら運び込まれた後だった。搬送はリアルライザーのトラックが行うことになっている。とリーゼが言っていた。一向は急ぎ足でトラック搬入口へ向かっている途中だ。

「搬入口は、確か、ビルの右にある庭だったよな？」

ルーカスが走りながらリーゼに聞いた。

「ええ、そう。でも、道の所々は瓦礫で封鎖されていて限られた道しか通ることが出来ないわ」

「まるで迷路だな」

ジャッカーがリーゼの言う事に乗った。だが、残念ながら無視された。先日、リーゼに聞いたことがあるが、彼女はジャッカーのことが気に食わないらしい。理由は、「うざい」だそうだ。どこが「うざい」のか分からないが、つくづく可哀想なジャッカーだ。それともう一つ、彼は女性から嫌われる体質らしい。これもリーゼから聞いたことだが、「生理的に無理」らしい。作者から言わせれば、決して生理的に無理な方でもないと思う。体格も悪くないし、頭も良い。顔も、俗に言う「イケメン」だ。ルーカスとは違って、クールビズな顔立ちだ。後は、性格だが、時々、妙な事を言い出すこと以外は良いとこばかりだ。女性視点でどこが嫌いなのか問いたい。いや、女性視点というよりはリーゼ視点と言った方がいいだろう。

ジャックカーがリーゼに無視されてから、ルーカス、リーゼ、ジャックカー、ミソラは、誰も口を開こうとはしなかった。ただ、黒いコンクリートの床に彼らの走る音が刻み込まれ、それが、うるさいくらいに廊下に響いていた。外での戦闘は激化していて、所々で爆発や、男達の怒声が上がっている。

一向の先頭に行くルーカスが手を塞いで一向は彼の指示通り止まった。彼らは近くにあった壁に身を潜めた。敵がいるのだ。ウイルスが二匹いる。どちらとも、ミソラには見覚えのないウイルスで、カマキリのようなウイルスと犬のようなウイルスだ。どちらとも、ミソラの住む世界には存在しないウイルスだ。

ルーカスは、自分のレグサガンに手をかけ、レーザーの充電量を確認する。ウイルス二匹はこちらに背を向け、廊下の警備に当たっている。ルーカスは、レグサガンがフルチャージし、壁から身を乗り出し、レーザーを放つ。気付いた時には既に遅く。二匹は、成す術なくデリートされた。

身を潜めていた三人は、ルーカスの後続き、搬入口に向かった。

一方、目的の搬入口では・・・

搬入口へ向かうための扉は、二体のナイトメアによって封鎖されている。通るには、撃退するしかないが、そう簡単にやられないように、二体とも重武装が施されている。

そんな二体が居るのにも関わらず、体中傷だらけの少年は、堂々と廊下を歩く。

彼を見つけた二体は、武器を構え、警戒状態になる。

『貴様！何者だ！』

一体のナイトメアが、巨大な槍を^{ランス}向けながら言った。もう一体のナイトメアも剣を構えて敵対心を露わにしている。だが、少年は何の素振りもせず、扉に近づく。

『と、止まれ！』

平然と歩いてくる少年に威圧感を感じたのか、槍を^{ランス}構えたナイトメアはたじろぐ。

少年は聞きもせず、懐からハンターを取り出し、それを天にかざす。

『！』

次の瞬間、少年の辺りを紫色の光が包み込んだ。光の中からでてきたのは、オールバックになった銀髪、紫色の鋭利なバイザーと肩や足にとりつけられた装甲、そして何者も寄せ付けない鋭敏な眼光。そう、ムーの末裔にして、最後の生き残り、ブライ、もといソロだ。

『貴様は！』

二体が驚いている間に、場を颯爽と駆け抜け、ナイトメアの装甲をもろともせず、ラプラスソードで斬りつける。

『づつづつ．．．くそ〜』

電波変換が解けていないナイトメアの一体は悪態を吐きながら立ちあがるようにする。無情なブライは、そんな彼を再び斬りつける。

『ぐわっ！〜！』

抵抗することもできずに、ナイトメアはブライにやられた。電波変換の解けた二人は、ピクリとも動かない。ブライは、「ふん！」と見下した表情で吐き捨て、搬入口へ通ずる扉を壊そうとする。

「待て」

「！」

突然、後ろから声をかけられ、ブライは振りかざした剣を下ろした。後ろを見ると、スラリと背の高い男が不敵な笑みを浮かべながら立っていた。男はブライに向けて口を開く。

「研究員が怪我をしていた所を見ると、助けられたことが屈辱だった。という感じだろうな。まあ、その研究員は私が始末したから問題は無いんだが」

男が喋っている間に、ブライは、暗黒鬨波をまとった剣の斬撃を飛ばす。だが、飛ばした所に男はいなかった。

「何！？．．．ぐわっ！〜！」

ブライは、気付くと気を失っていた。ナイトメアに電波変換した男

は、
気を失ったソ口を抱え、
何処かに消えて行った。

第24話、遺産を求める者達（後書き）

最近、かなり忙しいので、今まで通り、更新には時間が空くと思いません。ですが、ご心配なく。夏休みに、流星連続投稿週間を設けております。ですので、その日までしばしお待ちを・・・

第25話、アルカス

レッドジョーカーの力は強大なものだった。ブラックエースに比べて機動面は劣るが、攻撃面と防御面では、スバルが予想していた以上に頼もしかった。紅蓮のロックマンはその獰猛さじゆうぼうでナイトメア達を蹴散らしていく。ノイズフォースビッグバンのレッドガイアイレイザーは爆発と衝撃で耐えられる者など誰一人いなかった。この力は、スバルにとっての希望だった。そして、その希望がかない。しよきが生まれた。士気も体力も倒れていた時とは比べられない。

ナイトメア達は、自分たちの予想が裏切られたことを齒噛みした。ロックマンがレッドジョーカーになってから勝機を失ったのだ。その場で誰もが考えもしなかったスバルの反撃が始まったのだ。圧倒的な力を見せつけられ、成す術なくやられていく。彼らにとっては、こんなにも屈辱的なことはないだろう。自分達が信じてきた正義が破れ、犯罪者に良い様に翻弄されているのだ。態勢を立て直そうにも、隊員たちの士気は下がっていき、逃走する者すら出ている始末だ。だが、彼らは気付いていなかった。この力は、ロックマンが変身したことによって増幅したものではないということ。力の正体は、スバルの信じる絆の力だ。

「ブラックビルディング!!」

ロックマンが左手を地面に叩きつけると、その場所から黒金の遮蔽物が生える。それで、ナイトメア達が向けてきた弾丸を弾くことが出来た。

『くそッ!! 一体どうなっているんだ! 何なんだあの力は』

ナイトメア隊の隊長が悪態を吐く。だが、その間にもスバルは足を進め、隊長の近くまで近づいていた。

その強力な力が何処から溢れてくるものなのか彼らは知らなかった。いや、忘れていた。その関係は、身近にあるものでつい、見落としてしまいそうだ。だが、それ程までにかげがえのない物は他に無い。

『おらあ！』

ナイトメアの一体が、巨大なランスで紅蓮のロックマンを突こうとすれが、強力な装甲の前にはビクともしなかった。キックでナイトメアを押し倒すと、ウェーブロードに駆けあがり、飛んでくる攻撃をかわしながら隊長の前に降り立つと、隊長に向かって堂々と宣言する。

「僕が、どうして強いか教えてあげよう。仲間や友達を信じる心、絆の力だ！」

だが、隊長は不貞腐れた顔をするとその言葉を煙たがった。

『酔舞い事をぬかすな！！』

そう言っで隊長は剣を振りかざす。スバルはその剣を腕の装甲で受け止め、ロックバスターで隊長の態勢を崩すと、背中にあった二機のジェネレーターを射出し、左手に貯めたクリムゾンをレーザーとして放つ。その上で飛ばしたジェネレーターのレーザーで場をまんべんなく塗りつぶすと、大爆発が起こった。とてもではないが、そこにいた全ての隊員は強靱なレーザーと爆発に耐えることが出来なかった。NFBノイズフォースシグナルのレッドガイアイレーザーが炸裂したのだ。

一方、ルーカス達は搬入口の扉をくぐり、オーパーツの入ったリアルライザーのトラックを探索していた。当初の作戦案ではオーパーツが保管されているという研究室を探して、搬入する隙を狙うのが目的だったが、G Iの効果が切れたことよって進行度は遅れ、結局、トラックを探すことになったのだ。こんな事態になったのは全てジャツカーのせいだとみんなして決めつけていた。だが、彼には罪はない。ステルスP G Mの性能について全て作戦説明の時に話していたのだ。文句を言われるべきはジャツカーではなくP G Mの方だ。

「おい、トラックなんて見当たらないぞ！」

ジャツカーは、腰をかがめながら小声でリーゼに言った。対するリーゼは非常に苛立った面持ちでジャツカーに返答する。勿論、小声で。

「知らないわよ！こんなに遅れたのは、あんたのせいでしょ！」

その応答にジャツカーは腹を立てた。前列でも述べたが、P G Mのことは全て話した筈だ。なのに、こうまでして責め立てられなければならないのは彼自身不愉快だった。ジャツカーは吐き捨てるような声で、リーゼを怒鳴りつけようとするが、ルーカスに宥められる。

二人が大人げない行動をしている内に、ミソラが何かに気がつき彼らに知らせた。

「あれがトラックじゃないんですか？」

ミソラが指さす方向にルーカスも顔を向けた。確かにリアルライザのトラックがあった。おそらく、その中にもオーパーツが積み込まれているだろう。ただ、一つだけ問題があった。ナイトメアの数が多い事と、それを仕切る司令官らしき、すらりと背の高い男の姿があったからだ。その存在に気付いたルーカスは、冷戦さながらのジャケットとリーゼに報告する。

「おい、二人とも聞け！アルカスがいる。奴に見つかったら厄介だ。なんとか凌ぐぞ」

その時だった。黄色の電気エネルギーが、球状になって飛んできた。すぐさま、四人は防御態勢に入るが、エネルギーボールは隠れていた障害物もろとも破壊し、四人とも違う方向に飛ばされる。

「ふん！こざかしい真似をしゃがって、捕える！」

『はっ！！』

片手のグローブに電気が貯まったアルカスは、部下のナイトメア二人にルーカス達を捕えるよう命令した。爆発の衝撃でルーカス以外は気を失っている。そのルーカスは、骨折した左手を気にしながら、無我夢中でライフル状のレグサガンを連射する。

『ぐぶっ！！うっ！あっ！！グあっ！！！！』

ナイトメア二体とも唐突な攻撃に防御態勢をとれず、電波変換は解除される。

「ちっ、役立たずめ」

アルカスは舌打ちすると、大きな苛立ちの足音で疲れ切ったルーカスに近づく。ルーカスはレグサガンで抵抗しようとするが、アルカスの左手で銃を弾かれ、電気エネルギーの貯まった右手のグローブで顔を思いつきり殴られた。たださえ、殴られるとダメージが大きいに、電気エネルギーも併せて喰らったのだ。ルーカスは、もう立ちあがる気力すらなかった。アルカスは、軍用バトルカードのソードを出し、とどめを刺そうとする。

「バトルカード、ファイアーソード！」

レッドジョーカーのまま、スバルは間一髪でアルカスの攻撃を阻止した。

「何!？」

不貞腐れた顔をしたアルカスは、その腕力でファイアーソードを弾き飛ばそうとするが、圧倒的なジョーカーの力に憚れた。アルカスは、態勢を立て直すため、距離をとる。スバルは、MAX状態の口ツクバスターでアルカスを狙い撃つが、軍用のバトルカードは強力ですべて剣の内側で防御される。

『隊長、スピアの搬入完了しました』

ナイトメアの一体が、彼の無線機越しで言った。アルカスは、同じく軍用バトルカードであるバリアを用い、トラックの方へ向かっていく。

「待て！」

「待てと言われて待つ敵はいないぞロックマン！」

アルカスは、挑発するだけして手持ちのレグサガンから煙幕弾を撃つて、オーパーツと共に何処かに行ってしまった。

第25話 アルカス（後書き）

感想、評価、お待ちしております。

第26話、残された選択肢（前書き）

お久しぶりです。本格的に、夏休みに入ったので、いよいよ連続投週間に入りたいと思います。まずは、流星を二は連続でどうぞ！

第26話、残された選択肢

先日の戦いから、二日過ぎた夕方、皆は、再びミーティングルームに、集まっていた。ルーカスは、アルカスとの戦闘で、飛ばされた衝撃で、左腕を骨折しているので、ギブスをしている。おまけに、アルカスから顔を殴られていた。顔中に痣があちら、こちらにあつて、見るからに痛々しい。

「ゲホゲホ、トラックに積み込まれたオーパーツは、貿易港に運び込まれた。そう言ってたな、リーゼ」

ルーカスは咳き込みながら、リーゼが持ってきた情報を、再び彼女に確認する。リーゼは、自分の持ってきた情報と、ルーカスが言ったことが正しいと、無言で頷いた。

「次に、オーパーツが行くのは、恐らく敵の本拠地である、離島だな。そうになると、再び、オーパーツを奪うのは難しい。残された選択肢は、貿易港の倉庫内に、厳重保管されているそれを、この前のように潜入して奪うか、こちらが負けを認めるかだ。だが、俺は、負けを認める気はない」

いつもの図々しさは、空の彼方に消えていて、体中の痛みが、彼の気力を奪っていく。しかし、話すだけでも苦痛なのに、持って逝かれそうな自分の信念を、貫き通している。彼の雄姿は、スバルの心の中に一つ一つ刻み込まれていった。

ルーカスの言う貿易港は、先日向かった病院のあるサンエル市の、市街地を抜けた先の山岳地帯を通り、溪谷を抜け、山をいくつか越えた海辺の貿易で栄えていた町の中にある。貿易港は、海外からの

輸入された品、もしくは、海外へ輸出するための品が行きかうターミナルだ。終末の日を迎えて以来、各国からの要請は来なくなった。現在は、ボスニア領内にある離島のグレゴダ島ととの連絡用の船しか出ていない。

そのグレゴダ島は、KPMのジン率いる部隊が、新政府に黙って、そこに居を構えている。新政府が知っているのは、KPMが、国家援助という目的で、ここ（ボスニア）に来ていたという事だけだ。しかし、前も言ったと思うが、国家援助は表向きで、DESTROY DESTROYイヤーの被害を逃れたKPMのお偉方は、世界で生き残った国と、その国民を支配しようと企んでいる。実を言うと、DESTROY DESTROYヤの発射は、KPMの腐りきった上層部が、世界を我が物にせんがために、ソ連に作業員を送り、機械の誤作動という嘘を被せて、世界を滅ぼし、生き残りを統合する。そう言う目的で、発射されたのだ。要するに、破滅を引き起こした張本人は、世界平和を守るために創られた軍隊ということになる。

世界を終わらせた後、指で数えられる程度になった国々に、軍をおくこと。しかし、そのためには、軍を動かすための、正当な理由が必要だった。連中が各部隊に出した命令は、国家援助ではなく国家を柔和的に支配することだった。結局は、支配欲に囚われた、KPMのお偉方が引き起こした、ジレンマなのだ。

グレゴダ島は、以前は、うっそうと茂っているジャングルと、野生生物の楽園だったが、KPMによって要塞が建てられてからは、その数は減少している。だが、革命によって新しくできた新政府は、グレゴダ島に、KPMが要塞を建てたという事実は知らず、純粋にKPMを信じ、政策やら何やらは、彼らに任せつきりという状態になっている。つまり、今まで通り、グレゴダ島は、誰も住んでいない無人島だと、新政府は思い込んでいる。結局、新政府は何も知らないという事だ。

話を元に戻す。ルーカスが言った「残された選択肢」というのは二つ、しつこいが、三つのオーパーツを、再び奪い取るか、負けを認めるかだ。彼は、辛い体の状態でも「負けは認めない」と言った。そのルーカスに、反論する者など誰一人としていなかった。

「・・・反論はない様だな。よし、じゃあ、今回の作戦について説明する。今回は、港にある何処かの倉庫に保管されているオーパーツを、奪うことだ。まあ、その点は、前の時と変わりないな。今回は、ジャツカーが改修を加えてくれたステルスPGMを用いるから、敵に発見されることはないだろう。だが、油断は禁物だ。港の、目立つ所を爆破して、警備網をかく乱させる、つまり、「陽動」だ。これが成功すれば、見つかって、敵が襲ってきてても、無事に突破することが出来るだろう。この前みたいに、激戦になることはない、ということだ。爆破工作を行うのは、ジャツカーとリーゼ、オーパーツの方は、スバルとミソラだ。本来なら、俺も作戦に加わりたいところだが、生憎、出られそうにない。ということ、俺は、ここで、指揮を執る。すまん。俺からは異常だ。何か質問は？」

大抵、「質問はないですか？」と言って、張りきって手を挙げる人間は、小学校低学年でない限り少ない。スバルとミソラは、もうすぐ中学生だ。やはり、他人の目という物は、気になるだろう。単に手を挙げたくなかったのか、それとも、質問事項など無かったのか、誰も手を挙げなかった。という訳でもないようだ。

「おい、ルーカス」

ジャツカーが手を挙げて言った。

「何だ？」

「港には、どうやって行くんだ？港に近付けば近付くほど、警備は
厳重になる。現に、溪谷には検問所が設置されているからな」

ジャッカーの情報は、恐らく、KPMのネットワークに潜り込んで、
見つけてきた物だろう。流石は、「ジャッカー」だ。

「問題ない。港までには、港に送られるための食糧が、山ほど積ま
れているトラックの中に潜伏するから、容易に行けるはずだ」

トラックは、食糧が、配給制になっているこの国には欠かせない「
元給食センター」にある。現在は、市民の一日分の食事と、KPM
の隊員たちの食糧を配給する施設になっている。

「なるほど？しかし、検問所は、チームF（FOXTRROT）が指
揮している。場合によっては、あいつが出るかもしれないぞ」

ジャッカーの言ったことにルーカスは、頷きながら、「ああ、あ
いづね」とつぶやいた。

スバルとミソラには、「あいつ」という物が何なのか分からない。
無論、彼らのウィザードも同じだ。

以心伝心なのか、スバルが、他三人の疑問を、代表としてルーカス
に聞いた。

「あの、あいつって誰ですか？」

突然の質問に、ルーカスは、驚いた表情を見せる。

「ああ、スバル・・・あの、あいつって言うのは・・・」

「ウィンディ・ハリケーン。チームFの所属で、特殊部隊であるチームXにも所属している。風使いだ。空中を自由に動き回っては、敵をかく乱し、空からの爆撃や、風を舞い起し、敵からの攻撃の弾道を変えたりする。得意戦法は、その大きな翼で、敵を飛ばし、弱った所で爆撃や、斬撃で追い打ちをかける。状況次第では、敵の体を持ち上げ、地面に叩きつけたり、高度な場所から、下に落としたりといった方法もとる。かなりの強敵だ」

ルーカスがたじろいでいる間に、ジャッカーが、全て説明してしまつた。スバルの方は、ルーカスの事は気にせず、納得したという顔をしている。そして、ジャッカーに質問する。

「攻略法はあるんですか？」

「ああ、勿論。奴は、風を舞い起して、遠距離から飛んできた攻撃の、弾道を逸らして、敵の不意を突いてくる。遠距離系の攻撃は、まず効果がない。奴が近づいて来た時に、ソードで斬りつけるのが、得策だが、タイミングが、非常にシビアだ。よって、奴には、こいつを使え」

そう言うと、ジャッカーは、懐からバトルカードを取り出し、スバルに投げて渡した。

「これは？」

「スパイムネットだ。蜘蛛のようなウイルスであるスパイムの、高い粘着力を持つネットを、追尾型ミサイルの中に容れ込んだバトルカードだ。ロックオンして、ミサイルを発射すると、弾道が変えられても、追尾型だから、しつこく追いかける。その上、ミサイルが

破壊されれば、そこからネットが飛び出て、相手の動きを封じる。その間に、でかい物を一つ、ブチまかすんだ。そうすれば、勝利への扉が開ける」

ジャッカーが、バトルカードの説明を終えると、ルーカスが、咳払いしながら、話しの遅れを取り戻してきた。

「ゴホン！とりあえず、今日はこれで終わりだ。出発は、三日後。それまでに、各自、準備を整えておくこと。いいね！」

第27話、夕日の見える浜辺にて

スバルとミソラが、もう一つの世界に連れて来られて随分と経った。彼らの住んでいた世界と、今、住んでいる世界との時間差は、ほとんど無い。彼らが、居なくなった以来、サテラポリスと、WAXAは協力して、二人の捜査を続けているが、今の所、手がかりが全くつかめず、時間だけが、進んでいるという状態だった。

「くそつ、一体、どうなっているんだ！何故、手がかりが一つもないんだ！」

WAXAの57階にある指令室は、朝から大忙しだ。いつまで経っても、手がかりなしの状況に、一人の男性研究員が、悪態を吐く。

「もう無理だ。この状況で、スバル君たちを見つげるなんて・・・」

もう一人の研究員が、諦めたかのように頂垂れる。だが、その時。

「諦めてはいかん。可能性がある限り、それを信じるんだ！スバル君の言葉だ」

WAXA長官が、頂垂れた研究員そう言って励ました。彼の後ろには、ヨイリー博士もいる。

研究員は、その言葉に元気づけられたのか、立ちあがると、こう言った。

「そうですね。スバル君が助けを求めているんだ。きっと、諦めずに。大人の俺がしっかりしなきゃ！」

励まされた研究員は、再び自分の持ち場に戻り、捜査に参加した。捜査は、スバル達の住むコダマタウンの監視カメラの映像を、過去の記録を見て、スバル達が消えた直後に、何があったのか。それを探るのがWAXAの役割だ。サテラポリスは、現実世界で、聞き込み捜査を行ったり、電波世界で、二人の残した残留電波をさぐったりと言う感じで、大規模な捜査が行われていた。しかし、前列でも述べたが、未だに、手がかりはつかめていない。

WAXA長官と、ヨイリー博士が、何やら話し込んでいると、後ろから、若々しいが、はつらつさが欠けた声が、二人の話を遮った。二人が、後ろを見ると、そこには、松葉づえ姿だが、傍らには、うまい棒を持っているシドウと、そのウィザードであるアシッド。さらに、その後ろに、親友スバルとミソラが心配で、ここのとこ眠ってないのか、目の下にクマが出来かけている委員長四人組と、スバルの母親である星河あかねが居た。恐らく、彼らは、シドウが、指令室に向かう際に、ばったり会ったというところだろう。

「すみません長官。遅くなっちゃってしまっ

最近まで、ずっと寝た切りだったシドウは、長官とヨイリー博士に詫びると、苦笑いを見せた。だが、ヨイリー博士は、「まだ寝てないとダメよ。シドウちゃん」というが、「問題ない」という表情を作って、ヨイリーの心配する隙を無くした。

「それより、用件は何だね？」

「はい、丁度、俺が完成したプログラムを渡しに行く途中に、このビジュライザーで、たまたま、スバルとミソラが、ウィルスの大群と戦っているのを発見し、加勢して、その時の場を凌ぎました。そして、プログラムの説明を終えて、帰る途中に、コダマタウンで、車

が炎上しているとの通報が入ったので、向かってみると、一年前に見たムー大陸の、電波兵士がいました。ですが、それらは、既にスバルとミソラが片づけた後で、俺の出番はありませんでした」

シドウは、そこまで言うと、何故か、苦い表情になった。まさかとは思うが、「ヒーローは遅れて現れる」という自分のポリシーに従って、戦闘に参戦できなかったのを、まだ、悔んでいるのだろうか。シドウも、まだまだ、半人前と言ったところだ。

「続ける」

「はい、そこで、スバル達と雑談している間に、いつの間にもやら、俺の後ろに、見たこともない、ボロボロのマントを着た銀髪の青年が立っていたんです。その青年は、こちらの質問に答えようとせず、俺を白パト扱いにして、そこをどかし、彼が、指を鳴らすと、スバルとミソラの下に、黒い穴が空き、二人はその中に吸い込まれていき、アシッドが言うには、二人の反応が消えたらしく、俺の頭に、最悪の状況が、よぎって、その青年に飛びかかりましたが、一瞬で無力化されて、気を失いました。ここまでは、この前、話した通りです。病院に入院している間、色々調べてみたのですが、そこで、ある奇妙なことに気がつきました」

「奇妙なこと？」

シドウの言葉が、気がかりだったのか長官は、彼に向けて疑問符を飛ばした。

「はい、どうやら、過去にも、そういう事例があったようです。過去と言っても、二百年前の話ですが、その時も、今回と同じように、空中に開いた亀裂の中に、吸い込まれていったようで、そして、吸

い込まれていった者たちが見た世界を、もう一つの世界、ビオンダードと呼んだそうです」

「ビオンダード・・・」

一方、こちらは、もう一つの世界、ビオンダード。

ミソラは、出発前日となった夕方に、スバルと共に、上のボロ母屋を出て、カリブに沈む夕日の美しさに、感嘆していた。

「きれいだね。スバル君」

「うん、星空を見るのも良いけど、夕日を見るのも良いな」

二人は、浜の上に座り込んでいた。静かな波の音が、二人の状態を、ロマンチックにしている。

ミソラは、前々からスバルに、言いたい事があるのだ。スバルの方も、それは、察知しているようだが、未だに、友達以上、恋人未満といった状態だ。二人とも、いい加減に蹴りを付けたかった。だが、緊張してしまって、その一歩が出せずにいた。しかし、今日、ミソラがここに呼び出したのは、スバルに思いを伝えるためだ。ミソラは、顔を赤らめながら、意を決する。

「あのさ、スバル君！」

「何？」

二人は、顔を見合わせる。スバルの綺麗な瞳に見つめられ、ミソラの顔はより一層赤くなる。

(やっぱり、だめだ。言えない)

「どうしたの？ミソラちゃん？」

トマトよりも赤いのではないか、というくらいのミソラに、スバルは、疑問を抱くが、すぐに、それを察知し、若干、赤くなるスバルであった。

「へ？あ、ああ、いや、あの」

誰しもそうだが、思い人の前では、素直に自分を表現できないものだ。それは、そこにいるスバルとミソラにも、同じことが言える。そのため、ミソラは、かなり勿体ぶっているが、これ以上、先延ばしにするわけにもいかない。勇気を出した。その言葉を述べようとした。

「あのね。スバル君・・・実は」

「好きだよ!!」

スバルが、予想外にも、自分からそう言ったので、ミソラは、啞然とする。

「ミソラちゃんのこと・・・」

この時ミソラは、若干、涙ぐんだ。嬉しさのあまりに、言葉に出来なかった。だが、やはり、思いは伝えるべきだ。

「私も、スバル君のこと・・・好きだよ」

まだ冷えていない顔の赤らみが、スバルには、それが、かわいく見えた。スバルは、無言で、ミソラの温かい体を抱きしめた。ミソラは、それを嫌がることなく受け入れた。

「・・・・・・・・」

数分間、抱き合ったままの沈黙が続くと、ミソラが、口を開いた。

「ねえ、スバル君」

「何？」

「キスして」

ミソラは、スバルが恥ずかしがることを承知で言った。彼女は、スバルが驚いたり、慌てたりするさまを見るのが好きなのだ。だが、スバルは、そういった素振りを見せなかった。

「いいよ」

二人の唇が重なり合った。

二人の様子は、ボロ母屋から、ずっと眺められていた。

「ああ、青春って良いもんだな。ゲフツ」

ジャツカーは、先程、町から買ってきたビールを飲みながら、そう言った。見た所、かなり酔っている。

「ほどほどにしておけよ。明日は、出発なんだからな」

ルーカスは、二人の様子を、まるで展望台から、綺麗な街を眺めるかのように言った。

第27話、夕日の見える浜辺にて（後書き）

今日の流星の投稿は終了です。

詳細は、活動報告で、追って説明します。

感想、評価、お待ちしております。

第28話、好きの際（前書き）

まず、先に謝らせていただきます。昨日は、突然の事情^{オヤフミケ}にともない。更新できませんでした。申し訳ありません。

第28話、好きの隙

スバル達は、港に輸送されるためのトラックを探すため、元給食センターに向かっていた。施設は、山の中にあり、そこに行くにはジープに乗らなければならない。ジャッカーとリーゼの二人は、揺れる上に、石油臭い旧世代の車両に慣れているが、スバルとミソラは、石油車両に乗った経験が、ほとんどないので、揺れの強さと石油臭さに、乗り物酔いしていた。

「おい、大丈夫か？」

二人の様子を気にかけてジャッカーが、後部座席を向いた。

「だ、大丈夫・・・です」

スバルは、無理に笑顔を見せながらそう言ったが、とてもではないが、体の方はかなりダウンしている。ミソラも乗り物酔いの状態だが、スバルほどダウンはしていないようだ。歌手という役柄上、そういうことに慣れているのかもしれない。石油車両に乗るのは、今回で二回目だ。それも関係しているだろう。

スバルは、今にも、朝食べた目玉焼きを戻しそうだ。（食事中の方、失礼）ウォーロックは、そういう相棒の背中をさすっている。言葉はガサツだが、行動には思いやりがあるようだ。

「酔い止め飲む？丁度、ドリンク薬を二瓶持っているけど」

二人に気を使って、リーゼが自分の持っていた酔い止めを二人に渡そうと、それを持って差し出すと、失礼ながら、スバルは、何も言わずに強引に掴み取ると、瓶のふたを開け、酔い止めを流し込んだ。

そうとうヤバかったと、お見受けする。ミソラは、ちゃんと感謝の言葉を述べてから、それを貰いつけた。

「ふ、ふう、少し、楽になった。あ、リーゼさん。さっきは、すいません。ありがとうございます」

楽になったスバルは、安堵の息を吐くと、先の無礼を詫げる。

「いいのよ。元気になってくれて良かったわ」

リーゼは、スバルに愛想笑いを送る。対する彼は、その笑顔に少し、赤らむ。それを見逃さないミソラではない。

「ああっ！スバル君赤くなってる！！」

「ええっ！？あ、ごめんミソラちゃん」

スバルは、どうして良いか分からず、とりあえず謝った。だが、それだけでミソラが許すと思ったら、大間違いだ。

「じゃあ、キス！」

「・・・へ！？」

ミソラの行動に驚かされたのか、彼女以外の全員が呆けてしまう。特にジャッカーは、運転しながら飲んでいたボスアニア製のコーヒ一豆を使って精製したコーヒ一を、吹き出し、リーゼに怒鳴られる。

「恋人同士だからいいでしょ？」

ミソラの発言に、スバルとミソラが出来ているということを知らなかつたリーゼは、再び驚く。ちなみに、知らなかつたのはリーゼだけだ。あのウォーロックですら知っているのに、同じ女性であるリーゼが知らなかつたというのは以外だつたのだろう。「えっ！知らなかつたの？」という視線を皆から送られる。それはさて置き、スバルは、するか否かの選択を迫られる。視線を感じるかもしれないが、やってしまえば、それで終わりだ。やらなかつたら、ミソラとの関係は危うくなるかもしれない。

「や、やっぱり。やらないとだめなの？」

「うん」

スバルは、少し期待したが、即答されてしまった。スバルに逃げ場はない。

「やるなら今のうちだ。そろそろ、マーキングポイントに到着する」

「青春は一回きりなんだから。やっちゃいなさい！」

ジャッカーは、一見、冷静そうに見えるが、言葉ではスバルを後押ししている。リーゼは、なにやら張りきっている。女性は恋愛からみが好きなものなのだ。

「じゃあ、いくよ」

スバルは、緊張しており、言葉から行動から何やらが震えている。ミソラは、無言で頷き、身構える。一息吐いて心を落ち着かせると、ゆっくりと、赤いそれに自分のものを近付ける。

『おい、スバル。そんなに緊張・・・ぐふっ』

空気壞しの破壊者^{DESTROYER}は、ハーブによって、その言葉を阻止される。相変わらずの二人、というところだ。
二人の唇が、あと数ミリとなったその時だ。

「おい、そのジープ止まれ！」

オードグリーンの迷彩服を着たような容姿をした男数人が、ジャックカーの操るジープの前に立ち塞がった。手にはレグサガンを持っている。

当然、二人の状態は、1ミリも動いていなく、維持されたままだ。

「まずい、KPMの隊員だ。まさか、こんな所にまで警備が及んでいたとはな」

以外と言いたげなジャックカーの顔には、若干、焦りも見える。この前のKPMの隊員との装備が違う。廃ビルに展開していたのはナイトメア。ムーの電波兵士を強化し、バトルウィザードにアップさせた物だ。オードグリーンの迷彩服のような装備はグレイ・ウォリアーだ。装備は、旧世代のイグザム・グラージャに比べて、アップした点は、まず、ウィザードが人格を持っていること。人格プログラムを埋め込んだことで、シンク口率は格段に向上した。もう一つは、装甲の強化だ。イグザムの装甲は、一見、堅そうに見えるが、それでも無かった。それに比べグレイは、装甲の形は変えず装甲の素材を変えただけで、防御力を上げることに成功した。そのため、イグザムとの姿形はそのままだ。そして、忘れてはならないのが、武装の向上だ。イグザムの欠点は、バトルカードの読み込みの遅さだ。戦闘では、一瞬の隙が命取りになる。これを改善するため、ウィザードの人格プログラムが導入され、カードの読み込みが上がり、戦

闘がよりスピーディに行えるようになった。しかし、人格プログラムの差があるからといって、完全というわけではない。やはり、まだコンマ一秒の差がある。その差を埋めるために開発されたのが、ナイトメアだ。その武装と、装甲から近距離戦がメインとなっているが、バトルカードの読み込みは、上がった。しかし、そこで問題が出てきた。元電波兵士ということもあってか、人間の方の、兵士の感情が制御できず、好戦的になってしまふのだ。酷い場合は、コンバットハイになることもあるのだ。

一向は、ジャツカー手作りのステルスPGMをオンにし、ジャツカーは、GI状態ゴーストインジブルで車を止め、彼らは、ジープを乗り捨て、茂みに隠れる。

「ん！？だ、誰も居ない」

見事、GIに騙されているKPMの隊員たちは、どうしてよいか分からず立ち往生している。

「今のうちだ。マーキングポイントに向かう・・・って、え！？」

さっきのこともあってか、欲求不満だったミソラは、一瞬の間を突いて、スバルの唇を奪っていた。スバルは、何が何なのか分かんず、オドオドしている。当然、そんなわけで皆からの視線を浴びる。ちなみに、GIは、特定の人物しか見える様、設定されている。

「ちょ、ちょい、おい！」

ジャツカーも慌て模様だ。

第28話、好きの際（後書き）

次は、12時頃を目途に更新する予定です。

第29話、敵か味方か（前書き）

遅れてすみません。

来週から、定期的に、金土で更新します。

第29話、敵か味方が

マーキングポイントに到着した一向は、ルーカスとの通信役であるリーゼが、ハンターからルーカス宛てに電話する。やがて、コール音が止み、画面にルーカスの顔が映し出される。リーゼは、その状態を皆のハンターに送った。

『どうやら、ポイントに着いたようだな。そこから西の方角にブロック塀があるのが分かるか？その塀の下部分に穴が空いているだろう。そこから中に入れる。その後は、輸送されるためのトラックを探すんだ。いいな』

状況も状況なので、誰一人喋らない。皆が無言で頷くことで、ルーカスへの返答となった。

『よし、チームを二手に分けよう。リーゼとスバルがWチーム。ジヤッカーとミソラがBチームだ。常に連絡できるように、ハンターの通信は全員と繋いでおけ。こちらからは以上。では各自、行動を開始してくれ』

リーゼはスバルを導きながら、施設内を探索する。元給食センターということもあって、学校の給食室から漂ってくるのと同様、おいしい匂いがスバルの鼻孔をつつく。もし、ここにゴン太がいたなら、作戦の障害になるだろう。「腹、減った」とか言って、漂っ

てくる匂いの元に、よだれを垂らしながら向かっていくはずだ。無論、スバルもこの匂いに釣られそうになるが、高まる感情を強引に抑制する。

「トラックは、ここの倉庫内のどこかにはあるはず……でも、途方もなく探しては時間の無駄。だったら、トラックが何処に向かうか記された書類を探せばいいはず。スバル、いい？書類を探すわよ。長引くと思うけど大丈夫？」

リーゼは、さつきまでハンターで通信をとっていたジャツカーとの話した内容を殆ど変えずに、スバルに伝える。書類を探すなんて、スバルからしてみれば書類という類たぐいを見たことがない。22XX年にまでなると、紙を使った書類は過去の技術。唯一、使われているのは由緒正しき表彰状くらいだ。

しかし、幾ら理由ずけても活路は見出せない。結局は、やるしかないのだ。書類という言葉につまずきながらも、スバルは「大丈夫です。この程度なら」と頼もしいことを言ってくれた。どうも、最近のスバルは、レッドジョーカーに変身して以来、自分が、今、どのような状況にあるのか、自覚が芽生えたようだ。

「頼もしいこと言ってくれるじゃない！フュー、フュー」

ふざけている場合ではないのだが、リーゼは左肘でスバルの脇腹を軽く突つつきながら茶化した。対するスバルは、その茶化しと、笑顔に照れて赤くなり、思わず顔が解ほとけてしまう。ここにミソラが居合わせたら、飛び蹴り物だ。

一方、ジャッカーとミソラのBチームはトラックが沢山並んでいる同施設の車庫内で待機していた。彼らの役割は、チームWが持ってきた情報を元に対象ターゲットであるトラックを探しあてて、チームWの二人をリードすることだ。トラックの車庫内は、懸命に働く従業員の姿と、警備するKPM隊員らで溢れている。車庫内は、学校の講堂以上に広い。元々は、車庫ではなかったらしいが、需要が高まるなかで、トラック車庫は次第と広くなっていき、このように大きくなったわけだ。大きい分、隠れる場所はいくらでもある。しかし、開けた構造になっているため、隠れた所で直ぐに見つかってしまうだろう。その二人は、GIを使い、敵の目を欺きながら車庫内の片隅で待機している。

「なあ、ミソラ」

今まで無言の空気だった二人間は、ジャッカーが口を開いたことではがらりと変わった。

「何ですか？」

「スバルのことを守ってやってくれ。あいつ、あんな風に明るく振舞っているが、実際は結構悩んでいる。この前の廃ビルのときだって、お前の知らない所で酷く抱え込んでいた。あいつのことを好きならフォロワーしてやれ・・・こう言うセリフって父親が言うような普通・・・」

ミソラはスバルのことが好きだ。スバルもミソラのことが好きだ。だが、今までは単純に「好き」なだけだった。低い恋愛感情だったのだ。今のスバルにとって必要なのは、「愛」だ。突然、異世界ビョウダーに連れて来られて、親や友人とも離れ離れになった。そこに唯一居たのが、ミソラだ。無論、あの三人も今となっては二人の保護者みた

いなものだが、真の父親、母親ではない。親の愛から離れてしまったのだ。ミソラならその心境が分かるはずだ。両親と離れ離れになる辛さが。せめて、恋人同士ではなくここに居る間だけ、恋人以上になって欲しい。ジャッカーはそう言いたかったのだ。彼女以外にここに友人はいない。絆のつながりを重視するスバルにとってそれは、きつい物だ。だが、恋人が一人いる。それだけでも十分なのだ。ジャッカーから話を受けたミソラは、決心した。スバルにとってのかけがえのない恋人。いや、恋人以上になろうと。

その頃、Wチームの二人は事務室にこっそり入り込み、書類をあさっていた。他の人物が見たら、書類が勝手に宙を舞っているのに驚きを隠せず当然だろう。

「うーん。やっぱりないな」

如何にも萎なえてますという顔をしながらリーゼは、持っていた書類を机に投げつけた。その衝撃で何枚かの書類がひらりと地面に落ちた。先に事務室で仕事をしていた事務員は、幽霊でもいるのではないかと恐怖している。流石は、ジャッカー特製のゴーストインビジブルだ。

「そういえば、地下室には行ってないですね。そこ行ってみましようよ」

ネガティブな考えをよぎらせているリーゼに、スバルは励ましも込めた言葉を発する。

こうして、二人は地下に向かうことになった。

その地下に向かう道の途中だった。思わず声を上げてしまう程の出来事が起こった。

G Iのお陰で見つからないので、余裕に歩いている二人。二人の思考は、別の所に行っていた。その時だ。

警報音が施設中に流れ出し、アナウンスが入る。

『監獄内の捕虜が脱走！警戒態勢に入る。非戦闘員は退避し、隊員は、各自戦闘配置に付け！！』

そのアナウンスの直後、上の天井が崩れ何者かが降りてきた。その爆発の衝撃で、G Iの効果が無効となる。降りてきた物の正体は、

「ソ、ソロ！何で君がここに！？」

スバルは驚愕のあまりに、情けなく腰をぬかしてしまっている。

『てめえ、また出てきやがって！今度は何だ！』

ウォーロックがウィザードオンになり、唸っている。

そのソロは、地面にはいつくばっている。体には幾つもの傷跡もあり痛そうだ。

彼は、無言で立ちあがると、数秒間立ちつくし、やがて地面に倒れ込み気を失ってしまう。

「ちょっと、あなた大丈夫？」

何も知らないリーゼは、ソロに立ちよる。

「何故こんな所に、とりあえず助けよう」

スバルは、そう言いながら彼に立ちよった。

リーゼは、ハンターを取り出しジャケットと無線をとっている。

『了解、捕虜の回収だな。それと、探していたトラックだが、こちらで見つけた』

「え！？どうやって？」

『奥の方に、ローテ・シヨン表があった。混乱に乗じてそのトラックに乗り込んだ。さっと来い』

第29話、敵か味方か（後書き）

いよいよ、次回はボス戦？ですW W

第30話、ウィンディ・ハリケーン

ジャックカーは、スバルとリーゼをトラックまで案内し、その中に乗せた。倒れたソロは、トラックの中に入っていた空の木箱の中に隠し、見つからないように細工した。このトラックは、貿易港まで直行する。身を任せていれば、港までは楽に行けるはず。行き先の途中に検問所があるが、G Iを使えば難なく通り抜けられる。この前のように失敗することは許されない。オーパーツを奪い取る機会^{ゴースト}は、これで最後だからだ。

幽霊状態^{ゴースト}で、一向が暫く待機していると、やがて、何も知らないトラックの運転手が操縦席に乗り込み、ギアを押した。

リアルライザーのトラックは石油車両と違って、揺れも少なく、排気ガスが出ないため環境にも優しい。ナビに道を設定するだけで後は、車が勝手に動いてくれる。運転手の仕事は、ギアやブレーキをかけることと、安全の確認だ。運転手の給料が下がったのは、少し問題だが、安全性では明らかに、従来^{ゴースト}の車両より優れている。何事も安全第一だ。

トラックがセンターを過ぎてから、何時間か経った。今まで休みなく走り続けていたトラックは、突然、停止した。壁に耳を当てて

見ると、鳥や虫達の鳴き声や、水の流れる音が聞こえる。だが、それだけではない。人の足音や声が、わずかながら聞き取れる。どうやら、例の検問所に到着したようだ。今まで無言だった四人の雰囲気は、更に重くなり、息を殺す。いくらG Iがあるとはいえ、気配を勘付かれる可能性だってある。それから、しつこく中を探索されて、ソロが発見され、そしては、最悪の状態になる。ということだ。

「確認させて貰うぞ！」

グレイ・ウォリアーに電波変換している男たち三人が、トラックのドアを開け、中に入り込んできた。一番手前にいる男が隊長らしく、後ろについている部下に、あれこれと命令している。一方、トラックの運転手は、余裕な顔でタバコを吸っている。電子タバコだ。つくづく、何も知らないということが、どれだけ安全で、危険なのかということをおぼろげに思われる。

話を戻すが、ソロを隠した木箱は、特殊な技術を用いてG Iをコーティングしている。見つかることはないだろう。

そうして時間が過ぎて行き、誰一人見つかることはなかった。無論、木箱もだ。しかし、隊員たちがトラックの中から出て行こうとしたその刹那だった。

「えっ!?!」

スバルのG Iの効果時間が切れて、ロックマンの姿を彼らにさらけ出してしまった。両者に、一瞬の沈黙が走る。しかし、その時間も長くは続かなかった。

「ロ、ロックマンだ!! 捕える!!」

「はっ!?!」

隊長が、スバルを指をさし、部下に罵声に近い声で命令した。部下二人は、バトルカード「ソード」を装備して、向かってきた。

「ロックバスター！」

とっさにスバルは、ロックバスターで二人を仰け反らせた。その隙に、奥からG.I.を解いたジャツカーが、バトルカード「マンティスダガー」で、仰け反った二人を切り裂く。

「うわっ！！！」

彼らは断末魔を上げ、その強靱な攻撃に電波変換が解除される。そして、生身の人間が、気絶した状態で倒れていた。

ここで説明して置かなければいけないことが一つある。電波変換についてだが、これは、スバル達の住む世界には無い機能があつて、デリートされるのを防ぐため、強度な負荷が体にかかる、強制的に電波変換が解除させられる「セーフティシステム」という物がある。デリートというものは、電波体が消滅し、また、その人間も死亡する事を言う。デリートされれば、電波体は残留電波を使つての復元が可能だが、人間の場合は完全にあの世に逝つてしまつてるので、死者を蘇えさせるなんて、不可能だ。それゆえのシステムだ。両者が生き残つていれば、何時でも戦闘参加は可能だ。いかにも、合理的な手段だと言える。しかし、体にそれなりの負荷がかかる訳だから、解除されたあとは、人間もウィザードも気絶状態になる。

施設内から、どんどんと新手が出てくる。ざつと二十人程度だろうか。いくらなんでも、これだけの敵を一掃するのは難しい。

「捕える！！捕えるんだ！！ここで奴らを逃がしたら、我々に転機

は無い！」

チームFは、全部隊の中で一番戦闘力が低い。よって、今まで捨て駒同然の扱いだっただ。隊長は、捨て駒から一刻も早く脱したいはずだ。だから、血眼になってロツクマンを探し、そして今、罵声を上げながら命令しているのだ。だが、これも立派な戦い。敵に情をかけるわけにはいかない。ジャツカーは、バトルカード「クサムラステージ」を使って、道を草むらに変えた。

「今だスバル！」

「喰らえ！ヒートグレネード！！！」

スバルは、火属性のバトルカード「ヒートグレネード」を使って草むらを炎上させた。木属性は、火属性に弱い。喰らうと通常より倍のダメージを受ける。当然、そこに居合わせた隊員たちもだ。

「ギャーーーーーあちィ、あちィーーーーあーーーー！！！」

炎の痛みが、KPMの隊員たちを襲った。自分の体が炎上する痛みは、普通の体でいる時と同じだ。セーフティシステムのお陰で、辛うじて命ある。ウィザードも同様だ。

「.....」

スバルは、炎上する草むらを見つめ、押し黙っていた。隊員達には、何も悪気はないはず。彼らには、帰りを待っている者達がいるはず。それが、家族であれ、恋人であれ、友人であれ、それら全ての者達は、悲しみを背負うことになる。スバルは、自分の手で行われたその行為が信じられなかった。今まで、戦ってきた者達は、悪に満ち

溢れたというわけではないが、それなりだった。しかし、今回は何の罪もない兵士たちを・・・

「心配するな、あいつらは生きてるよ。たぶんね」

ジャツカーが、半ば泣き態のスバルを励ます。隊員たちを殺したのではないと。しかし、彼らには、KPMの隊員たちには、それなりに覚悟はあっただろう。

「さあ、先に行くぞ・・・という訳にもいかないか」

あまりにも衝撃的な出来事に、トラックはジャツカー達を置いて先に行ってしまった。こうなると、ウェーブロードを使って行くしかないだろう。ジャツカーを含む四人は、非常に、げんなりとした。

「おやおや、増援要請がかかったので来てみれば、こんな状況ですか」

「「「「！！」「」」」

何時の間にやら、自分達の後ろに、翼の生えた悪魔のような姿をした電波体があった。全く気付かなかった。周波数すら感じる事が無かった。その悪魔は、ブルーの体に黒い翼、頭にはバイザーがついている。左腕には、「ウインディアタック」のような大きな扇子が備えられている。その扇子は、どうやら、収納が可能なようだ。腰には、ライフル状のレグサガンである。そんな彼は、空中に浮いてロックマンを見下ろしている。

「はじめまして、こんにちは。私はウインディ・ハリケーン。以後、お見知りおきを。早速ですがロックマン」

「えっ！？僕？」

「あなたの他に誰がいますか？お手並み拝見と行きましょうか。もし、あなたが逃げようとするならば」

そういつてウインディは、ミソラ達を指さした。

「スバル君！！」

針状のピットが数機、三人を囲んでいた。恐らくウインディから射出されたものだろう。

「どうなるか・・・分かっていますよね」

不敵な笑みを浮かべる彼に、スバルは苦虫を噛み砕いたような表情になった。

「くっ！ミソラちゃん達は関係ないだろう！」

「関係無いはずないでしょう。彼らはあなたの味方、つまり、私の敵です。敵を駆逐するのは当然の話。違いますか？」

目的が何であろうと戦いは戦い。ウインディの言っていることは、まさしく正論だ。敵か味方かで全てが決まるのだ。敵なら殺すまでということになる。

「さて、お喋りはここまで！殺やりましょうか」

そう言ってウインディは、自分の翼を羽ばたかせ、スバルに向かっ

てきた。

対するスバルも身構える。

「ウエーブバトル・ライド・オン!!!」

スバルはバトルカード「マッドバルカン」を使って、ウィンディに狙いを定めて脅威を放った。しかし、破壊した手ごたえは無かった。

「当たりませんよ!」

ウィンディは、前にジャツカーが言っていた「翼の舞い起した風によって弾道を変える」という戦法を使ったのだ。それにより、バルカンの弾丸は一発もヒットしなかったのだ。

「くそっ!」

「今度は、こちらから行きますよ。ウインドスラッシュ!」

ウィンディは、強力な風を巻き起こした。そして、それが強靱なものとなり、スバルの体を切り裂いた。まるでカマイタチのように。

「うっ! あっ!」

『大丈夫か! スバル!』

見かねたウォーロックが、安否を問う。この程度の攻撃なら、なんとか凌げそうだ。

「大丈夫だよ」

「喋っている暇がありますか？」

『「っ！！」』

ウィンディは、余裕そうな表情を浮かべながら、攻撃で態勢が崩れかけたロックマンに、猛スピードで突進してきた。

「バトルカード、ロングソード！！」

向くってくる敵を向かい撃つため、スバルはロングソードを装備した。ジャッカーからのアドバイス通りの方法だ。タイミングはシビアかもしれないが、攻撃するだけした方が攻撃しないより幾らかましだ。

「それで、私を斬れますか？」

「舐めるな！」

ソードで斬撃を繰り出すようにするが、やはり避けられてしまう。

「っ！！」

ウィンディは、スバルの両肩を両足で鷲掴みにし、地面に叩きつけた。

「ああっ!?!」

思いつきり地面に叩きつけられたのだ。痛みを感じないはずがない。さっきまで、悠然としていた自然の渓谷の風景は一変していた。近接も、遠距離もだめだった。他に方法があるとなれば、バトルカードの性能に頼るしかない。

「バトルカード、スパイムネット!」

この前、ジャツカーから貰ったバトルカードだ。軍用だけに威力も高く、使い勝手もいい。ランチャーになった右腕を、ウィンディに向けロックオンする。標準が定まると意識を集中させた。あのウィンディのことだ。ミサイルは簡単に破壊されてしまうだろう。しかし、この能力は、ミサイルが本命ではない。中に入っているネットを使って、敵の動きを封じるのが目的だ。いくら颯爽とする彼でも、これには敵わないはず。

「喰らえ!?!」

スバルは叫び、ミサイルを発射した。飛翔体を追いかけるミサイルに驚いたウィンディだが、何のことはなく扇子でそれを破壊した。しかし、そこからネットが飛び出し、彼の身動きを封じる。思惑通りだ。

「なっ!何ですと!馬鹿な!」

ウィンディが手古摺ていずっている間に、ロックマンは、レッドジョーカーにファイナライズし、ノイズフォースビッグバンNFBを繰り出す為、ノイズを貯めた。

「くっ!?!何だ?この蜘蛛の巣のような網は斬れないぞ」

「ロック、ノイズ率は？」

「200パーセントだ。行けるぞ」

スバルは結果に満足し、無言で頷いた。

「ノイズフォースビッグバン！レッドガイアイレーザー！」

問答無用のレーザーに、ウィンディは圧倒され、電波変換は解除されたように見えた。だが、現実はそううまくは行かなかった。流石に、チームXの隊員が、この程度でやられるとは思えない。攻撃が振りかかる前に、扇子でスパイムのネットを自力で斬り裂いて、見事に抜けだしていた。その結果にジャッカーは驚愕した。当然だろうが、あのスパイムのネットを切り裂くなど有り得ない。これが特殊部隊チームXの実力というところだ。

「しかし、良くやってくれましたね。私をここまで本気にして、楽ませてくれます。オーバーシステム、作動！」

「ん？」

ウィンディの雰囲気が一変し、攻撃的になった。スピードが上がって、背中のブースターが点火した。オーバーシステム。これは、ウィザードの本来の力を引き出すものだ。特殊部隊チームXのウィザードは他のイグザムやグレイ、ライガと比べて性能が上だ。しかし、その性能がゆえに、人体に影響が掛り過ぎるのだ。そのためのもーバーシステムということになる。一定時間、能力全てを開放することができるこのシステムは、人間自体をも覚醒させる。

そのオーバードライブについていけなかった。レッドジョーカーで

は機動力が弱い。ウィンディからは、「おデブさん」という汚名を着せられるほどに。

『おい、スバル。作戦変更だ。ブラックエースに変身するぞ』

「どうして?」

『ブラックエースのほうに機動力は上だ。奴を倒すなら、ブラックエースの方がついて行けるはずだ』

こそこそとしているロックマンが気に食わなかったのが、ウィンディは顔をグレーにした。

「ほう、私の前で作戦会議でもしているのですか?ふつ、無駄ですよ。そんなことしても勝てるはず無いのに。止めましょうよ無駄な抵抗は。大人しく投降してください」

スバルは、ウィンディをキツと睨みつけブラックエースに変身した。無言で剣を抜きウィンディに立ち向かう。

「はあ、いくらやっても無駄ですよ!」

対するウィンディもバトルカード「ソード」を構えて、スバルと鎧よろい迫り合いになった。始めはウィンディが優勢だったが、だんだんとウィンディのソードにひびが入ってきて、終にはソードは折られてしまった。

「な、なんと?!?!?」

態勢を立て直すため、ウィンディはスバルから離れた。全速力で圧

倒的にスバルと距離の差をつけた気がしたが、実際はブラックエースの方が速く、すぐに追いつかれてしまった。

「速いですね、それ」

「ブラックエースを舐めるな！」

今度は、今までミソラ達を取り囲んでいたピットで、スバルにビーム攻撃を繰り返した。しかし、スバルは、ソードで全て防いだ。

「ビーム攻撃を全て回避したか。ならば、これはどうだブラッディ・トルネード」

ウィンディが回転すると、巨大な竜巻が巻き起こり、周辺の物を巻き込んで行った。

「ブラックホールエネルギー！！」

向かってくる竜巻に対しスバルは、手のひらに小さなエネルギーボールを作り、それを竜巻に投げつける。そしてその竜巻は、そのボールの中へ消えていき、終いにはボールは消滅した。

「まっ、まさか！我が最大の技、ブラッディ・トルネードが敗れたというのか！！」

「今度こそ！ノイズフォースビッグバン！！ブラックエンドギャラクシー！！！！」

お馴染みの必殺技、ブラックエンドギャラクシーを繰り返した。ウィンディはその脅威から逃れようと、全速力で逃走するが、ブラッ

クホールの中に飲み込まれていった。

「おのれ、ロックマン！！たとえ私が敗れようと、他の者達があな
たを、きつときつと捕えるでしょう。そして、そして・・・フッ、
フフフフフフ！！ハハハハハ！！！」

第31話、感じる・・・（前書き）

今、思うと、もう31話目なんですわ。

なんか、再びこの小説を振り返ってみると、中学校の頃の思い出や、受験勉強に追われていたあの頃が浮かび上がってきましたわ。

サブタイトルは、変な意味ではありません。勘違いしないように（笑）

第31話、感じる・・・

トラック運転手が恐怖のあまりに、トラックごと逃げてしまったため、溪谷からの移動は徒歩ということになった。正確には、ウェーブロードの上を走っていくのだから、さほどの時間は掛らない。移動もトラックの中に居た時よりかは、スピーディーに行ける筈だ。ステルスPGMのお陰で、ウェーブロードを通っても周波数が特定されることはないから、身を心配する必要もない。しかしそれならわざわざ危険を冒してまで、初めからトラックを捕まえる必要など無かつただろう。と言いたくなるかもしれないが、重要なのは、スピードではない。港では隠密行動が主となるため、不要な戦闘は避けたい。いくらG.Iがあるからといっても、制限時間がある。そうなれば、戦闘は免れないだろう。先のウィンディとの戦いは、偶然と偶然が重なって起こった事にしか過ぎない。要するに、計算外だったということだ。

スバル達は、無人となった検問所の施設で暫く休憩してから港に向かうことにした。スバル自身、戦闘の疲れも癒えていないだろう。それに、皆、ずっとトラックの中に乗っていて体が固まっている。少しの運動が必要だ。しかし、休憩が必要とはいえ、長居はできない。いずれ、敵の増援が、ここにやってくるだろうから。

「しかし、予想外だった。まさか、あのネットを切り裂く者がいるとは・・・いや、違う。予想外なんかじゃない。全く、俺は馬鹿だ」

ジャッカーは、先の戦闘での驚愕の事実を呟いた。それだけ、衝撃的だったのだろう。スパイムネットは、元々のバトルカードのレベルから、彼がカスタマイズを加え、攻撃しやすいようにしていたし、ネットも通常よりも粘着力を上げていた。正直、彼の頭の中には、スバルがスパイムネットを使ってウィンディ・ハリケーンを倒す姿

が映像化されていた。勝算しかなかったと言ってもいいほど、彼には自信があつたのだ。ところが、それを、いとも簡単に破られてしまい、怒りどころか憎しみを感じるくらいだ。自分の甘さと不甲斐無さに。落ち着いて冷静に考えれば、あのチームXの隊員が、あれほどのシヨボイ攻撃で倒せるはずなどないのだ。それを、勝利に置き換えていた自分は、馬鹿としか言いようがない。

「過ぎたことを言っても仕方ないですよ。結局、勝てただからそれでいいじゃないですか」

見かねたミソラが、ジャツカーを慰める。しかし、彼は慰めなど求めていない。慰めを受けても、自分が惨めになるだけだ。彼が欲しいのは結果だ。無論、スバルが勝利したのは喜ぶべき結果だ。ジャツカーも、ミソラやリーゼに混ざって彼を称賛した。しかし、自分の技術力を使って、勝利したという結果が欲しいのだ。自分の技術がスバルの助けになって欲しいのだ。ジャツカーは、何を隠そう兵器開発者だ。結果が欲しいのは研究者の性である。しかし、現実には甘くない。ジャツカーの理想の結果など、そう簡単には舞い込んで来ない。ただ、準備して待つしかないのだ。

「・・・そうなのかもしれない。だが、俺が欲しいのは」

「しっ！静かにして！」

ジャツカーの言葉は、リーゼによって遮られた。リーゼは壁に張り付き、窓から外の様子をうかがっている。その険悪な表情から、何かが起こっていることが予想できる。

「敵の増援部隊よ。思ったより行動が速いわね」

「それだけ俺達を逃したくないのだろう。急ごう、敵に見つかる厄介だ」

コーヒーマグカップや、皿やらを元あった場所に直し、G Iを起動させ、全員が大わらわでその場から立ち去った。ウェーブロードを使って行けば、港までそう時間はかからないはずだ。

当然だが、スバル達の存在に気付くK P Mの隊員などいる筈もなかった。

スバルは、ウェーブロードに上がると、その感覚の悪さに驚いた。以前、この世界に迷い込んできた時に見たウェーブロードは脆そうだった。実際、見た目通りだった。歩くよりスピードが出るのは当然の話だが、スバル達の世界の物と比べ、スピードが出ない。それに、道幅が狭く一人しか通れそうにない。ちょっと派手な動きをすると、つり橋の様にぐらりと傾く。戦闘になればどういふ結果になるか知れている。

『うわっ！！何だこのウェーブロードは！？スバル、落ちないように気をつけるよ』

「うん。ウォーロックもね」

『俺が落ちるわけないだろう』

ウォーロックは、電波の力で宙に浮いている。空を飛ぶことは出来ないが、周波数変換による瞬間移動なら可能だ。

「喋っている暇はない。急ぐぞ！」

話している二人に緊張感の無さを感じたのか、ジャッカーは注意して急かした。

港に着いたのは三時間後だった。溪谷を出たのは夕暮れ時、本来なら五時間かかる道のりを三時間で、しかもウィルスやウィザードに見つかることなく来れたのは奇跡と言える。G Iの効果が斬れるという事態が起こりはしたが、手前の良いジャッカーが用意した予備のエンジーのお陰で何とか凌ぐことが出来た。そして、ようやくやって来た貿易港。G Iフル稼働中で、皆はウェーブロードの上で港を見下ろす形となっている。そんな四人は自分のハンターから、ルーカスと音声通信を取っていた。

『よし。ようやくここまでたどり着いたな。リーゼとジャッカーは、保険として陽動作戦を行い、俺の指示に従いながら、ダイナマイトを使って爆破騒ぎを起こし、警備網を攪乱かくらんしてくれ。スバルとミソラは、オーパーツが保管されている倉庫を見つけ出し、それを奪取してくれ。恐らく、オーパーツを奪うことが出来るのは今回が最後だと考えていい。各員、気を抜くな！幸運を祈る』

通信はそこで切れた。これからは本腰を入れることになる四人は、少し緊張した面持ちだ。リーゼとジャッカーは自分の役割を果たす

為、スバル、ミソラと別れた。

ジャッকারは、貿易港の警備詰所に近い倉庫に着いた。

「ここにダイナマイトを設置すればいいんだな？」

『ああ、発見されないようにな』

「わあってらあ」

いちいち返答するのが面倒くさくなったのか、ジャッকারの口調は投げ槍調になった。リアルライザーのダイナマイトを取り出し、倉庫の側面に設置する。この辺の倉庫群は今使われていないようで、従業員の姿は無く、巡回している警備電波体しかない。

「設置終了した。これより集合ポイントに向かう」

『了解』

ジャッকারと別れ、リーゼは廃棄されたタンカーの前に来ていた。リアルライザーが普及して以来、石油燃料を使用するタンカーは、一般的に廃棄された。今は、乗り心地も良く、安全度も高いリアルライザーの輸送船に世代交代している。

「ここにダイナマイトを設置するのね」

『ああ、ジャッকারは既に任務を終えて集合地点に向かっている。急いでくれ』

「いちいちつっさい！黙れ！！」

何かと皆から酷い扱いを受けるルーカスだった。

「感じるよ。あの感覚……」

「スバル君……」

所変わって、スバルは、自分の感覚を頼りに進んで行く。そして、着いた先は、コンテナターミナルに近い場所にある倉庫だった。あの感覚、あの感じ、それぞれの種族の思いや願い、そして憎しみが詰まった遺産^{オババツ}。懐かしい感覚。短い時間だったが共に戦った。忘れる筈もない。スバルは、その感覚に引き寄せられるかのように、その場所にたどり着いた。

第32話、敗北と苦汁

スバルは今、倉庫の前にいる。コンテナターミナルに近いこの場所では、G Iを使わなくとも積み上げられたコンテナ群がスバルとミソラを隠してくれるだろう。だが、念には念を入れG Iは起動したままにする。

この倉庫の中から感じる波長から懐かしさが湧き起こってくる。スバルは、その場に茫然と立ち尽くしていた。その感覚が、スバルを魅了し、そうさせているのだ。ミソラが声をかけても、返事は無い。ウォーロックさえもが茫然としている。

「ちょっとスバル君！！スバル君！！スバル君！！！！」

パチツと、手と頬がぶつかり合う音が港内に響き渡った。現在もまだ、従業員は作業を続けている。機械音や、コンテナどうしがぶつかり合う音などで、その響はかき消されてしまい、誰もその音に気づく者などいなかった。ただし、スバルとウォーロックを除いてはの話だが。

「イテツ！あれっ！？僕どうしてここに？」

「覚えていないの？」

どうやらスバルは、この倉庫前に来るまでの自分の記憶が無いらしい。酔っ払いでもあるまいし、ましてや記憶喪失でも無い。波長に魅了され続けていた彼はその何とも言えない感覚に脳が集中してしまい、記憶を刻み込むことすら忘れていたようだ。人間の記憶という物は、常に刻み込まれ、そして、何時でも管理されている。その管理を放棄してしまうほどの力だ。よほどの物だと推測がいく。

『どうやら俺達は、オーパーツに惹かれ過ぎていたようで、ここにくるまでの記憶が全くと断つていいほどの白紙だ。この感覚、実際に飲み込んだことのある俺なら分かるぜ』

一年前の夏休み、ミソラと二人でロツポンドーヒルズの博物館に行った時の話だ。展示されていたベルセルクの剣が、不可抗力によってソコに持って行かれそうになっていた時、とっさにウォーロックが剣を噛んでその場凌ぎをしたがために、飲み込んでしまい、一時はどうなるかと大変だった。

「その思い出。懐かしいね」

『ああ・・・』

二人が昔の戦いの思い出に感慨にふけっていると、スバルとミソラのハンターに通信が入った。通信の送信元はルーカスだった。

『おい何やってんだよ！持ち場を離れるなつて言つたじゃないか！』

ルーカスは物凄い険相で画面越しではあるが、二人を怒鳴りつけた。この作戦では、リーゼとジャツカーがダイナマイトを設置した後、二人は撤収ポイントで起爆ボタンを押し、ダイナマイトを発火。その混乱に乗じて倉庫に向かう。ということだった。これは、G I の効果が切れた時のための保険ということだった。それに、撤収する際にも混乱のお陰で脱出行動も楽に行えるからだ。

「え〜と、あの、すいません。僕の所為で・・・」

スバルは、自分を責めながらルーカスに謝罪した。まるで、親にでも怒られたかのように。それを見ていたミソラは、スバルに助け舟を出した。

「いえ、私の所為です。私があそこでスバル君を止めていれば」

先に先にと歩いていくスバルに、まるで同調するかのようにしていたミソラにも責任はある。ルーカスは、申し訳なさそうに謝る二人を更に問い詰めるということは、彼の人間としての性がそれを許さなかった。

『だあー！！もう！謝らなくていいから、謝る必要なんてないから！さっさとオーパーツを奪って帰ってこい！気をつけるよ！』

言葉ではそう言っているが、中々と優しく、良い奴だ。日常の会話からも、そういうことが予想できる。

オーパーツが保管されている倉庫の扉には、ロックが掛っている。そのロックは「倉庫のロックの電腦」にアクセスし、その中で解除行為を行わなければ、扉が開かないという仕組みになっている。空を見上げればウェーブロードが浮いている。そのウェーブロードは倉庫の電腦に繋がっていることから、ウェーブロードから電腦内にアクセスできるという仕組みであるということが考えられる。早速、二人は周波数を変換させ、ウェーブロード上に上がる。その刹那、

ここは反対方面にある倉庫群の中の一部が、爆発した。リーゼとジャッカーの仕業だ。この爆発を見ていた近くの警備兵は、慌ただしく倉庫の方面に走って行った。

「これで探索が楽になるね。ロック、電腦内にアクセスできる？」

『無理だ。アクセスロックが掛っている』

倉庫内にはオーパーツが保管されているのだ。そう簡単には通してくれないだろう。

「ロック、何とかならない？」

『お、俺に言われてもな』

スバルは、相棒のウォーロックに、この状況を打開してくれという視線を送っている。対するウォーロックは、自分にはどうしようもないことを頼んでくるので、どうしていい物かと、返答に困っていた。

「ルーカスさんに電話したら？」

今までの悪戦苦闘をあつさりと言いのけるように、ミソラは呟いた。その何気ない一言が、彼らの助け船になった。

『「その手があったか!!!」』

スバルとウォーロックの聲がはもった。普通に考えていれば気付くような物なのだが、オーパーツに引き寄せられている所為なのか、通常の思考が出来なくなってしまうていたのかもしれない。スバル

は、右腕を顔の位置まで持つてくると、通信ボタンを押した。ルーカス宛てだ。しばらく、コール音が鳴り響く。やがて、コーヒーマグカップを持ったルーカスの顔が映し出された。さっきは持っていないかったが、のどが渴いたのかもしれない。実は、彼は結構なコーヒーの愛好家である。

『どうした？スバル』

「オーパーツが保管されている倉庫の前に来ていますが、倉庫の扉にロックが掛っているです。ロックを開けるためには、電脳内からロックを解除しないといけないんです。そのアクセス権限を持っていないんで、なんとかありませんか？」

スバルから話を受けたルーカスは、よく刑事ドラマなどで主人公がやるポーズをしながら思考を張り巡らせた。何秒か考えた後、「閃いた！」とでも言うかのように、手をポンと叩いて言った。

『この前、ジャッカーがアクセス解除プログラムを作って、それを俺に渡して来たんだ。忘れてた。よし、それをメールに添付して送ろう』

そう言つてルーカスは、一方的に通信を切った。思い出したという興奮のあまりに、周りが見えなくなつてしまつていたのだらう。興奮して周りが見えなくなつてしまうのは、彼の直すべきポイントだ。歴史の話になつて興奮してしまうのが、その例だ。通信が終了して何分か経つた後、アクセス解除プログラムが添付された本文なしのメールが送られてきた。

「これで大丈夫かな？」

スバルは、アクセスポイントに近付いた。普通ならアクセスロックのポップアップが右腕に表示されるのだが、アクセス解除されて、アクセスを問うポップアップが表示された。

「行こう、ミソラちゃん！」

「うん、行こう！」

ミソラから送られてきた愛想笑いに、心が躍ったスバルだった。二人の様子を見ていたウォーロックは、俺を忘れるな。という視線を送り、口を開こうとしたが、ハーブの真空飛び膝蹴りで遮れてしまった。ウォーロックの空気が読めない性格は、一向に治る気配を見せない。

脳内に入ると、強制的にG Iが解除されてしまった。その自体にロックマンとハーブノートは、驚愕した。二人で顔を見合わせている。

「なっ、何でG Iが？」

驚愕したスバルの顔から出た一声は、それだった。

『時間切れでは無いようだな。どうやら、何らかの理由でG Iが強制解除されてしまったようだな』

ウォーロックは、自分の憶測を二人に語った。その瞬間、ジャツカーに対する怒りが二人と二体の心に湧きあがってきた。普通、そういうことは伝えておくべき事だ。忘れていたと笑って言えるほどの

物ではない。だが、彼のことだ。「すまん、忘れてた」とニコニコしながら言うだろう。その彼の姿が彼らの頭のに映し出され、二人と二人は、諦めの溜め息を吐いた。

「かつ、考えていても仕方がないよ。速く、ロックを解除して帰ろう」

「そうだね。でも、こういうことは早めに言ってほしいよ」

呆れ調でスバルはミソラに言うと、彼女は愛想笑いを返すが、その笑いにはジャッカーに対する怒りとあきらめが入り混じって、なんだか、ルナのようなドス黒いオーラが出ていた。それにスバルが身震いしたのは言うまでもない。

気を取り直して、一向は奥に進んで行く。G Iの保護が無いため、人目には注意していたのだが、やはり、一体のウイルスに発見されてしまう。

「テキ、ハツケン！ デリート！」

「っ！ ロックバスター！」

つるはしを振り上げて攻撃しようとしてきたウイルスに、とつさの反応でスバルはロックバスターを放った。つるはしが地面に接するよりも、ロックバスターがウイルスを射ぬくほうが速く、ウイルスは、うめき声を上げる暇もなく、デリートされた。

「ふうっ」

「大丈夫？ スバル君」

肝を冷やして汗を出していたスバルを、安否を問いながらミソラは彼の額の汗を拭いた。スバルの頬は自然と赤くなる。そうやって、二人の顔はどんどん近くなっていき、そして、唇が重なる。こんな状況下でいい度胸だ。

『お、おい！そんなことすつ、ブハツ！？』

『あんたは黙ってなさい！』

遮ろうとしたウォーロックをハープは、またも真空飛び膝蹴りをお見舞いし黙らせた。その後、戦闘を混ぜながらも、ロックシステムを破壊して倉庫の扉を開けた。

倉庫の扉前、リアルライザーの扉は、やけに鉄臭く、所々に錆が付着している。そういうモチーフらしい。電波の力で何でも作れるようになったわけだから、雰囲気は大事だ。

「いよいよ、だね」

『ああ・・・』

一向は緊張した面持ちだが、何処となく胸を膨らませているようにも見える。それもそのはず、オーパーツさえあれば、元の世界へ帰るのだから。胸を膨らませているのは、頭の中で、元の世界へ帰ったら最初に何をしようかと考えているからだろ。よくある思考パ

ターンだ。皆の期待を背負って、スバルは、扉に手を当てる。だが、その時だった。

「止まれ！」

ふと、後ろから声をかけられた。相手に恐怖心を植え付けさせるような、低くて重い声だ。スバルが後ろを振り返ると、なんと、そこにはスバル達をこの世界へ連れてきた張本人が立っていた。天然がかかった銀髪、漆黒の瞳、そして、何者も寄せ付けぬ気迫。ポロボロのコートを羽織った謎の青年だ。

「そこで何をしているのだ？ ロックマン？」

ギリリとスバルの顔を睨みつけながら、その男は近付いてくる。その様に、ミソラは次第と二人から距離を取る態勢になってしまった。

「この倉庫の中の物を盗んで何をする気だ？ 闇市にでも売るのか？」

「………」

スバルの心を恐怖心が支配してしまっていて、声が出ない。今までに感じたことの無い恐怖だった。まるで、蛇に睨みつけられた蛙のような感覚だ。

「はっ！ 全く、お前みたいな犯罪者がいるからこんなご時世だ」

「……ち、違う」

覇気を出している青年の、あまりの恐怖心に声すら出ずにいたスバルだが、やっとのこさで出た一声だった。

「なにが違うんだ」

「ぼ、僕は・・・何も、してない」

事実だ。廃ビルの時の隊員たちに言った通り、彼は何も悪事をふるってはいない。むしろ、その逆だ。悪を行う物を倒し、隣に居る大事な人の笑顔を守る。彼の所業が、どう伝わっているのかは知らないが、彼が犯罪者のはずがない。

「勝手にほざいてる。ブラックリストの事実は覆せない。ついて来て貰うぞ」

青年は、そう言ってスバルを強引に連れて行こうとした。その刹那、音符の攻撃が青年に向かって飛んできた。

「っ！」

青年はスバルを押し倒し、防御態勢を取る。その攻撃の衝撃で、コートがずれ落ちる。彼の体が外にされけ出してしまふ。すぐさま男は電波変換する。眩い光が辺りを包みこむと、一人の屈強な戦士が登場した。体は、白と黒が入り混じっていて、顔にはグレーのバイザーを装着している。両腕の上手首にはソードが飛び出すように装置が施され、隙間部分がある。マキシマムソードという物だ。ミソラからの攻撃が止むと、両手首からソードが飛び出る。そして、ミソラに向かって行った。

「スバルくん！今のうちに逃げて！」

「えっ！？でも、ミソラちゃんは！」

「いいから速く！」

ミソラは、ギターでソードからの攻撃を受けとめながら言った。スバルを逃がす為だ。青年もとい、KPMの狙いはスバルだ。彼を逃がすという策は妥当だといえる。

「必ず、帰ってきてよ！」

「当たり前じゃん。私は、スバルの恋人だよ」

状況も状況であつてか、ミソラがスバルの名前を呼び捨てした。やはり、呼び捨ての方が恋人という感じはでる。だが、そんな悠長なことを言っている場合ではない。現に、力ではミソラより男の方が上だ。じりじりと、後ろの方に追いやられていく。スバルは踊り出したくなる心境を押さえて、頷くだけし、撤収ポイントへと向かった。今、オーパーツを取るほどの時間が無い。とりあえず、一旦退くべきだ。

「奴はいい仲間を持ったものだな」

「えっ！？・・・ぐふっ！！」

スバルが行ってから暫く経った後、男はそう呟いた。男の予想外の発言に瞬時、ミソラは呆ける。その隙を男は見逃さなかった。左腕のソードを直し、ミソラの腹部を思いつきり殴った。ミソラが倒れ、彼女が気絶したのを確認すると、ロッキマンの後を追った。

あの後、スバルは猛スピードで走り、撤収ポイントの近くに来ていた。そこは、沢山のコンテナが山積みになっていてトラックや、フォークリフト、クレーンなどがあり、爆発して沈みかけの無人の輸送船と、無傷の輸送船、二隻がある。俗に言う、コンテナターミナルという奴だ。このエリアには、人っ子一人居ない。陽動がバレたのか、全員、退避しているようだ。

「もう、ここまで来れば大丈夫だろう」

『ああ・・・ん？スバル、あの野郎の周波数を感じる、近付いてきてるぞ。気をつける！』

スバルは、近くのコンテナに隠れようと辺りを見渡す。隠れられそうな所は沢山ある。一つ、空になったコンテナが開きっぱなしになっているのを見つけた。その中に隠れようとしたが、遅かった。

「ここにいたか！ロックマン」

スバルの後ろのウェーブロードに、あの男が立っていた。

「っ！お前が、ここに来たということは、ミソラちゃんを・・・許さないぞ！」

さっき、男から感じた恐怖心は消え失せ、今はただ、ミソラを手に掛けた彼が許せなかった。しかし、完全に恐怖心が消えたわけではない。その心境を押さえこんでいるのだ。

「お前、とは失礼な。俺はロゼットだ。電波変換時はロゼット・マキシマム。特殊部隊チームXの隊長だ」

「どうだっていい！バトルカード、マッドバルカン！」

スバルは、バトルカード、マッドバルカンを装備し、その脅威の銃口をロゼットに向けた。しかし、ロゼットは、近くのコンテナを使つて三段跳びをし、バルカンの銃弾から逃れた。そしてスバルの後方に降り立った。バルカンを撃ちながら、スバルはロゼットを目で追うが、彼の次の行動が頭の中によぎつた。そのため、彼が後方に降り立ったと同時に、すぐさま彼の方向へ振り向き距離を取つた。そして、近接戦闘に備え、新たなバトルカードを読み込もうとするが。

「バトルカードを読み込ませている暇があるのか？」

「えっ！うわっ！」

ロゼットはマキシマムソードを装備し、地面を蹴つてスバルの方に一瞬で近付き、彼の体を斬りつけた。スバルは、その攻撃の威力を有効活用するため、一度、アクロバティックに空中で一回転。そして、地面に降り立つ。だが、ロゼットはスバルの行動を予想していたようだ。

「バトルカード、ショットガン」

「ぐはっ！！」

軍用バトルカードである「ショットガン」をロゼットは読み込ませ

ていた。そして、その猛威を振るう。マキシマムソードは、バトルカードとの併用が可能なようだ。普通のバトルカードでは自分の手に変換される。だが、マキシマムソードはソード自体が手首にしている装置の小さな隙間部分からでているので、手は変換されていない。従って、バトルカードの併用が可能になる。

スバルは、ショットガンの威力によって後方に吹っ飛んでしまう。その痛みが体に迸るが、

その痛み^{ほし}に時間を食っている暇はない。体中の痛みを押さえこんで立ちあがった。ロゼットは、ショットガンを撃った位置から微動だにしない。

「戦闘力は高いようだが、なんとも哀れだな」

「くっ、ロックバスター！！」

何発も、何発も撃った。だが、そのビームがロゼットの体を貫くこととは無く、全てソードで受け止められてしまう。そうやって、じりじりと二人の距離が縮まっていった。

「もう止める。無駄だ」

「バトルカード、キャノン、キャノン、キャノン！ギャラクシードバンス、インパクトキャノン！！」

ロゼットの言葉を見せず、スバルはギャラクシードバンスであるインパクトキャノンを放ったが、軽く避けられてしまう。

「バトルカード、スタンハンド！」

「うっ、ぐあああああ！！！！」

ロゼットは、マミーハンドのようなバトルカードを装備し、手を地面につきつける。すると、スバルのいる位置に地面から一本の手が生えてきて、それに足を掴まれる。それと同時に、スバルの体に何百万ボルトの電流が流れた。当然だが、それなりの電撃が流れれば、気絶してしまう。スバルの電波変換が解除されると、ロゼットは、彼の小さな体を抱え、ハンターを持ち、何処かへと消えて行った。ロゼット、特殊部隊チームXの隊長は、この陽動作戦を予想していた。ルーカスと親しい中であつた彼は、彼がこの状況でどのような作戦を練るか、だいたいの察しがいつていた。警備員をわざと、陽動にはまつた様に見せ、誰も居なくなつたと同時に、ロゼットが探^{クリッ}索するといふものだ。

第32話、敗北と苦汁（後書き）

第3章、～END～

第33話、君だけを（前書き）

お久しぶりです。

長々と更新できずすみませんでした。

第33話、君だけを

港での戦闘から二日が経ったが、未だスバルが離島の何処に居るのか掴めぬ状態だった。それどころか、その離島に渡ることすらできぬ状態だ。離島には、船かウエーブロードを使って渡るのが普通だ。もう一つの手段として、ノイズウエーブがあるがKPMの部隊が占拠していてジャッカーお手製のステルスPGMでも潜入は厳しい。なぜなら、ステルスPGMにはノイズの耐性が無い。PGMにノイズが干渉した場合、当然だが、正常な作動が望めなくなる。

余談だが、ステルスPGMのGIは電脳内にアクセスすると効果が無効になる。ステルスPGMも万能ではないということだ。

「……………!!」

ミソラは、ベッドからガバツと起き上ると、辺りを見渡した。そこはブレイル湾海底施設の医務室だった。ロゼットとの戦闘により気を失っていたらしい。何箇所か擦り傷があるが、ガーゼによる処置が施されていた。

『気がついたのねミソラ』

「ハープ・・・」

相棒のハープが目覚めたミソラにハンターから声をかけてきた。ハープの面持ちは何故か暗い。

「スバル君は？」

ミソラがその言葉を発すると、ハープはその顔を更に暗くし、無言で首を横に振った。

「・・・そう・・・」

ミソラはハープの仕草を見て重い声を発した。彼を思う気持ちが、彼女の心境を重くした。

彼女は自分を、自分のことを呪った。彼を守ることが出来なかった自分を。今までは、彼に守られて生きてきた。だから、せめてもの恩を返したかった。出会ってくれた恩、一緒に戦ってくれた恩、今まで守ってきてくれた恩、そして、自分のことを好きになってくれた恩。それらの恩を返したかったのだ。だが、返すどころか、敵の手に渡ってしまった。後悔と、自分への憎しみが募るばかりだ。

同時刻、ボスニア離島の某所

そこは治療室の様だ。沢山の医療機器と薬剤がある。そして、酸素マスクを取り付けられ、眠っているスバルの姿。そして、その姿をガラス越しから眺めている二人の男が居た。

「星河スバルの様子はどうか？」

「見ての通り、未だに目覚めぬままです。相当、身体的にも精神的にもショックが大きかったのでしょう」

ジンは、白衣を着た医員と話し込んでいた。内容は、先日捕獲したスバルについてだ。

「とてもではありませんが、尋問は無理でしょうな。身体も心も安定していませんので」

「回復するのを待つしかない。ということか・・・こんな小さな少年が犯罪者とは、とても思えん」

そう言って、ジンは腕組みをする。そして、その行動に呼応するかのように医員は答える。

「全くです。でも、上層部の命令には逆らえない。でしょう?」

「ああ、やっていることと言っていることが矛盾しているよ。何のための平和を守る軍隊なんだか」

ジンは、嘆きにも聞き取れる言葉を溜め息と共に吐き出し、ガラス越しのスバルの小さ過ぎる身体を見つめ直す。

S I D E : スバル

僕は、何も無い空間に居る。何も無い、無だ……。いや、これは夢だ。だが、夢だと分かっても、まるで自分が虚空の空間に居るように感じる。宇宙の果て? 死後の世界? 分からない。ただ此処には、光は無く。その光を光と認識する他の命も無い。た

だ、自分一人。寂しくポツンと立っている。

「これが、『無』なのか・・・」

そこには、相棒のウォーロックも、げらげら笑うゴン太も、ポンプン怒る委員長も、懸命に背伸びをするキザマロも、にっこり笑うツカサも、睨みつけるソロも、うまい棒をサクサクいわせるシドウも、爽やかに振り向くルーカスも、作業中に眼鏡をクイツ、とあげるジヤッカーも、温かみを感じるリーゼも、美味しいカレーを作ってくれる母のあかねも、強く、そして気高く自分を包み込む父の大吾も、そして、いつも隣で微笑んでいたミソラも、誰も居ない。本当に自分一人だ。確か、前にソロが言っていた孤独とはこのようなものなのだろうか？・・・いや、そんな『孤独』とは比べ物にならない。ただ、無限に続く宇宙の虚空に、浮いているかのような、そんな錯覚を覚える。

僕は辺りを見渡した。星はどこだろう、銀河はどこだろう、太陽系はどこだろう、地球はどこだろう、日本はどこだろう、コダマタウンはどこだろう、僕の家はどこだろう・・・忘れられないように、僕は单身歩き出した。行く宛てもないのに。ただ、闇の中を歩く。そうやっても何も変わらないのに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！？ あの光は？」

気がつくと、僕は眩い光に包まれて・・・！！！！

「久しぶりだね、ウォーロック。何年ぶりかな？」

あれは、大人の僕？

『さあな、一々覚えていない』

「ふっ、相変わらずだな。ミソラは元気？」

『元気なわけないだろう。お前が宇宙に行って、そしてこうして・・・』

「フロンティア？」

さっきから、僕は何を言っているんだ。本当に僕なのか？

『笑えない冗談だ！その服は何だ、その仮面は何だ、その椅子は何だ、お前の部下たちは何だ！』

「僕の、いや、俺の軍隊だ」

僕の軍隊？どういうことだ。

『ふざけるな！何でこんなこと』

「僕の息子のリュウセイは元気かい？」

『まるで、昔のお前を見ているような感じだ』

「・・・そう、それは良かった」

『もう、昔みたいに帰ることは・・・』

「出来ない、する気はない」

『何故だ？何度も地球を救ったお前が』

「俺は、この星の闇を見た。皆がブラザーバンドで繋がれる？戦争は、分かりあえないから起こる？違う。人類が利益を求める限り、戦争は終わらない」

違う、そんなこと、そんなこと言っちゃいけないんだ！

「恐らく、これからも人類は過ちを繰り返す。これ以上、人と人が争うのは見たくない。だから、僕は、いや、俺はフロンティアとなつたんだ・・・」

ああ、僕の、僕は、一体！？こんな悲しすぎる・・・僕が離れてゆく、ああ、ああ！？

「・・・？」

あの赤い服にギターは、ミソラちゃん？どうして？

「・・・きみ・けを」

えっ！？何て言っているんだ、聞こえない。聞こえないよ。

「・・・きみ・けを」

お願いだよ。声を、声を聞かせて！！

「君だけを、君だけを待ってる」

「！」

僕は、暗闇から抜けだすと、そこは何処かの治療室だった。

S I D E : ミソラ

私は、プレール湾の、あの夕陽が綺麗な砂浜に来ていた。ここは、スバル君に、私の素直な気持ちを伝えた場所。伝えられた場所の方がいいかな？でも、そのスバル君は、今は居ない。

「スバル君・・・君だけを・・・君だけを待っている」

第33話、君だけを（後書き）

初めて、こんなを書きました。
感想くれると嬉しいです。
それではまた

第34話、混沌とした世界へ（前書き）

長々と更新できずすみません。

テスト勉強やら風邪をひくやらで色々ありまして、更新できずにいました。

第34話、混沌とした世界へ

夕方になって、ミソラ、ジャッカー、リーゼの三人は、ルーカスに呼びかけられ、ブリーフィングルームに集合するように言われた。どうやら、スバルについてらしい。

「あら、ミソラ！ 偶然ね」

ミソラがブリーフィングルームの自動ドアの前に立った時、後ろから彼女の名を呼ぶ声がした。ミソラが後ろを振り向くと、そこには愛想笑いを浮かべているリーゼが立っていた。

「あつ、リーゼさん。今までどこに行ってたんですか？」

今朝方、ミソラが目覚めて朝食を摂りに此処ブリーフィングルームへ行つたときには、既にどこかに出かけていたのかリーゼの姿は見当たらず、ルーカスとジャッカーがビールを飲みながら談笑している姿があった。その時ミソラが、「朝っぱらからお酒？」と思ったのは言つまでも無いことである。

「ヤボ用よ。私、こつ見えても忙しいの。イ・ロ・イ・ロとね」

「なつ、何か変な意味で聞こえるんですが……」

こつして、廊下でばったり会ったミソラとリーゼの二人は、他愛もない話を交わしながら部屋に入ってしまった。

部屋の中にはジャツカーとルーカスが、またビールを飲みながら喋っていた。彼らは朝から夕方までずっと飲んでいた様だ。酒好きなのは理解できるが、度が過ぎている。

「おっ、リーゼ帰ったのか」

ジャツカーはリーゼ声をかけるが、案の定、彼は無視されてしまう。最近、ジャツカーは彼女の冷たい反応に慣れてしまい、無視されようが、殴られようが、どうでもよくなってしまっていた。

「お帰り。リーゼ」

「ただいま。ルーカス」

今度はルーカスが笑みを混ぜながら話しかけると、ジャツカーの時と違って、まるで太陽のように輝いた笑顔を返した。リーゼはルーカスとは異常な程に仲が良いが、ジャツカーとの仲は、まるで冬のシベリアの寒さのように冷えている。ジャツカーとリーゼは昔のことと色々あるようだ。

「まあ、腰かけな。外は暑かったらう？」

「ものすごくね。やっぱり、ボスニアの気候は暑苦しいわ」

今まで笑顔で振舞っていたリーゼだが、少し疲れていたようだ。ルーカスが座るように言うと、遠慮なく最前の椅子に座った。

彼女が言った、気候が暑苦しいというのはいまいち意味が分からないが、リーゼが言いたいのは湿気と気温が高く、暑いということであろう。全く、リーゼの語彙能力が低い所為で要らない行を作ってしまった。

「察しなさいよ作者！気を遣ってやったのよ！」

お前に気を遣われんでもやっつけていけるわ、ドあほ！

「いや、作者喋り過ぎでしょ。そういうことは後書きでして下さいよ」

ごめん、ミソラ。お前に悪気は無いけど、少し黙ってて。これは俺とリーゼの問題だから。

「何よ、ドあほって！ドあほって言った方が、ドあほなのよ！！」

古いわ、古すぎるわ。あゝ、なんか時代感じるな。幼稚園生ぐら
いかな

「そろそろ、話しを始めたんだけど……準備はいい？リーゼ。後、
作者は黙ってる」

俺には当たり酷いんだなルーカス！もういいわ。好きにしる。勝手にやってる。お前らのことなんか知るか。

「んで、気を取り直してスバルのことなんだけど、ロゼットに連れ去られてから、もう一週間くらい経つ。こうなってくると、スバルの精神面が心配だ。KPMの連中は妙に正義感強いから悪人は絶対にゆるさない。彼がどういう扱いを受けるか、そんなのは考えなくても分かる……」

ルーカスは浮かない顔だった。昨日、アルカスから受けた傷はほとんど完治していて、ギブスも取れているが、骨折した左腕の動きは、幾らかぎこちない。

「なあルーカス。あいつを助け出す為に離島に渡る方法は無いのか？」

まるでルーカスに、救いを求めるかのようにして、ジャツカーは言った。彼だってスバルを離島から救い出したいのだ。あんな変貌の地に、少年を一人にしておくは訳にはいかない。

恐らく、スバルは一人で投獄されているだろう。なぜなら、ウオリックは研究のために、スバルとは別の場所に隔離されている可能性があるからだ。彼らが、そのような所業を行うのは、ロクマンにはオーパーツを使用した経歴があり、その痕跡が残っているとすれば、ウィザードの方だからだ。KPMの研究班がそれを見逃すはずがない。

「無い訳ではない。ただ非常に危険だ」

「危険だろうが何だろうが今は行くしかないだろう」

ジャツカーの言っていることは妥当だ。今、彼を助けなければ、スバルが別の国へと搬送されてしまう可能性がある。救出に向かうのなら早い方が良い。

「……ノイズウェーブを使う」

「！」

前にも述べたが、この国のノイズウェーブはKPMによって占領、管轄かんかつされている。彼らが来る前は、犯罪者やウイルスなどの巣窟だった。それらはKPMの部隊によって、ことごとく殲滅された。まいった。今では、ノイズウェーブの中央エリアに警備基地が造られていて、ノイズウェーブに許可証無しに入り込んだ者は、問答無用に銃殺される。

「離島に繋がるウエーブロードは無い。連絡船も全て港から出航していて、離島に行くにはノイズウェーブを遣う以外に方法は無いんだ」

驚きの表情を浮かべる三人を、ルーカスは落ち着かせるようにして言った。

「俺の創ったステルスPGMの中にあるGIは、電脳世界では効果が発揮できない。それはノイズウェーブでも同じことだ。しかし、電脳世界と違ってノイズウェーブでは何が起こるか分からない。なるほど、お前が「危険」というわけだ」

ジャッカーは、ただ単に、事実を語ると自分の見解を述べる。

GIが電脳世界で使用できないのは、電脳世界にGIが適応できないからだ。普通、電波体は、電波世界と電脳世界を行ったり来たりできるが、それは人間の体と同じように適応能力があるからだ。当たり前だが、電波世界と電脳世界は空間そのものが違う。移動には、電波体そのものの電波情報を書き換えねばならないのだ。その

適応能力がG Iには無い。ヨイリー博士の創ったエースP G M、及び、メテオP G Mにも、電腦世界へ適応できるよう設定されていた。しかし、ジャツカーの創ったステルスP G Mは完全なオリジナルではない。実は、ゴーストインビジブルという考えは、K P Mのサーバーから盗み出した物だったのだ。その情報には、電腦世界へと適応するための方法は書かれていなかった。ジャツカーは仕方なしにG Iに電腦世界への適応能力を施さないまま、ステルスP G Mを彼らに渡したのだ。

「他に方法が無いんだ。分かってくれ」

「ノイズウェーブを使うのは分かった。しかし誰が行くんだ、その混沌とした世界に？」

現状ではノイズウェーブを使わなければ、離島に渡ることが出来ない。ジャツカーはそのことは了承できたようだ。しかし、ここに出てきた問題は、誰がノイズウェーブを渡るかということだ。ノイズウェーブの中は、当然だがノイズが密集している。ミソラもとい、ハープ・ノートはメテオP G Mがあるため、ノイズの影響は受けないだろうが、残りの三人は違う。イグザム・グラージャのままでノイズウェーブに侵入した場合、無傷で済むはずがない。ミソラの持っているメテオP G Mを他に使い回せば問題は無いかもしれないが、

「わっ、私が行きます！」

ジャツカーの一言に沈黙していた皆の空気を壊したのは、ミソラだった。

「はあ！？ ミソラ、お前自分がなに言ってるのか分かってんのか？」

ミソラの発言にルーカスは、怒声に近い声をあげた。しかし、ミソラの瞳はゆるぎない。

「スバル君は私たちの助けを必要としてるんです。今、行かなくてどうするんですか」

「だからってお前が行くことはないだろう。ミソラ、気持ちとは分かるが……」

ミソラは懸命になってルーカスを説得するが、そのルーカスは中々答えをくれない。

『ポロロン。私からもお願いするわ！ あんなガサツで空気壊しても一樣、仲間なのでね』

ハープもミソラの説得に加わった。ハープもミソラとは、一緒に修羅場を潜り抜けてきた最高のパートナーだ。彼女の恋人を助け出したいという思いを素直に受け止め、そして彼女の思いを形にする。それが、ウィザードとしてのハープの役目だ。ちなみに、上のハープのセリフはウォーロックのことだ。

「私も！ 夫のサポートをするのが妻の役目でしょ！ ねっ、ミソラ？」

「いや、まだ結婚はしてないんですが、友達であり彼氏であるスバル君を放つてはおけません！」

とうとう、ミソラの説得にリーゼが加わってしまった。最終的にルーカスは、女性陣を相手にしてしまう形になって、少し、頭が重

くなくなった。

「……お前らが、そんなに言うのなら分かった。許可してやる」

ルーカスも女性を相手にはしたくないらしく、結局、OKを出してしまった。しかし、彼の許可にジャッカーは反発した。

「本気かルーカス！ ミソラー人でノイズウェーブに侵入するなんて自殺行為に等しいぞ！」

「落ちて着けジャッカー。今の彼女ならやってくれるさ。分かるだろうお前にも？ あのオーラが」

恋人を救いたい。その思いがルーカスにOKを出させた。そして恋人を思う気持ちがルーカスにはオーラになって見えたのである。

「ここは彼女を信じよう」

「……好きにしる」

ルーカスがジャッカーに笑顔交じりで言うと、そのジャッカーは吐き捨てるようにして答えた。

「じゃあ、出発は明日ね。各自準備しておくように」

ルーカスがそう言うと、皆、部屋から出ていき自室へと戻った。出発は明日。ミソラにとっては眠れない夜になることが確実だった。

「そう言えば、ソロはどうしたんですか？」

ミソラが自室への帰り際にリーゼに質問した。港行きトラックの中にソロを隠しておいたが、その後、ウインディ・ハリケーンとの戦闘で生き別れになってしまっていた。

「大丈夫、ジャッカーが回収しておいたみたい。トラックを見つけないのは結構苦労したそうよ。そう言えば、気絶していたミソラを運んだのもジャッカーだったわね」

「そうだったんですか。私、ロゼットにやられて気絶していたから分からなくて……」

そう言ってミソラは気分を落とした。

「まあ、心配することはないんじゃない？ ムー人の彼、ソロっていう名前なのね。かなり傷だらけだったけど、身体の方は頑丈なよ
うね」

「今、ソロはどこに居るんですか？」

ジャッカーが回収したなら海底施設に居る筈だが、ミソラは一度も彼をここで見ていない。疑問に思って当然だろう。

「病院に居るわよ。あれだけの怪我を負ってたから、とてもこの医務室の設備じゃ足りなくって」

「病院の人達、大丈夫でしょうか？」

普通ならソロの体のことを心配するものだが、このミノラの質問は少しおかしい。リーゼは不思議に思い、彼女に問いかけた。

「何で？」

「いえ、ソロ、結構気難しいから……」

第34話、混沌とした世界へ（後書き）

次回は、今週以内になると思います。

第35話、歪み（前書き）

テスト期間中でしたので、一週間、更新できずにいました。今週からは更新できそうです。

第35話、歪み

午前六時頃のボスニアの離島であるグレゴダ島にて、エリーはジャージを着て、朝のランニングを行っていた。こんなに早起きなのは、事務系の人間を除けば彼女だけである。ちゃんとしたトレーニングの時間も他にあるのだが、彼女はいつもこうして、朝方のランニングを楽しんでいる。日が昇ったばかりの空を見上げ、日光に照らされて光る海面を眺める。彼女にとってこれほど清々（すがすが）しいものは他には無かった。グレゴダ島は、KPMによって要塞が建てられているが、島の全てが鉄の塊ではない。森林の領域もいくらか残っている。しかし、実際はいくらかと言うよりほとんどと言ったほうが妥当なくらいである。要塞の構造も関係上、島の内部が要塞となっていて、表面上のほとんどは緑豊かな他の島とは変わらない。

そんなエリーは、岸のほうからだんだんと森のほうへ入って行った。足場はあまり整備されておらず、落下の危険性が高い。おまけに草木は生い茂って彼女の視界を阻む。普通なら引き返すところだが、彼女はここをランニングコースにしている。相当な鍛えられ方をされてきたという推測が出来る。

エリーが、急な斜面であるその道を登ろうと気を入れた時、突如、茂みが揺り動いた。

「っ!?!」

驚き、警戒態勢をとるエリーの存在を知っているのか否か、なおも茂みは散々揺れ動き、そして茂みからでてきたのは……

「子猫!?!」

親とはぐれてしまっているのか、それとも家族を亡くしたのか。境遇は知らないが、エリーの前に姿を現したのは迷い猫だった。その子猫は、ニャーと小さな声で鳴くと小さな瞳を彼女に向けた。

「かつ、かわいい……」

可愛いものには目が無いことに性別は関係ない。それが、そこに居るエリーゼ・エリダヌスにも同じことが言える。しかし、対する子猫は少し怯えているようだ。それもその筈、エリーと子猫の身長差は地球と月までの距離くらいだ。子猫が怯えるのも無理はない。

「大丈夫、怖くないから……」

エリーは子猫が怖がらないように、腰をかがめ、左手をそつと出し、「おいで」と手招きする。そのエリーの反応に、少しは安心感を覚えたのか、子猫は彼女にそつと近づく。だが、その刹那、彼女のハンターが鳴り響く。電話のようだ。うるさいくらいのコール音に驚いた子猫は全力疾走で、もと来た道を走って行った。

「あつ！ もつ……」

場壊しのハンターに向かって舌打ちをしたくなるエリー。後少しで子猫を抱けたのと思うと、怒りが湧き上がってくる。

『あの、副長……今、時間よろしいでしょうか？』

「全然無理！ 帰ってから聞くから後にして。急ぎの用事じゃあないんでしょっ？」

電話の相手は彼女直属の部下からだった。部下の声は、まるで波乱万丈の思春期である中学二年生が、恋の悩みを先輩に打ち明ける時

のトーンだった。

『ええ、大丈夫です。ですが、事態はかなり深刻です』

「そう……まあ、もう少ししたら帰るから、それまで待ってて」

『了解です』

画面に映し出された部下の顔は、聞かされてはいないが、事態が深刻であることは明々白々だった。ハンターをしまつと、エリーは生い茂っている草木をかきわけながら、ランニングを再開した。朝日がだんだんと遮られていって、少し寂しさを感じた。

一方、ミソラ達は、ボスアニアの首都であるサンエル市の市街地の片隅に来ていた。ここには、使用されていない倉庫群があり、不良達のたまり場となっていた。

その倉庫群の中に、他の倉庫もそれなりに酷い有り様なのだが、それらに劣らず、尋常じゃないくらいに破壊された倉庫が一つあった。屋根は大半が崩れ落ち、扉の半分が、倉庫内に倒れこんでいる。あまりにも危険過ぎるので、その倉庫の周りには有刺鉄線が張り巡らされ、「入るな危険！」という看板が立てある。流石の不良達も、その倉庫だけには手を着けていなかった。しかし、ミソラ達だけは、この倉庫内に入っていた。なぜなら、そこからノイズウェーブへ行けるからだ。今回は、ミソラが単身で、ノイズウェーブに潜入することになっていた。かなりのリスクが伴うが、この方法を使っても、離島に渡れないのだ。それに、ミソラ自身が望んだことでもあった。スバルを救いだしたいという思いが、人一倍強いのだろう。

ミソラ達は、倉庫の奥の方で色々準備をしていた。ジャッカーが、倉庫の壁に自分のハンターをかざすと、ノイズウェーブへの入り口が出現した。実は、ハンターにはノイズウェーブを探し当てる機能がある。流星のロックマン3をプレイしたことのある者なら分かると思う。

ルーカスは、後ろで作業をしているジャッカーを余所に、ミソラと話していた。

「ミソラ……これからお前が行く場所はかなりの危険地帯だ。一応こちらからも通信でオペレートはするが、それでも危険な場合は逃げるんだ。いいな」

「わかってますって。大丈夫ですよルーカスさん。それにこっちはメテオPGMがあるんですから。それでも敵わない時は逃げますよ」

ルーカスはミソラを心配している。当然だろう。年頃の女が、あんな混沌とした場所へ行くというのだ。例え、保護者でなくとも案ずるのは理解できる。しかし、対するミソラは、彼の心配はあまりきにしていないような素振りをしていた。本当は怖くてたまらないのだ。相棒のハーブはいるが、何時も守ってくれるロックマンもといスバルはいない。それにジャッカーやリーゼもないのだ。恐怖心と緊張感で胸が張り裂けそうになるは当たり前だ。だからといって、逆に相手に心配をかけるような行動をとっては、それこそ、余計な心配をかけてしまう。だから、ミソラはアイドルで磨いた演技力で平気な素振りを見せているのだ。

「本当に大丈夫だろうな？ もし、お前に何かあったらスバルとウォロックに会わせる顔が無い」

「だ、だから、そんなに心配しなくっても大丈夫って言っているじ

やないですか。過保護だな、もう」

この時、内心でミソラは、嬉しくも思っていた。長い間、親という関係にいたる者のいなかった彼女にとっては、この世界で出会ったルーカスや、ジャツカー、リーゼの存在は、兄や姉のようなものだった。過保護というものに不慣れな彼女には、そういう態度は、自分が一人でないと認識できるもので、嬉しいのである。

そんなこんな会話をそっていると、作業が終わったのか、ジャツカーが二人に声をかけてきた。

「こつちの準備は終了した。後は、ミソラがノイズウェーブに行つて、俺達が戻つて指揮をするだけだ」

相変わらずジャツカーは冷静に物を言う。少しは洒落という物が分かって欲しい物だと、ルーカスとリーゼは日頃から思っている。無論、そのことはジャツカーには秘密だ。

ジャツカーが詰まらないことしか言わないので、少し、ミソラの顔が強張った。そこで、リーゼの出番である。

「よっし！ ミソラ、旦那を取り返してきなさい！」

「いや、だから、結婚してないって！」

リーゼの旦那という言葉にミソラは反応し、慌てふためき頬を赤らめながら否定する。リーゼによって、場に笑の雰囲気生まれた。ルーカスは、ミソラの慌て様に受けたのか、豪快に笑っている。ジャツカーは、あまり悟られないように、クスクスと小さく笑っている。

「まつ、頑張つてきなさいな！ 応援しているからね。あつ、でも無理はしないでね」

「はい、行ってきますす！」

ここから、だんだんと女性ムードになってきたので、置いてかれては不味いと、ルーカスが喝を入れる。

「よし！ みんな聞いてくれ。スバルを無事に救いだせるかどうかは、各員の頑張りにかかっている。心して取り組んでくれ！」

ルーカスは、リーダーっぽい姿を意識して言ってみた。この時、彼は内心でうまくいったとガッツポーズをとった。しかし、わざと格好付けた所がもろばれだったようだ。あるうことか、ジャッカードに指摘されてしまう。

「……お前、何格好つけてんだ？」

「なっ！？」

啞然としてしまっているルーカスと、ジャッカードを余所にして、リーゼとミソラは再び、女性のみトークを始める。

「私達、そろそろアジトに戻るから。気をつけてね、ミソラ」

「はい！！」

リーゼは、ミソラの両肩に自分の両腕を寄せ、まるで彼女の母親かのように言った。ミソラから、さっきよりも快活な返事が返ってくると、自分のハンターを取り出し、目の色を変えて、それを天に掲げた。

「電波変換！ リーゼ、オン・エア！」

彼女の体が眩い青色の渦に巻き込まれ、その中から出てきたのは、リーゼが電波変換したイグザム・グラー ज्याである。

「いつてらっしやい」

リーゼは、そう言っつて、崩れた天井を見上げる。丁度、天井が崩れおちているので、そこから青い空を窺えた。脆いウェーブロードが浮いている。当然ながら、アジトに戻るためには、ウェーブロードを使わなければならない。彼女は、周波数を変換させて、その脆いウェーブロードに上った。そして、アジトの方向に向かって行った。

ミソラはそれを眺めながら、先程より感慨深く「いつてきます」と言った。

下らないことで言い争いになっている二人は、リーゼが居なくなっていることに今更気付いたようだ。

「あつ、リーゼの奴、先に行きやがったな」

「仕方ない。ルーカス、俺達も後を追うぞ」

さつきまで喧嘩していた二人は、すぐさま団結した。本当に分からない連中である。

「気をつけてな」

「頑張つてこい」

一人ずつ、ミソラにエールを送ると、二人は電波変換し、慌ただしくリーゼの後を追った。

一人になったミスラは、深呼吸をして、自分を落ち着かせた。朝日が、崩れ落ちた天井の隙間から入り込んでくる。非常にポカポカして気持ちいい。世間では、人々が起き出す時間帯である。

「行こっか、ハーブ」

『ええ、スバル君とバカロックを助けに行つてやりましょう』

「トランスコード004、ハーブ・ノート！」

所変わって、グレゴダ島要塞の生活施設内、先程、エリーをハンターから呼び出した部下は、彼女の自室に呼び出された。

いくら彼女直属の部下とはいえ、男性が女性の部屋に入るのは不味い。その所為か、部下は少し控えめにしている。現に、酒を勧められても断る始末だ。

「あの副長……私があなたの部屋に入つてて宜しいのですか？」

「まあ、そんな堅いことを言わないで。ビールでも飲む？」

「いえ結構です。朝から酒は仕事に触るので」

「そう、んで話つて何？」

やっと、本題に入り始めた。エリーは、ただの部下の悩み事とでしか捉えていないのか、笑混じりで話している。その態度に部下は、少し怪訝そうな表情をするが、すぐに変えて、真剣な面持ちになる。

「はい、実はこの前、隊長からある命令を受けまして、山岳の方に向かっていたのです。そこで少し、妙な物を見まして」

「妙な物？」

「……ナイトメアに電波変換したチームAの隊員達です」

「っ！！」

エリーは、部下の言葉を聞いて、表情を変えた。ナイトメアというウィザードはムーの古代兵士エラントを改造し、ウィザード化した物だ。だが、人体の影響が多大で、尚且つ、隊員達の精神面を危うくしてしまうため、全般的に使用が禁止されている。ジンは、そのナイトメアはボスアニアには一体も持ちこんでいない筈なのに、この国で発見されたのだ。これは一大事である。しかも、それがKPMの隊員ならば尚更だ。

「確か、チームAはアルカスと研究チームと共に送られてきた部隊よ。本部の考えなら、私たちに何か行ってくるはず。それが何の連絡もないということは、本部の思惑なのか、もしくは、アルカスの独断ということになるはね」

アルカスは、ジンの部隊の者ではない。KPM本部から送られてきた、チームAを含む、特別派遣部隊の隊長である。それが、ナイトメアを使っていたとするならば、大問題だ。エリーの言っていることはもつともである。道理で部下の表情が深刻なわけだ。

「見たのは、山岳のどこら辺？」

「廃ビルがあるところあたりです」

「あそこは、特派の管轄になってるはね。だから、チームAの隊員がいたことにも理解できるわ。その場に居合わせたのはあなただけ？」

「はい」

「ジンには言った？」

「隊長にはまだ言ってます。言うのは、副長……先輩エリーゼに話を聞いて貰ってからと思いまして」

エリーの先程の態度とは明らかに違っていた。それだけ、事態は深刻だからだ。彼女も副隊長である。部下への指示は的確だ。

「そうね。とりあえず、アルカスの独断ということとは、現時点では確定ではないから、まだ、ジンには言わないように」

「はい」

「それから、私の方で調べを入れておくわ。もともと、アルカスからは怪しいにおいが漂っていたしね」

第35話 歪み（後書き）

感想、評価、お待ちしております。

第36話、ノイズの世界で（前書き）

少し、残酷描写が多いかも……
苦手な人は見ない方がいいです。

第36話、ノイズの世界で

ハープ・ノートは無事にノイズウェーブ内に侵入し、中央エリアを目指して歩を進めていた。だが、KPMの隊員達が電波変換したライガ・ザウエルが警備に当たっていて、容易に進むことはできない。ハンターからジャツカーの指示を受けて、何とか潜り抜けている状況だった。ノイズが邪魔をしてステルスPGMのGEIが使えないため、オペレートを受けながら進むしかないのだ。そんな中、ハープ・ノートは、ふと、空中に浮いているノイズの塊を見つめて言った。今は、警備員の姿も見受けられないため、少しくらい喋っても問題は無いだろう。

「スバル君は、こんな世界でいつも戦ってたんだね」

『ミソラ……』

ミソラがノイズまみれのこの世界に入るのは、これが初めてだ。色々、感じる場所があるのだろう。メテオGの時は、ミソラとゴン太はエースPGMを持っていなかったため、ノイズ関連はロツクマンに任せっきりだった。正直、ミソラは悔しかったのだろう。自分分は、ただ、スバルが傷つきながら帰ってくる姿を見るだけなのだが、しかし、これで彼の加勢につくことができる。ミソラはそう思ったのだ。

中央エリアに向かうにつれて、ノイズの塊や結晶の数も多くなっていく。中央に近づくのに沿って、ノイズが強くなっているのだろう。ハープ・ノートの持っているメテオPGMの計測機も、高いノイズ率を示し始めた。

「うっ、また居るよ」

オードグリーンに塗られているライガ・ザウエルの一人が、数メートル先に居て、暇そうに欠伸あくびをしている。幸いにも、こちらに対し背を向けているので、発見されることは無かった。ハープ・ノートは、漆黒のノイズ結晶が地面からはえている所に身を隠した。結晶は、3メートルほどあって、彼女を隠すことなど、造作もないことだった。

「敵か？」

ジャツカーが、ハープ・ノートの発言に反応し、ハンターから通信をかけてきた。

「ええ、またです」

「やり過ぎそうか？」

「ちよつと厳しいですね」

「そうか、じゃあ仕方ない。バトルカードを使って眠らせる」

「スリープソングですね」

スリープソングというバトルカードは、ジャツカーが創ったバトルカードなので、スタンダードクラスだが世界に数枚しかないカードである。その効果と能力は、スピーカーを出現させて、そこから流れる音楽によって相手を眠らせるバトルカードである。潜入作戦において、その効果は絶大で、今回の作戦のためにつくられたと言っても過言ではない。

「バトルカード、スリープソング！」

ハープ・ノートは、バトルカードをハンターに入力すると、スピーカーを出現させた。それを隊員の方に向け、音楽をかける。自分も

バトルカードの効果にかかってしまわないように、彼女は耳栓のような物を取り付けた。

「ん！？ 音楽？……何だか…眠気が……ZZZ……」

初めは突然流れ出した音楽に疑問を抱いた隊員だったが、次第に音楽の虜こいつになっていき、終には、その場に倒れて寝息をたて始めてしまった。

その後も、時には身を隠し、時にはバトルカードを使い、ノイズウェーブを攻略していった。だが、ミソラー人では、攻略は成し得なかったであろう。全てはジャツカーのオペレートあつてのことである。無論、ミソラも、その指示に合わせて行動を起こしていたためということもあるのだが。

そのような所業をしていく内に、とうとう、ハープ・ノートはノイズウェーブの中央エリアまでやってきた。ノイズ結晶体が多く見られる。近くのに生えていたノイズ結晶体の背に隠れ、様子を窺う。中央エリアには基地が建設されていて、監視塔が北、南、東、西の四方角にあり、それらの根本は硬い装甲で覆われた城壁で結ばれていて、敵の侵入を防いでいる。中に入るには、北西にあるゲートがしかない。そこにしかゲートがないからだ。更にその周辺には、ウィルスや、ライガ・ザウエルが哨戒を行っており、容易に近付くことすら出来そうにない。

『さすがに警備は固いか……簡単には通してくれなさそうだな』

ハンターからは通信だけを受信しているが、その声の低さからジャツカーが思い悩んでいるのが目に見えるようだ。流石の彼でもこの局面は厳しい。しかし、この試練を乗り越えれば、スバルが捕えられているグレゴダ島は目と鼻の先になる。引き返すわけにはいかない。

『G Iがあれば何とかなるんだが、ノイズだらけの空間では使い物にもならないからな』

全く彼の言う通りである。G Iを使うことさえ出来れば、この基地の警備をたやすく乗り越えられるのだから。しかし、現実はその甘くない。その現実が、挑戦する者達を悩ませるのだ。

「グレゴダ島まで後少しなのに……」

『ああ、そうなんだが……』

いくら思考を張り巡らそうと、打開策は浮かばない。ロックマンの戦闘力なら、基地を強襲することぐらいは出来るだろうが、ハープ・ノートの戦闘力では返り討ちにあってしまう。かといって、隠密に動けるかと言えば不可能だ。この二つの選択肢の内、一つを選んで、彼女に待ち受ける未来はより過酷な物になる。そのために策を練るのだが、懸命に脳を働かせても時間だけが過ぎていくだけだった。そうしている時、ある意味では奇跡とも言える事が起こった。爆発だ。基地の南エリア監視塔が何者かによって破壊されたのだ。その後も、基地の内部で爆発が起こり、敵対組織か何かの強襲のようには思われた。これは、基地の警備を潜り抜ける好機だ。

ハープ・ノートは、近くに居た隊員二人の会話に耳を済ませる。

A「おい、何者かに基地が襲われてる。増援要請が下りた。一緒に向かうぞ」

B「ああ、敵の数はどれくらいなんだ？」

A「不明だな。しかし、行ってみれば分かる」

B「うむ、俺達はどこへ向かえばいいんだ？」

A「Cブロックだ。城壁が攻撃によって一部、崩壊しているから、そこから中に入れるはずだ」

簡潔な会話を交わし、二人が目的地向かおうとした刹那、彼らの目の前に一人の敵が現れた。周波数変換による瞬間移動を応用した技術だろう。そして敵は、備えていた自分の刀を抜き、目にもとまらぬ速さで、「A」の隊員を斬りつける。

「何だ貴様！？ どわっ！！」

隊員「A」は、刃が赤色にコーティングされた忍者刀のようなもので斬りつけられた後、彼はその場に倒れ込み、電波変換が解除される。本来ならセーフティシステムが、ウィザードと人間を守るのだが、それは正常に作動せず、ウィザードはデリートされ、隊員は血を流して微動だにしない。彼はもう息をしていなかった。もう一人の隊員「B」は、その光景を見て戦慄した。抵抗しようと武器を構えるが、その武器は斬り落とされ、その勢いにのつたまま、敵は彼の腹部を斬る。傷は浅いようで、電波変換は解除されずにいるが、傷口がノイズに汚染され始める。彼は、傷口を押さえながら、地面に張いつくばり、仲間と自分を斬った敵を見つめていた。その視線には恨みが込められている。対する敵の容姿は、全体的に黒い格好をしていて、肩と足に鎧のような装甲を施している。顔の方は、仮面のような物を被っていてよく分からない。ひよっとしたら、そういう顔面なのかもしれない。

その敵は、地面に倒れている隊員「A」を見下すこともせず、ただ、刀を構え、冷徹にそれを彼に向けた。

「……」
「……」

静かに、かつ、冷酷な空気が二人の間に生まれる。隊員は恨みを込めた視線を、敵は単純に「殺せ」という命令を遂行するため、そう

いった二人の心境が冷たい空気を生み出していた。しかし、その空気は長くは続かなかった。

「待て」

「！……………」

敵は唐突に後ろから声をかけられ、瞬時、驚くが、振り返ると同時に刀を収める。隊員は、敵に声をかけた男を見て驚愕する。

「っ！！ お前は……………アルカス！ 何故お前がここに居る？」

「雑魚ごときが知る必要は無い」

「基地はどうした」

「とつくに制圧している。生き残りはお前だけだ」

先日、エリーゼの部下が「アルカス隊の様子がおかしい」と言っていたが、それは本当の様だ。仲間である筈のチームを襲撃していることから、アルカスが何かを目論んでいることは明白だ。それに、アルカスが連れ来ていた。あの「敵」も、ナイトメアとは違い、KPMでは全く見たことのない電波体だ。それらを所持していることからKPMに対し、敵対しているということが分かる。

「応援を……………」

「無駄だ。ジャミングを張っている」

苦肉の策として隊員は応援を呼ぼうとハンターを取り出すが、ジャミングを張っているとアルカスに言われ成す術がなくなり頂垂れる。

「お前は……………敵なのか？」

「そうだ」

隊員の問いに対しアルカスは、さも、昔からそうであったかのように平然としていた。

「本部の命令か!？」

「違う。KPMでは無い。我らのボスのためだ」

恐らく、アルカスは何らかの目的のために送り込まれた作業員なのだろう。彼の言う「我らのボス」というのがジンでは無いことは確かだ。もし、ボス＝ジンだったら、このような所業は行わない。

「この場に居合わせた以上、貴様を生かしておくわけにはいかない」
そう言つて、アルカスは「敵」の持っていたものと同等の刀を取り出しながら、隊員の方に近付いてくる。

「カゲロウ、下がれ」

「……はっ!!」

「敵」もといカゲロウは、アルカスの言われた通りに動く。完全なるアルカスの手下だ。

「ノイズブレードの味を堪能させてやる!」

「うっ……!!」

刃が隊員の体を突きぬける。セーフティシステムは発動せず、やられたと同時に隊員の電波変換は解除され、ウィザードもデリートされる。当然ながら、体をやられた隊員も無傷では済まない。生身の状態のまま、血反吐を吐いて地面に倒れる。そのまま、隊員は絶命した。

一部始終を見ていたハーブ・ノートの心理に戦慄が走った。目撃者は問答無用で殺される。そう思ったのだ。逃げなければ……そう思っても、恐怖心が身体を支配して言うことを聞かず、ブルブルと震えるだけだ。

『おい、どうした！ ミソラ、どうしたんだ！！』

先程から返事の無いハーブ・ノートを不審に思ったのか、ハンター越しでジャッカーが声を荒げている。しかし、ここで応答すると敵に声が聞かれてしまうかもしれないという心境が、ジャッカーへの応答をさせないのだ。

「ん？ そこに誰がいるのか」

一部始終が起こっていた場所から、ハーブ・ノートが隠れている場所までは何メートルか離れているが、何故か、アルカスは不審感を抱いたようだ。気配までは隠しきれなかったのかもしれない。

『ミソラ、絶対に声を出したらダメよ』

「……………」

ハーブの注意にミソラは頷くだけしたが、彼女の瞳には死への恐怖心で一杯で涙があふれていた。

「やはり、誰かいるな。ノイズブレードなら結晶は壊せるか」

アルカスは、ハープ・ノートの隠れている結晶の方に刀を振り上げる。

ノイズブレード、カゲロウも持っていた武器だが、特殊技術で刃にノイズをコーティングさせているため、切れ味はソードに比べれば何倍も上だろう。斬られた隊員二人を見れば分かる。それに、セーフティシステムを無効にする能力もあるようだ。普通なら、システムの加護で人間もウィザードも無傷な筈のだが、それを飛び越えて殺傷された。ウォーロックやハープには無い機能だが、そのシステムが正常に作動しなかったのは、恐らく、ブレードに纏われたノイズの所為だという推測が出来る。

アルカスが刀を振りおろすと同時に、斬撃が飛び、結晶を破壊した。破壊された結晶から、ハープ・ノートの姿が垣間見える。

「目撃者か。しかも指名手配犯のハープ・ノート。カゲロウ達よ」

彼がカゲロウの名前を呼ぶと、数名のカゲロウが彼の周りに集まった。カゲロウの正体は不明だが、鍛え抜かれたKPMの隊員達を倒したことを考えると、かなりの強さを持ち合わせているのだろう。

「殺れ」

その言葉に温かみなど無く、冷たく、まるで汚いゴミを見つけた時の様な声で、アルカスはそう言った。

第37話、覚醒する旋律

アルカスの指示通り、カゲロウ達はハーブ・ノートを一瞬のうちに取り囲み彼女の逃げ場を無くした。

彼らには心というものがあるのだろうか？ いや、もし心があったなら、ハーブ・ノートをデリートしようとは思わないはずだ。例えそれが主君の命であったとしても。しかし、カゲロウは無表情で彼女を取り囲み強靱な刃を向けている。いくら綺麗な言葉を並べて説得しても、心の無い彼らには通じないだろう。

『ミソラ、逃げろ！』

状況を理解したジャッカーが、彼女のハンターから通信越しで逃走するように申し立てている。しかし、ハーブ・ノートは依然として身体が恐怖心に支配されていて、その場から動くことすらできない。仮にその場から逃げようと行動しても既に取り囲まれているため、退路は断たれている。

『ミソラ！ ミソラ！！』

ハーブが彼女の名を叫んでも彼女の心には届かず、恐怖でその声がかき消されてしまう。

万事休す

その言葉は今のミソラにとって、お似合いの言葉となっていた。逃げ場は無い。生き残れる確率はゼロに近い。考えられる選択肢は三つ。抗い最後まで戦うか、潔く死ぬか、命乞いをするか。この三つしかない。しかし、今のミソラにはどれも選べない。なぜなら、

恐怖に支配されている身体には意思が通じないからだ。戦うことも、自分の命にすぎることすら出来ない。最悪だ。

ハープとしては、例え自分の命を投げ打つてもミソラには生き残って欲しい。それが本音ではあるが、少し違う。ミソラの選択肢は三つだが、それにハープの選択肢が加わる。いや、ハープにとっては選択肢などどうでもよかった。最初から選択肢など無かったのだ。選択肢が加わるのではない。加わるのは覚悟だ。その覚悟とは、ハープ・ノートとしてスバル、ロックマンを救うことだ。

『ミソラ、あなたはどうしてここまで来たの？ スバル君を助けるためでしょ！ 違う？ あなたがここで倒れてしまったらスバル君は……ロックマンは助からないのよ……！』

「っ……！」

ハープの覚悟が身を結び、ミソラの脳裏にスバルの笑顔がよぎる。しかし、その笑顔はだんだん遠くなっていき、まるで霧が晴れていくかのようにして彼の顔が消えていく。走馬灯ではない。スバルを思う気持ちが、脳でスバルを映像化させ、そして、そうなって欲しくない強く願い、その中から決意の花が芽生え始める。

「……まだ……まだ終わってないよ」

思えば、スバルと出会った時からミソラは守られていた。戦闘でも日常でも常に。確かに、両親がいなくて、友達との繋がりが薄かったミソラは、スバルにとって守るべき対象であった。だが、ミソラだって女戦士だ。いつまでも守られては戦えない。守られ続けるのではなく共闘。それが彼女の望みだ。今度はミソラが守る番だ。だからこそ、ここで立ちあがらなければ意味がない。やられてしまつては意味がない。この命尽きるまで、燃やし続けていたい。全て

は、スバルのため、みんなのため、絆のため。

『キヤア!!!』

「ハープ!!!」

大事な相棒がカゲロウの一人に両腕を掴まれ、持ちあげられている。もがいてもハープの弱き力ではどうしようもない。そして、もう一人のカゲロウが彼女の小さな体を、とてつもなく強靱なそれで、突きぬこうとしている。絶体絶命のピンチだが、裏を返せば形勢逆転のチャンスでもある。逃げては駄目だ。今こそ、立ちあがる時なのだ。

「ハープを……ハープを放せ！」

「……！」

ハープ・ノートから感じる急激なノイズの上昇に脅威を感じたのか、ハープをデリートしようとしていた二人のカゲロウは、あっさりと彼女を解放し、ハープ・ノートから距離を置く。

『ミ、ミソラ！ そのノイズ率は!?!』

メテオPGMのノイズ率計測装置は、もうすぐ200%に達そうとしていた。このまま行けば……

「ハープ、私はもう逃げないよ。守られるばかりじゃダメもん。だから、私は立ちあがる！ 絶対にスバル君を救い出してみせる!!!」

ハープからミソラへと覚悟が伝達する。覚悟と共に湧きあがる力が、心と体を奮い立たせる。これは奇跡ではない。いずれか起こるはず

である必然だったのだ。絆と覚悟。この二つを持ち合わせた者だけが手に入れられる力。それが究極なのだ。

「ファイナライズ！！ ハープ・ノートペザンテ！！！」

メテオPGMが覚醒した。以前、シドウが言っていた「ミソラのメテオPGMは力を最大限に引き出す物」と言っていた。その通りだった。体中に力が湧き起こり、どこまででも戦えそうな気がする。力を最大限に引き出すこと、それが彼女にとっての「ファイナライズ」だったのだ。

突然の出来事にアルカスを含む敵対側は驚愕した。今まで、ロックマン以下の力で、非力な女としか思っていなかった彼らにとっては、予想外の出来事だった。

「そつ、そんな馬鹿な。ハープ・ノートの力が覚醒した！？ そんなの聞いていないぞ！！ おい、何をボサツとしているカゲロウども！ さつさとデリートしゃがれ！！」

予想を裏切った現実に驚きを隠し切れていないアルカスは、いつもの冷静さはどこに消えたのか、声を荒げている。カゲロウはカゲロウで驚愕してはいたが、主君の命令には逆らえないので、さつさと仕留めにかかる。カゲロウに心は無いが、その彼らをも驚かせる現実だ。ミソラにとって、ファイナライズは相当な力となること予測できる。

「ショックノート、フォルテシシシモ！！」

鼓膜が破けてしまいそうなほどの音量が、スピーカーから流れる。その音符の攻撃に、カゲロウ達はたじろぐ。

「パルスソング、スービト!!」

頭がおかしくなってしまうような旋律が、カゲロウ達を襲った。いくらカゲロウとはいえど、このメロディーには敵わず、頭を抱えて、地面に倒れこんでしまう。

「行くよ、ハープ!」

『ええ!!』

「ノイズフォースピッケバン
NFB ノートペザンテ!!」

巨大なアンプを召喚するとそれをマシンガンストリングを突き通しギターの弦を引く。すると、鼓膜がはち切れそうな大音量と共に壮大な爆発が起こる。当然だが、その爆発に巻き込まれたカゲロウ達も無傷では済まない。デリート寸前まで追い込まれて、地面に倒れる。全員戦闘不能になったということだ。アルカスは半殺しにされた部下を見て、苦虫を噛んだ。

「くっ……だが、こちらにも新兵器がある! 喰らえ、ノイズブレード!!」

もはや自棄になっているアルカスは、とても立て付くことが出来ないはずなのに、ノイズブレードの斬撃をハープ・ノートペザンテに飛ばす。

「シヨックノート フォルテシシシモ!!」

ファイナライズしているハープ・ノートには敵う訳もなく、ノイズブレードの斬撃はシヨックノートに相打ちされ、攻撃はかき消され

る。

「くそ、ここは一時撤退か」

そう言っただけでアルカスはハープ・ノートペザンテから距離を置こうとする。

「待ちなさい!!」

「ふん！ お前ごときが俺を倒せたと思うな レグザガン スモークモード」

アルカスを追ってくるハープ・ノートペザンテに煙幕弾を撃ち込む。被弾すると、彼女の周りにスモークが湧き起こり、彼女の行く手を阻む。

「ゲホゲホ……!!」

ハープ・ノートペザンテが咳き込んでいる間にアルカスは、ウエーブアウトしてしまったようだ。ノイズウェーブに残っているのは現在、ミソラとハープだけだ。結局、アルカスは取り逃がしてしまっただけで、活路を見出すことが出来た。これは喜ぶべきことである。

「ふう〜」

安堵の息と共に、ファイナライズを解く。ファイナライズをミソラには得るものがあつた。スバルが今までどのような境地で戦っていたのか、それを身をもって知ることが出来た。今まで、共闘するということが出来なかつたのは、同じ境地に立っていなかったからだ。しかし、この一件でミソラは覚悟と力を手に入れた。ハープ・ノートに一步近付いたのだ。

第37話、覚醒する旋律（後書き）

ペザンテ⇨重奏に

スービト⇨ただちに

フォルテ⇨強く

元ネタは全て楽譜の専門用語です。中学時代吹奏楽部に入っていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0267p/>

流星のロックマンX～もう一つの世界へ～

2011年12月11日18時52分発行